福　岡　市

鴻臚館跡 III

福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集

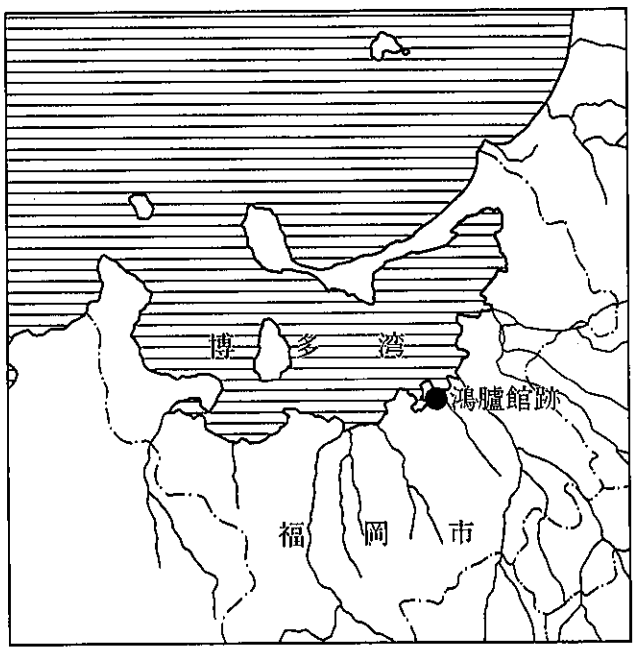
1993

福岡市教育委員会

福　岡　市

鴻臚館跡 III

福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集



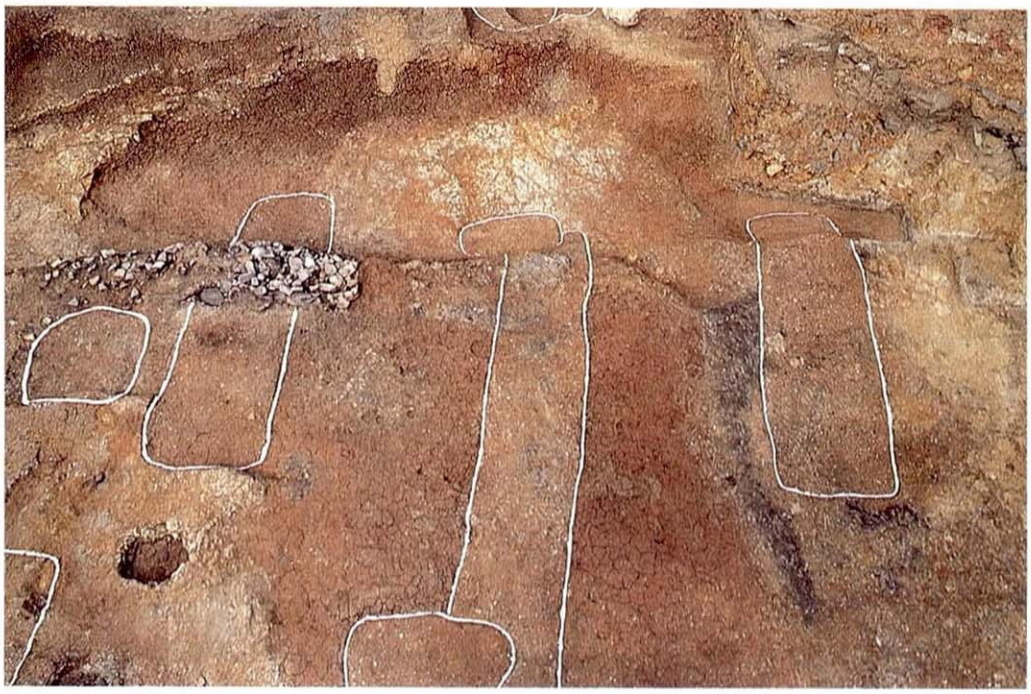
遺跡略号　KRE-7

遺跡調査番号　9130

1993

福岡市教育委員会

第６・７次調査区全景



Ⅰ期東門（南から）

Ⅲ期排水溝とⅠ期柵列

序

福岡市の都市の歴史的原点である「鴻臚館」が再発見されて、はや5年を過ぎようとしています。当市では、鴻臚館再発見後、その重要性を認識し、ただちにその全容解明にむけて、全国的な著名な専門の先生方からなる「鴻臚館跡調査研究指導委員会」を設置し、また担当職員を配し、調査研究指導委員会の御指導のもとに、発掘調査や関連資料の収集に鋭意努めているところであります。

本格調査では、本報告に収録されておりますような、三期にわたる鴻臚館の一画の全容と変遷を明らかにする輝かしい成果を得ております。また、出土遺物には、遠く中近東のイスラム陶器や中国の青磁器、白磁器、韓半島の新羅・高麗陶器など多量の外国産遺物が出土し、鴻臚館の国際性を如実に示しております。

鴻臚館から出土した主な遺物は福岡市博物館に、現地には鴻臚館遺構の一部に覆屋を建て鴻臚館展示館として公開展示しております。あわせて御高覧頂きますようにお願いいたします。

先に、報告書第1、第2集を刊行しましたが、本書はそれに続く第3集として、7次調査の概報と韓半島産無釉陶器についてまとめた報告書ではあります。本報告書が埋蔵文化財への御理解と御認識の一助となり、また、研究資料としても御利用頂ければ幸いであります。

最後になりましたが、常日頃より御理解、御協力頂いている大蔵省福岡財務支局、文化庁、福岡市都市整備局、鴻臚館跡調査研究指導委員会、福岡県教育庁の皆様に、深甚なる謝意を表するものであります。

平成5年1月13日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　言

1　本書は福岡市中央区城内に所在する鴻臚館跡の平成３年度（第７次調査）の調査概報、および、鴻臚館跡調査の諸問題についての考察を加えた報告書である。

2　本書で用いる方位は国土地理院座標第２系による座標北で、磁北はこれより6°2′西偏する。

3　遺構の呼称は記号化し、『鴻臚館跡Ⅰ』に示したとおりである。なお、遺構番号はとうしでふっているので、遺構間における番号の重複はない。

4　本書に使用した実測図の作成は、山崎純男、吉武　学、瀧本正志、高田一弘、川端正夫、白木英敏、田中克子による。

5　製図は山崎がこれにあたった。

6　本書に使用した写真は山崎、吉武、瀧本による。

7　本書の執筆は山崎がおこなった。

8　本書に収録した「鴻臚館跡の諸問題について」の考察は、今回は鴻臚館出土の新羅・高麗陶器についてまとめた。

9　本書の編集は山崎が行った。

本 文 目 次

第１章　序説……1
　１．はじめに……1
　２．調査組織……1
第２章　遺跡の立地と各年度調査区……2
　１．遺跡の立地……2
　２．各年度調査区の位置……5
第３章　第７次調査の概要……6
　１．第７次調査概要……6
　　(1)　検出遺構の概要……6
　　(2)　出土遺物の概要……7
　２．第３～７次調査にみる遺構の変遷……7
　　(1)　Ⅰ期遺構……12
　　(2)　Ⅱ期遺構……12
　　(3)　Ⅲ期遺構……12
　　(4)　Ⅳ期遺構……12
第４章　鴻臚館をめぐる諸問題……13
　鴻臚館跡出土の新羅、高麗陶器……13
　１．はじめに……13
　２．新羅、高麗陶器出土遺構と出土陶器の検討……13
　　(1)　SK—01と出土陶器……14
　　(2)　SK—05と出土陶器……19
　　(3)　SD—07と出土陶器……19
　　(4)　SD—08と出土陶器……19
　　(5)　SD—22と出土陶器……19
　　(6)　SK—23と出土陶器……23
　　(7)　SD—26と出土陶器……23
　　(8)　SK—27と出土陶器……23
　　(9)　SK—28と出土陶器……23
　　(10)　SK—29と出土陶器……23
　　(11)　SD—30と出土陶器……24
　　(12)　SB—31と出土陶器……24

(13) SB—32と出土陶器 …… 27
(14) SK—33と出土陶器 …… 27
(15) SE—35と出土陶器 …… 28
(16) SK—37と出土陶器 …… 28
(17) SK—40と出土陶器 …… 28
(18) SK—43と出土陶器 …… 28
(19) SK—47と出土陶器 …… 28
(20) SB—50と出土陶器 …… 33
(21) SG—51・SD—52と出土陶器 …… 33
(22) SK—54と出土陶器 …… 33
(23) SK—55と出土陶器 …… 33
(24) SK—56と出土陶器 …… 34
(25) SK—57と出土陶器 …… 34
(26) SK—59と出土陶器 …… 37
(27) SK—61と出土陶器 …… 37
(28) SK—62と出土陶器 …… 37
(29) SD—67と出土陶器 …… 37
(30) SK—69と出土陶器 …… 38
(31) SK—70と出土陶器 …… 38
(32) SK—72と出土陶器 …… 38
(33) SK—73と出土陶器 …… 38
(34) SK—75と出土陶器 …… 38
(35) SK—78と出土陶器 …… 43
(36) SK—80と出土陶器 …… 43
(37) SK—82と出土陶器 …… 43
(38) SK—84と出土陶器 …… 44
(39) SK—85と出土陶器 …… 44
(40) SK—89と出土陶器 …… 44
(41) SK—99と出土陶器 …… 44
(42) SK—100と出土陶器 …… 44
(43) SK—91と出土陶器 …… 47
(44) SK—92・93と出土陶器 …… 47
(45) SK—94と出土陶器 …… 47

(46) SK—105と出土陶器……47
(47) SK—147と出土陶器……48
(48) SK—148と出土陶器……48
(49) SD—150と出土陶器……48
(50) SK—151と出土陶器……48
(51) SK—152と出土陶器……48
(52) SK—160と出土陶器……48
(53) SK—208と出土陶器……51
(54) SK—212・213と出土陶器……51
(55) SK—220・221と出土陶器……51
(56) SK—224と出土陶器……55
(57) SK—225と出土陶器……55
(58) SK—243と出土陶器……55
(59) SD—248と出土陶器……55
(60) SK—255と出土陶器……55
(61) SK—256と出土陶器……55
(62) SK—257と出土陶器……56
(63) SK—258と出土陶器……56
(64) SK—261と出土陶器……56
(65) SK—262と出土陶器……56
(66) 南門トレンチ出土の陶器……56
(67) 整地層出土の陶器……56
3．鴻臚館出土の新羅・高麗陶器の編年的予察……68

挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺遺跡……3
Fig. 2 第3～8次調査区の位置……4
Fig. 3 Ⅰ期遺構の配置……8
Fig. 4 Ⅱ期遺構の配置……9
Fig. 5 Ⅲ期遺構の配置……10
Fig. 6 Ⅳ期遺構の配置……11

Fig. 7　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ …… 15
Fig. 8　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図Ⅱ …… 16
Fig. 9　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図Ⅲ …… 17
Fig.10　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図Ⅳ …… 18
Fig.11　SK—01、SK—05、SD—07、SD—08出土新羅・高麗陶器実測図 …… 20
Fig.12　SD—22、26、SK—23、27、28出土新羅・高麗陶器実測図 …… 21
Fig.13　SK—29、SD—30出土新羅・高麗陶器実測図 …… 22
Fig.14　SB—31出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ …… 25
Fig.15　SB—31出土新羅・高麗陶器実測図Ⅱ …… 26
Fig.16　SB—32出土新羅・高麗陶器実測図 …… 29
Fig.17　SK—33出土新羅・高麗陶器実測図 …… 30
Fig.18　SE—35、SK—37出土新羅・高麗陶器実測図 …… 31
Fig.19　SK—40、43、47、54、55、SB—50、SG—51、SD—52出土新羅・高麗陶器実測図 …… 32
Fig.20　SK—56、57出土新羅・高麗陶器実測図 …… 35
Fig.21　SK—57、59、61出土新羅・高麗陶器実測図 …… 36
Fig.22　SK—62、67、69、70出土新羅・高麗陶器実測図 …… 39
Fig.23　SK—70、72、73、75出土新羅・高麗陶器実測図 …… 40
Fig.24　SK—75出土新羅・高麗陶器実測図 …… 41
Fig.25　SK—75、78、80、82、84、85、89、99出土新羅・高麗陶器実測図 …… 42
Fig.26　SK—100出土新羅・高麗陶器実測図 …… 45
Fig.27　SK—91、92、93、94、105出土新羅・高麗陶器実測図 …… 46
Fig.28　SK—105出土新羅・高麗陶器実測図 …… 49
Fig.29　SK—147、148、150、151、152、160出土新羅・高麗陶器実測図 …… 50
Fig.30　SK—208出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ …… 52
Fig.31　SK—208出土新羅・高麗陶器実測図Ⅱ …… 53
Fig.32　SK—208、212、213出土新羅・高麗陶器実測図 …… 54
Fig.33　SK—220、221、224、225、243、255、SD—248出土新羅・高麗陶器実測図 …… 57
Fig.34　SK—255～258、261、262、南門トレンチ出土新羅・高麗陶器実測図 …… 58
Fig.35　南門トレンチ、整地層出土新羅・高麗陶器実測図 …… 59
Fig.36　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ …… 60
Fig.37　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅱ …… 61
Fig.38　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅲ …… 62
Fig.39　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅳ …… 63

Fig.40　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅴ……64
Fig.41　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅵ……65
Fig.42　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅶ……66
Fig.43　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅷ……67
Fig.44　鴻臚館出土新羅・高麗陶器の諸段階……69

図版目次

ＰＬ．１　(1)　第６次調査区全景（西より）
　　(2)　第６次調査区全景（北より）
ＰＬ．２　(1)　第６次調査区布掘り柵列（東より）
　　(2)　第６次調査区布掘り柵列（西より）
ＰＬ．３　(1)　第６次調査区掘立柱柵列（SA325）
　　(2)　第６次調査区掘立柱柵列（SA325）近景
ＰＬ．４　(1)　第６・７次調査区全景
　　(2)　第６・７次調査区全景（西から）
ＰＬ．５　(1)　第７次調査、東門・布掘り柵列・掘立柱柵列・掘立柱建物
　　(2)　第７次調査区東門付近近景
ＰＬ．６　(1)　東門近景（北より）
　　(2)　東門近景（南より）
ＰＬ．７　(1)　掘立柱柵列・建物遠景（南より）
　　(2)　掘立柱柵列・建物近景（南より）
ＰＬ．８　(1)　掘立柱柵列と建物（人物の立っているのが掘立柱建物柱穴）
　　(2)　江戸時代柵列（人物の立っている所が柱穴）
ＰＬ．９　(1)　布掘り柵列と石組み排水溝（南より）
　　(2)　掘立柱建物（SB－321）と道路状遺構
ＰＬ．10　(1)　平安時代石組み排水溝（南より）
　　(2)　平安時代石組み排水溝（西より）
ＰＬ．11　　上　道路状遺構遠景（東より）・下　近景（東より）
ＰＬ．12　(1)　道路状遺構近景（南より）
　　(2)　道路状遺構近景（東より）
ＰＬ．13　(1)　SK－255遺物出土状況

(2) SK－246遺物出土状況
PL. 14 (1) 新羅・高麗陶器Ⅰ（表）
(2) 新羅・高麗陶器Ⅰ（裏）
PL. 15 新羅・高麗陶器Ⅱ（上 表・下 裏）
PL. 16 (1) 新羅・高麗陶器Ⅲ
(2) 新羅・高麗陶器Ⅳ
PL. 17 (1) 新羅・高麗陶器Ⅴ
(2) 新羅・高麗陶器Ⅵ
PL. 18 新羅・高麗陶器Ⅶ（上 表・下 裏）
PL. 19 (1) 新羅・高麗陶器Ⅷ
(2) 新羅・高麗陶器Ⅸ
PL. 20 (1) 新羅・高麗陶器Ⅹ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅠ
PL. 21 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅡ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅢ
PL. 22 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅣ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅤ
PL. 23 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅥ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅦ
PL. 24 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅧ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅨ
PL. 25 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅩ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅠ
PL. 26 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅡ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅢ
PL. 27 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅣ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅤ
PL. 28 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅥ（上 表・下 裏）
PL. 29 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅦ（上 表・下 裏）
PL. 30 (1) 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅧ
(2) 新羅・高麗陶器ⅩⅩⅨ
PL. 31 新羅・高麗陶器共伴土師器（SK－01）
PL. 32 新羅・高麗陶器共伴土師器・黒色土器（SK-01）

第1章　序　説

1．はじめに

1987年12月、福岡市都市整備局によって平和台野球場外野スタンドの改修工事が開始され、それに伴う市教委埋蔵文化財課の試掘調査によって鴻臚館関連遺構が再発見された。この発見は多くの市民の関心をよび、鴻臚館ブームがわきおこったことは周知のことである。おりしも、福岡市は、市制百周年を一年後に控え、海に開かれた活力あるアジアの拠点都市をめざして新たな発展をとげようとして、アジア太平洋博覧会「よかトピア」の開催準備中であり、古代の迎賓館である筑紫館・鴻臚館の再発見は、まさに飛躍しようとする福岡市の歴史的原点であった。

鴻臚館再発見を受けた市当局は、筑紫館・鴻臚館の全容解明をめざし、教育委員会に県内外の一流の専門家からなる鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、また、担当職員2名を配し本格調査の充実をはかると共に、都市整備局に舞鶴公園基本構想委員会を設置し、福岡城・鴻臚館を福岡市のセントラル・パークとして位置づけ都市計画を進めていくこととなった。

1988年から本格調査が実施され、今年度で丸5年をむかえ、鴻臚館の姿もおぼろげながらみえてきた。本報告書では第7次（平成3年度）調査の概報と鴻臚館出土の新羅・高麗陶器について報告したい。

2．調査組織

鴻臚館跡調査研究指導委員会（平成5年、現在）

委員長	平野邦雄	（東京女子大学名誉教授　古代史）
副委員長	横山浩一	（福岡市博物館館長　九州大学名誉教授　考古学）
委　員	川添昭二	（福岡大学教授　九州大学名誉教授　中世史）
	八木　充	（山口大学教授　古代史）
	笹山晴生	（東京大学教授　古代史）
	狩野　久	（岡山大学教授　古代史）
	坪井清足	（大阪文化財センター理事長　考古学）
	渡辺正気	（福岡県文化財保護審議会専門部会委員　考古学）
	小田富士雄	（福岡大学教授　考古学）
	西谷　正	（九州大学教授　考古学）
	石松好雄	（九州歴史資料館副館長　考古学）
	鈴木嘉吉	（奈良国立文化財研究所所長　建築史）
	澤村　仁	（瑞穂短期大学教授　九州芸術工科大学名誉教授　建築史）

中村　一　（京都大学教授　造園学）
杉本正美　（九州芸術工科大学教授　造園学）
渡辺定夫　（東京大学教授　都市工学）

調査期間　第7次調査（平成3年度）
1991年4月1日～1992年3月31日

調査主体　福岡市教育委員会
教育長　井口雄哉、教育次長　井上剛紀、文化財部長　花田兎一、文化財整備課長　後藤　直

調査担当　主査　山崎純男、文化財主事　龍本正志

調査補助員　田中克子（現、太宰府市教育委員会）、川端正夫（現、甘木市教育委員会）、白木英敏（現、宗像市教育委員会）

整理補助　久賀登世子、藤　アイ子、成清直子

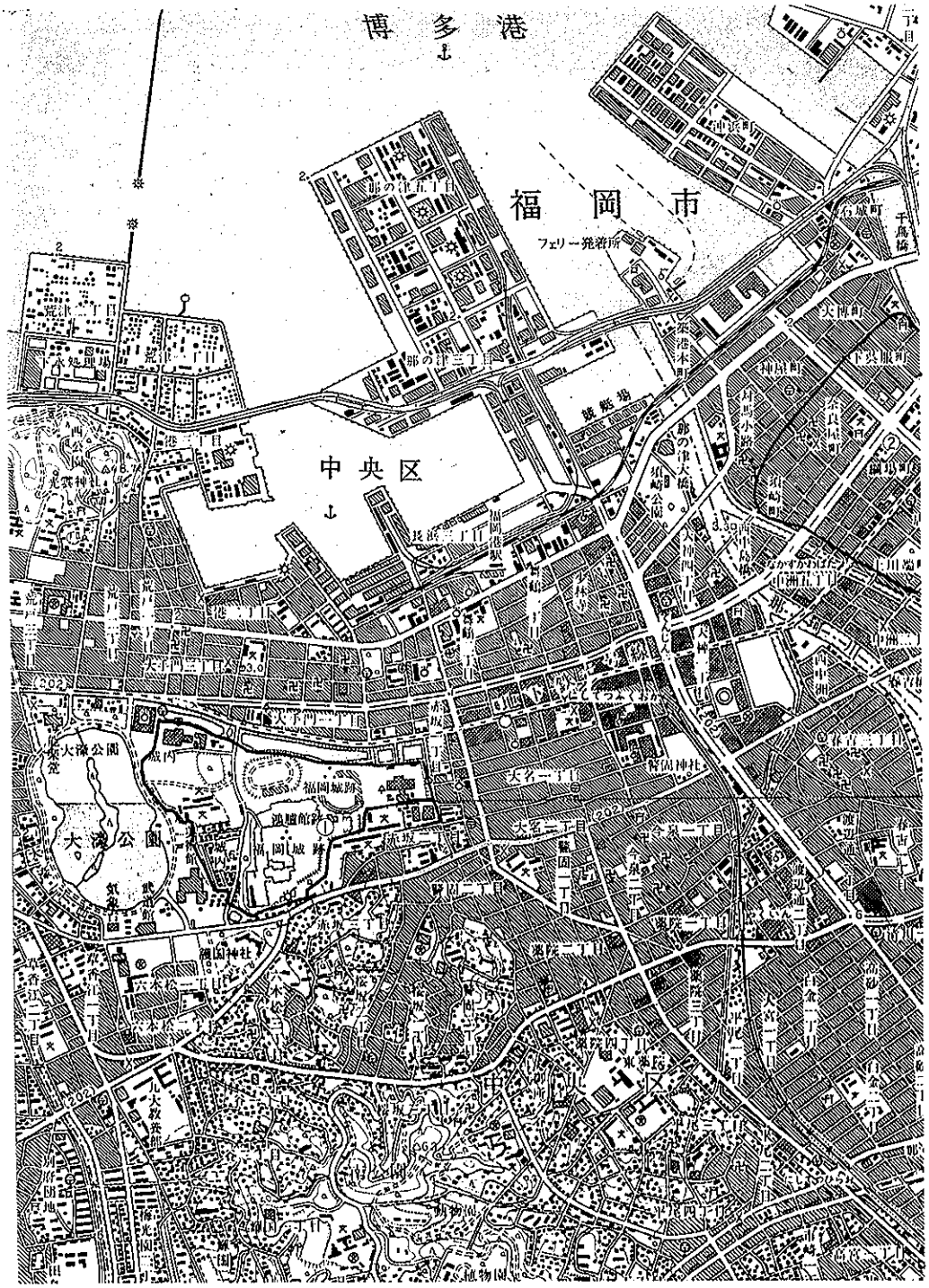
第2章　遺跡の立地と各年度調査区

1．遺跡の立地

鴻臚館（筑紫館）は福岡市中央区城内に所在している。この地は博多湾をめぐる海岸線の中央部にあたり、博多湾に向って突出した丘陵（福崎丘陵）の先端部に位置している。周辺は福岡城築城と最近の開発によって大きく地形が改変し、旧態をとどめていない。鴻臚館（筑紫館）の時代の旧地形を判明させるにはかなりの困難を伴うが、幸いにも貝原益軒の『筑前国続風土記』によって福岡城築城以前の旧地形がわかり、また、発掘調査区の進展に伴う各調査区の観察や調査に平行して実施しているボーリング調査によって旧地形がある程度復原できるようになってきた。

貝原益軒の『筑前国続風土記』には「城の西の方、むかしは福崎の汀まて入海有て、広き潮入の斥地なりしを、此城に築るゝ時、是を埋て平地とせは、人力多く費なん」「城の北の方町ある所、又乾の方荒戸、諸士の屋敷なと、むかしは入海の潟也。中にも荒戸山の下は、大船多く泊りける程の深き海なりしが、此城築き玉ひし初、多くの人力を用ひて、やうやく海を埋め、終に平地として、士民の居宅となれり。」「城の南方は、赤坂山より本丸の山につゝきて、要害のためあしかりしかは、山をほり切て隍とし、隍の南の山をならして平にす」「城内のいぬゐに、小高き山あり。是又本丸より高かりしかは、山をならしてひきゝ岡とし、如水公の兎裘の宅地

1．遺跡の立地と各年度調査区


博多港
福岡市
中央区
フェリー発着所
那の津五丁目
那の津三丁目
荒津一丁目
荒津二丁目
荒津三丁目
港一丁目
港二丁目
港三丁目
港四丁目
港五丁目
港六丁目
港七丁目
港八丁目
港九丁目
港十丁目
港十一丁目
港十二丁目
港十三丁目
港十四丁目
港十五丁目
港十六丁目
港十七丁目
港十八丁目
港十九丁目
港二十丁目
港二十一丁目
港二十二丁目
港二十三丁目
港二十四丁目
港二十五丁目
港二十六丁目
港二十七丁目
港二十八丁目
港二十九丁目
港三十丁目
港三十一丁目
港三十二丁目
港三十三丁目
港三十四丁目
港三十五丁目
港三十六丁目
港三十七丁目
港三十八丁目
港三十九丁目
港四十丁目
港四十一丁目
港四十二丁目
港四十三丁目
港四十四丁目
港四十五丁目
港四十六丁目
港四十七丁目
港四十八丁目
港四十九丁目
港五十丁目
港五十一丁目
港五十二丁目
港五十三丁目
港五十四丁目
港五十五丁目
港五十六丁目
港五十七丁目
港五十八丁目
港五十九丁目
港六十丁目
港六十一丁目
港六十二丁目
港六十三丁目
港六十四丁目
港六十五丁目
港六十六丁目
港六十七丁目
港六十八丁目
港六十九丁目
港七十丁目
港七十一丁目
港七十二丁目
港七十三丁目
港七十四丁目
港七十五丁目
港七十六丁目
港七十七丁目
港七十八丁目
港七十九丁目
港八十丁目
港八十一丁目
港八十二丁目
港八十三丁目
港八十四丁目
港八十五丁目
港八十六丁目
港八十七丁目
港八十八丁目
港八十九丁目
港九十丁目
港九十一丁目
港九十二丁目
港九十三丁目
港九十四丁目
港九十五丁目
港九十六丁目
港九十七丁目
港九十八丁目
港九十九丁目
港百丁目
港百一丁目
港百二丁目
港百三丁目
港百四丁目
港百五丁目
港百六丁目
港百七丁目
港百八丁目
港百九丁目
港百十丁目
港百十一丁目
港百十二丁目
港百十三丁目
港百十四丁目
港百十五丁目
港百十六丁目
港百十七丁目
港百十八丁目
港百十九丁目
港百二十丁目
港百二十一丁目
港百二十二丁目
港百二十三丁目
港百二十四丁目
港百二十五丁目
港百二十六丁目
港百二十七丁目
港百二十八丁目
港百二十九丁目
港百三十丁目
港百三十一丁目
港百三十二丁目
港百三十三丁目
港百三十四丁目
港百三十五丁目
港百三十六丁目
港百三十七丁目
港百三十八丁目
港百三十九丁目
港百四十丁目
港百四十一丁目
港百四十二丁目
港百四十三丁目
港百四十四丁目
港百四十五丁目
港百四十六丁目
港百四十七丁目
港百四十八丁目
港百四十九丁目
港百五十丁目
港百五十一丁目
港百五十二丁目
港百五十三丁目
港百五十四丁目
港百五十五丁目
港百五十六丁目
港百五十七丁目
港百五十八丁目
港百五十九丁目
港百六十丁目
港百六十一丁目
港百六十二丁目
港百六十三丁目
港百六十四丁目
港百六十五丁目
港百六十六丁目
港百六十七丁目
港百六十八丁目
港百六十九丁目
港百七十丁目
港百七十一丁目
港百七十二丁目
港百七十三丁目
港百七十四丁目
港百七十五丁目
港百七十六丁目
港百七十七丁目
港百七十八丁目
港百七十九丁目
港百八十丁目
港百八十一丁目
港百八十二丁目
港百八十三丁目
港百八十四丁目
港百八十五丁目
港百八十六丁目
港百八十七丁目
港百八十八丁目
港百八十九丁目
港百九十丁目
港百九十一丁目
港百九十二丁目
港百九十三丁目
港百九十四丁目
港百九十五丁目
港百九十六丁目
港百九十七丁目
港百九十八丁目
港百九十九丁目
港二百丁目
港二百一丁目
港二百二丁目
港二百三丁目
港二百四丁目
港二百五丁目
港二百六丁目
港二百七丁目
港二百八丁目
港二百九丁目
港二百十丁目
港二百十一丁目
港二百十二丁目
港二百十三丁目
港二百十四丁目
港二百十五丁目
港二百十六丁目
港二百十七丁目
港二百十八丁目
港二百十九丁目
港二百二十丁目
港二百二十一丁目
港二百二十二丁目
港二百二十三丁目
港二百二十四丁目
港二百二十五丁目
港二百二十六丁目
港二百二十七丁目
港二百二十八丁目
港二百二十九丁目
港二百三十丁目
港二百三十一丁目
港二百三十二丁目
港二百三十三丁目
港二百三十四丁目
港二百三十五丁目
港二百三十六丁目
港二百三十七丁目
港二百三十八丁目
港二百三十九丁目
港二百四十丁目
港二百四十一丁目
港二百四十二丁目
港二百四十三丁目
港二百四十四丁目
港二百四十五丁目
港二百四十六丁目
港二百四十七丁目
港二百四十八丁目
港二百四十九丁目
港二百五十丁目
港二百五十一丁目
港二百五十二丁目
港二百五十三丁目
港二百五十四丁目
港二百五十五丁目
港二百五十六丁目
港二百五十七丁目
港二百五十八丁目
港二百五十九丁目
港二百六十丁目
港二百六十一丁目
港二百六十二丁目
港二百六十三丁目
港二百六十四丁目
港二百六十五丁目
港二百六十六丁目
港二百六十七丁目
港二百六十八丁目
港二百六十九丁目
港二百七十丁目
港二百七十一丁目
港二百七十二丁目
港二百七十三丁目
港二百七十四丁目
港二百七十五丁目
港二百七十六丁目
港二百七十七丁目
港二百七十八丁目
港二百七十九丁目
港二百八十丁目
港二百八十一丁目
港二百八十二丁目
港二百八十三丁目
港二百八十四丁目
港二百八十五丁目
港二百八十六丁目
港二百八十七丁目
港二百八十八丁目
港二百八十九丁目
港二百九十丁目
港二百九十一丁目
港二百九十二丁目
港二百九十三丁目
港二百九十四丁目
港二百九十五丁目
港二百九十六丁目
港二百九十七丁目
港二百九十八丁目
港二百九十九丁目
港三百丁目
港三百一丁目
港三百二丁目
港三百三丁目
港三百四丁目
港三百五丁目
港三百六丁目
港三百七丁目
港三百八丁目
港三百九丁目
港三百十丁目
港三百十一丁目
港三百十二丁目
港三百十三丁目
港三百十四丁目
港三百十五丁目
港三百十六丁目
港三百十七丁目
港三百十八丁目
港三百十九丁目
港三百二十丁目
港三百二十一丁目
港三百二十二丁目
港三百二十三丁目
港三百二十四丁目
港三百二十五丁目
港三百二十六丁目
港三百二十七丁目
港三百二十八丁目
港三百二十九丁目
港三百三十丁目
港三百三十一丁目
港三百三十二丁目
港三百三十三丁目
港三百三十四丁目
港三百三十五丁目
港三百三十六丁目
港三百三十七丁目
港三百三十八丁目
港三百三十九丁目
港三百四十丁目
港三百四十一丁目
港三百四十二丁目
港三百四十三丁目
港三百四十四丁目
港三百四十五丁目
港三百四十六丁目
港三百四十七丁目
港三百四十八丁目
港三百四十九丁目
港三百五十丁目
港三百五十一丁目
港三百五十二丁目
港三百五十三丁目
港三百五十四丁目
港三百五十五丁目
港三百五十六丁目
港三百五十七丁目
港三百五十八丁目
港三百五十九丁目
港三百六十丁目
港三百六十一丁目
港三百六十二丁目
港三百六十三丁目
港三百六十四丁目
港三百六十五丁目
港三百六十六丁目
港三百六十七丁目
港三百六十八丁目
港三百六十九丁目
港三百七十丁目
港三百七十一丁目
港三百七十二丁目
港三百七十三丁目
港三百七十四丁目
港三百七十五丁目
港三百七十六丁目
港三百七十七丁目
港三百七十八丁目
港三百七十九丁目
港三百八十丁目
港三百八十一丁目
港三百八十二丁目
港三百八十三丁目
港三百八十四丁目
港三百八十五丁目
港三百八十六丁目
港三百八十七丁目
港三百八十八丁目
港三百八十九丁目
港三百九十丁目
港三百九十一丁目
港三百九十二丁目
港三百九十三丁目
港三百九十四丁目
港三百九十五丁目
港三百九十六丁目
港三百九十七丁目
港三百九十八丁目
港三百九十九丁目
港四百丁目
港四百一丁目
港四百二丁目
港四百三丁目
港四百四丁目
港四百五丁目
港四百六丁目
港四百七丁目
港四百八丁目
港四百九丁目
港四百十丁目
港四百十一丁目
港四百十二丁目
港四百十三丁目
港四百十四丁目
港四百十五丁目
港四百十六丁目
港四百十七丁目
港四百十八丁目
港四百十九丁目
港四百二十丁目
港四百二十一丁目
港四百二十二丁目
港四百二十三丁目
港四百二十四丁目
港四百二十五丁目
港四百二十六丁目
港四百二十七丁目
港四百二十八丁目
港四百二十九丁目
港四百三十丁目
港四百三十一丁目
港四百三十二丁目
港四百三十三丁目
港四百三十四丁目
港四百三十五丁目
港四百三十六丁目
港四百三十七丁目
港四百三十八丁目
港四百三十九丁目
港四百四十丁目
港四百四十一丁目
港四百四十二丁目
港四百四十三丁目
港四百四十四丁目
港四百四十五丁目
港四百四十六丁目
港四百四十七丁目
港四百四十八丁目
港四百四十九丁目
港四百五十丁目
港四百五十一丁目
港四百五十二丁目
港四百五十三丁目
港四百五十四丁目
港四百五十五丁目
港四百五十六丁目
港四百五十七丁目
港四百五十八丁目
港四百五十九丁目
港四百六十丁目
港四百六十一丁目
港四百六十二丁目
港四百六十三丁目
港四百六十四丁目
港四百六十五丁目
港四百六十六丁目
港四百六十七丁目
港四百六十八丁目
港四百六十九丁目
港四百七十丁目
港四百七十一丁目
港四百七十二丁目
港四百七十三丁目
港四百七十四丁目
港四百七十五丁目
港四百七十六丁目
港四百七十七丁目
港四百七十八丁目
港四百七十九丁目
港四百八十丁目
港四百八十一丁目
港四百八十二丁目
港四百八十三丁目
港四百八十四丁目
港四百八十五丁目
港四百八十六丁目
港四百八十七丁目
港四百八十八丁目
港四百八十九丁目
港四百九十丁目
港四百九十一丁目
港四百九十二丁目
港四百九十三丁目
港四百九十四丁目
港四百九十五丁目
港四百九十六丁目
港四百九十七丁目
港四百九十八丁目
港四百九十九丁目
港五百丁目
港五百一丁目
港五百二丁目
港五百三丁目
港五百四丁目
港五百五丁目
港五百六丁目
港五百七丁目
港五百八丁目
港五百九丁目
港五百十丁目
港五百十一丁目
港五百十二丁目
港五百十三丁目
港五百十四丁目
港五百十五丁目
港五百十六丁目
港五百十七丁目
港五百十八丁目
港五百十九丁目
港五百二十丁目
港五百二十一丁目
港五百二十二丁目
港五百二十三丁目
港五百二十四丁目
港五百二十五丁目
港五百二十六丁目
港五百二十七丁目
港五百二十八丁目
港五百二十九丁目
港五百三十丁目
港五百三十一丁目
港五百三十二丁目
港五百三十三丁目
港五百三十四丁目
港五百三十五丁目
港五百三十六丁目
港五百三十七丁目
港五百三十八丁目
港五百三十九丁目
港五百四十丁目
港五百四十一丁目
港五百四十二丁目
港五百四十三丁目
港五百四十四丁目
港五百四十五丁目
港五百四十六丁目
港五百四十七丁目
港五百四十八丁目
港五百四十九丁目
港五百五十丁目
港五百五十一丁目
港五百五十二丁目
港五百五十三丁目
港五百五十四丁目
港五百五十五丁目
港五百五十六丁目
港五百五十七丁目
港五百五十八丁目
港五百五十九丁目
港五百六十丁目
港五百六十一丁目
港五百六十二丁目
港五百六十三丁目
港五百六十四丁目
港五百六十五丁目
港五百六十六丁目
港五百六十七丁目
港五百六十八丁目
港五百六十九丁目
港五百七十丁目
港五百七十一丁目
港五百七十二丁目
港五百七十三丁目
港五百七十四丁目
港五百七十五丁目
港五百七十六丁目
港五百七十七丁目
港五百七十八丁目
港五百七十九丁目
港五百八十丁目
港五百八十一丁目
港五百八十二丁目
港五百八十三丁目
港五百八十四丁目
港五百八十五丁目
港五百八十六丁目
港五百八十七丁目
港五百八十八丁目
港五百八十九丁目
港五百九十丁目
港五百九十一丁目
港五百九十二丁目
港五百九十三丁目
港五百九十四丁目
港五百九十五丁目
港五百九十六丁目
港五百九十七丁目
港五百九十八丁目
港五百九十九丁目
港六百丁目
港六百一丁目
港六百二丁目
港六百三丁目
港六百四丁目
港六百五丁目
港六百六丁目
港六百七丁目
港六百八丁目
港六百九丁目
港六百十丁目
港六百十一丁目
港六百十二丁目
港六百十三丁目
港六百十四丁目
港六百十五丁目
港六百十六丁目
港六百十七丁目
港六百十八丁目
港六百十九丁目
港六百二十丁目
港六百二十一丁目
港六百二十二丁目
港六百二十三丁目
港六百二十四丁目
港六百二十五丁目
港六百二十六丁目
港六百二十七丁目
港六百二十八丁目
港六百二十九丁目
港六百三十丁目
港六百三十一丁目
港六百三十二丁目
港六百三十三丁目
港六百三十四丁目
港六百三十五丁目
港六百三十六丁目
港六百三十七丁目
港六百三十八丁目
港六百三十九丁目
港六百四十丁目
港六百四十一丁目
港六百四十二丁目
港六百四十三丁目
港六百四十四丁目
港六百四十五丁目
港六百四十六丁目
港六百四十七丁目
港六百四十八丁目
港六百四十九丁目
港六百五十丁目
港六百五十一丁目
港六百五十二丁目
港六百五十三丁目
港六百五十四丁目
港六百五十五丁目
港六百五十六丁目
港六百五十七丁目
港六百五十八丁目
港六百五十九丁目
港六百六十丁目
港六百六十一丁目
港六百六十二丁目
港六百六十三丁目
港六百六十四丁目
港六百六十五丁目
港六百六十六丁目
港六百六十七丁目
港六百六十八丁目
港六百六十九丁目
港六百七十丁目
港六百七十一丁目
港六百七十二丁目
港六百七十三丁目
港六百七十四丁目
港六百七十五丁目
港六百七十六丁目
港六百七十七丁目
港六百七十八丁目
港六百七十九丁目
港六百八十丁目
港六百八十一丁目
港六百八十二丁目
港六百八十三丁目
港六百八十四丁目
港六百八十五丁目
港六百八十六丁目
港六百八十七丁目
港六百八十八丁目
港六百八十九丁目
港六百九十丁目
港六百九十一丁目
港六百九十二丁目
港六百九十三丁目
港六百九十四丁目
港六百九十五丁目
港六百九十六丁目
港六百九十七丁目
港六百九十八丁目
港六百九十九丁目
港七百丁目
港七百一丁目
港七百二丁目
港七百三丁目
港七百四丁目
港七百五丁目
港七百六丁目
港七百七丁目
港七百八丁目
港七百九丁目
港七百十丁目
港七百十一丁目
港七百十二丁目
港七百十三丁目
港七百十四丁目
港七百十五丁目
港七百十六丁目
港七百十七丁目
港七百十八丁目
港七百十九丁目
港七百二十丁目
港七百二十一丁目
港七百二十二丁目
港七百二十三丁目
港七百二十四丁目
港七百二十五丁目
港七百二十六丁目
港七百二十七丁目
港七百二十八丁目
港七百二十九丁目
港七百三十丁目
港七百三十一丁目
港七百三十二丁目
港七百三十三丁目
港七百三十四丁目
港七百三十五丁目
港七百三十六丁目
港七百三十七丁目
港七百三十八丁目
港七百三十九丁目
港七百四十丁目
港七百四十一丁目
港七百四十二丁目
港七百四十三丁目
港七百四十四丁目
港七百四十五丁目
港七百四十六丁目
港七百四十七丁目
港七百四十八丁目
港七百四十九丁目
港七百五十丁目
港七百五十一丁目
港七百五十二丁目
港七百五十三丁目
港七百五十四丁目
港七百五十五丁目
港七百五十六丁目
港七百五十七丁目
港七百五十八丁目
港七百五十九丁目
港七百六十丁目
港七百六十一丁目
港七百六十二丁目
港七百六十三丁目
港七百六十四丁目
港七百六十五丁目
港七百六十六丁目
港七百六十七丁目
港七百六十八丁目
港七百六十九丁目
港七百七十丁目
港七百七十一丁目
港七百七十二丁目
港七百七十三丁目
港七百七十四丁目
港七百七十五丁目
港七百七十六丁目
港七百七十七丁目
港七百七十八丁目
港七百七十九丁目
港七百八十丁目
港七百八十一丁目
港七百八十二丁目
港七百八十三丁目
港七百八十四丁目
港七百八十五丁目
港七百八十六丁目
港七百八十七丁目
港七百八十八丁目
港七百八十九丁目
港七百九十丁目
港七百九十一丁目
港七百九十二丁目
港七百九十三丁目
港七百九十四丁目
港七百九十五丁目
港七百九十六丁目
港七百九十七丁目
港七百九十八丁目
港七百九十九丁目
港八百丁目
港八百一丁目
港八百二丁目
港八百三丁目
港八百四丁目
港八百五丁目
港八百六丁目
港八百七丁目
港八百八丁目
港八百九丁目
港八百十丁目
港八百十一丁目
港八百十二丁目
港八百十三丁目
港八百十四丁目
港八百十五丁目
港八百十六丁目
港八百十七丁目
港八百十八丁目
港八百十九丁目
港八百二十丁目
港八百二十一丁目
港八百二十二丁目
港八百二十三丁目
港八百二十四丁目
港八百二十五丁目
港八百二十六丁目
港八百二十七丁目
港八百二十八丁目
港八百二十九丁目
港八百三十丁目
港八百三十一丁目
港八百三十二丁目
港八百三十三丁目
港八百三十四丁目
港八百三十五丁目
港八百三十六丁目
港八百三十七丁目
港八百三十八丁目
港八百三十九丁目
港八百四十丁目
港八百四十一丁目
港八百四十二丁目
港八百四十三丁目
港八百四十四丁目
港八百四十五丁目
港八百四十六丁目
港八百四十七丁目
港八百四十八丁目
港八百四十九丁目
港八百五十丁目
港八百五十一丁目
港八百五十二丁目
港八百五十三丁目
港八百五十四丁目
港八百五十五丁目
港八百五十六丁目
港八百五十七丁目
港八百五十八丁目
港八百五十九丁目
港八百六十丁目
港八百六十一丁目
港八百六十二丁目
港八百六十三丁目
港八百六十四丁目
港八百六十五丁目
港八百六十六丁目
港八百六十七丁目
港八百六十八丁目
港八百六十九丁目
港八百七十丁目
港八百七十一丁目
港八百七十二丁目
港八百七十三丁目
港八百七十四丁目
港八百七十五丁目
港八百七十六丁目
港八百七十七丁目
港八百七十八丁目
港八百七十九丁目
港八百八十丁目
港八百八十一丁目
港八百八十二丁目
港八百八十三丁目
港八百八十四丁目
港八百八十五丁目
港八百八十六丁目
港八百八十七丁目
港八百八十八丁目
港八百八十九丁目
港八百九十丁目
港八百九十一丁目
港八百九十二丁目
港八百九十三丁目
港八百九十四丁目
港八百九十五丁目
港八百九十六丁目
港八百九十七丁目
港八百九十八丁目
港八百九十九丁目
港九百丁目
港九百一丁目
港九百二丁目
港九百三丁目
港九百四丁目
港九百五丁目
港九百六丁目
港九百七丁目
港九百八丁目
港九百九丁目
港九百十丁目
港九百十一丁目
港九百十二丁目
港九百十三丁目
港九百十四丁目
港九百十五丁目
港九百十六丁目
港九百十七丁目
港九百十八丁目
港九百十九丁目
港九百二十丁目
港九百二十一丁目
港九百二十二丁目
港九百二十三丁目
港九百二十四丁目
港九百二十五丁目
港九百二十六丁目
港九百二十七丁目
港九百二十八丁目
港九百二十九丁目
港九百三十丁目
港九百三十一丁目
港九百三十二丁目
港九百三十三丁目
港九百三十四丁目
港九百三十五丁目
港九百三十六丁目
港九百三十七丁目
港九百三十八丁目
港九百三十九丁目
港九百四十丁目
港九百四十一丁目
港九百四十二丁目
港九百四十三丁目
港九百四十四丁目
港九百四十五丁目
港九百四十六丁目
港九百四十七丁目
港九百四十八丁目
港九百四十九丁目
港九百五十丁目
港九百五十一丁目
港九百五十二丁目
港九百五十三丁目
港九百五十四丁目
港九百五十五丁目
港九百五十六丁目
港九百五十七丁目
港九百五十八丁目
港九百五十九丁目
港九百六十丁目
港九百六十一丁目
港九百六十二丁目
港九百六十三丁目
港九百六十四丁目
港九百六十五丁目
港九百六十六丁目
港九百六十七丁目
港九百六十八丁目
港九百六十九丁目
港九百七十丁目
港九百七十一丁目
港九百七十二丁目
港九百七十三丁目
港九百七十四丁目
港九百七十五丁目
港九百七十六丁目
港九百七十七丁目
港九百七十八丁目
港九百七十九丁目
港九百八十丁目
港九百八十一丁目
港九百八十二丁目
港九百八十三丁目
港九百八十四丁目
港九百八十五丁目
港九百八十六丁目
港九百八十七丁目
港九百八十八丁目
港九百八十九丁目
港九百九十丁目
港九百九十一丁目
港九百九十二丁目
港九百九十三丁目
港九百九十四丁目
港九百九十五丁目
港九百九十六丁目
港九百九十七丁目
港九百九十八丁目
港九百九十九丁目
港千丁目
港千一丁目
港千二丁目
港千三丁目
港千四丁目
港千五丁目
港千六丁目
港千七丁目
港千八丁目
港千九丁目
港千十丁目
港千十一丁目
港千十二丁目
港千十三丁目
港千十四丁目
港千十五丁目
港千十六丁目
港千十七丁目
港千十八丁目
港千十九丁目
港千二十丁目
港千二十一丁目
港千二十二丁目
港千二十三丁目
港千二十四丁目
港千二十五丁目
港千二十六丁目
港千二十七丁目
港千二十八丁目
港千二十九丁目
港千三十丁目
港千三十一丁目
港千三十二丁目
港千三十三丁目
港千三十四丁目
港千三十五丁目
港千三十六丁目
港千三十七丁目
港千三十八丁目
港千三十九丁目
港千四十丁目
港千四十一丁目
港千四十二丁目
港千四十三丁目
港千四十四丁目
港千四十五丁目
港千四十六丁目
港千四十七丁目
港千四十八丁目
港千四十九丁目
港千五十丁目
港千五十一丁目
港千五十二丁目
港千五十三丁目
港千五十四丁目
港千五十五丁目
港千五十六丁目
港千五十七丁目
港千五十八丁目
港千五十九丁目
港千六十丁目
港千六十一丁目
港千六十二丁目
港千六十三丁目
港千六十四丁目
港千六十五丁目
港千六十六丁目
港千六十七丁目
港千六十八丁目
港千六十九丁目
港千七十丁目
港千七十一丁目
港千七十二丁目
港千七十三丁目
港千七十四丁目
港千七十五丁目
港千七十六丁目
港千七十七丁目
港千七十八丁目
港千七十九丁目
港千八十丁目
港千八十一丁目
港千八十二丁目
港千八十三丁目
港千八十四丁目
港千八十五丁目
港千八十六丁目
港千八十七丁目
港千八十八丁目
港千八十九丁目
港千九十丁目
港千九十一丁目
港千九十二丁目
港千九十三丁目
港千九十四丁目
港千九十五丁目
港千九十六丁目
港千九十七丁目
港千九十八丁目
港千九十九丁目
港千百丁目
港千百一丁目
港千百二丁目
港千百三丁目
港千百四丁目
港千百五丁目
港千百六丁目
港千百七丁目
港千百八丁目
港千百九丁目
港千百十丁目
港千百十一丁目
港千百十二丁目
港千百十三丁目
港千百十四丁目
港千百十五丁目
港千百十六丁目
港千百十七丁目
港千百十八丁目
港千百十九丁目
港千百二十丁目
港千百二十一丁目
港千百二十二丁目
港千百二十三丁目
港千百二十四丁目
港千百二十五丁目
港千百二十六丁目
港千百二十七丁目
港千百二十八丁目
港千百二十九丁目
港千百三十丁目
港千百三十一丁目
港千百三十二丁目
港千百三十三丁目
港千百三十四丁目
港千百三十五丁目
港千百三十六丁目
港千百三十七丁目
港千百三十八丁目
港千百三十九丁目
港千百四十丁目
港千百四十一丁目
港千百四十二丁目
港千百四十三丁目
港千百四十四丁目
港千百四十五丁目
港千百四十六丁目
港千百四十七丁目
港千百四十八丁目
港千百四十九丁目
港千百五十丁目
港千百五十一丁目
港千百五十二丁目
港千百五十三丁目
港千百五十四丁目
港千百五十五丁目
港千百五十六丁目
港千百五十七丁目
港千百五十八丁目
港千百五十九丁目
港千百六十丁目
港千百六十一丁目
港千百六十二丁目
港千百六十三丁目
港千百六十四丁目
港千百六十五丁目
港千百六十六丁目
港千百六十七丁目
港千百六十八丁目
港千百六十九丁目
港千百七十丁目
港千百七十一丁目
港千百七十二丁目
港千百七十三丁目
港千百七十四丁目
港千百七十五丁目
港千百七十六丁目
港千百七十七丁目
港千百七十八丁目
港千百七十九丁目
港千百八十丁目
港千百八十一丁目
港千百八十二丁目
港千百八十三丁目
港千百八十四丁目
港千百八十五丁目
港千百八十六丁目
港千百八十七丁目
港千百八十八丁目
港千百八十九丁目
港千百九十丁目
港千百九十一丁目
港千百九十二丁目
港千百九十三丁目
港千百九十四丁目
港千百九十五丁目
港千百九十六丁目
港千百九十七丁目
港千百九十八丁目
港千百九十九丁目
港二千丁目
港二千一丁目
港二千二丁目
港二千三丁目
港二千四丁目
港二千五丁目
港二千六丁目
港二千七丁目
港二千八丁目
港二千九丁目
港二千十丁目
港二千十一丁目
港二千十二丁目
港二千十三丁目
港二千十四丁目
港二千十五丁目
港二千十六丁目
港二千十七丁目
港二千十八丁目
港二千十九丁目
港二千二十丁目
港二千二十一丁目
港二千二十二丁目
港二千二十三丁目
港二千二十四丁目
港二千二十五丁目
港二千二十六丁目
港二千二十七丁目
港二千二十八丁目
港二千二十九丁目
港二千三十丁目
港二千三十一丁目
港二千三十二丁目
港二千三十三丁目
港二千三十四丁目
港二千三十五丁目
港二千三十六丁目
港二千三十七丁目
港二千三十八丁目
港二千三十九丁目
港二千四十丁目
港二千四十一丁目
港二千四十二丁目
港二千四十三丁目
港二千四十四丁目
港二千四十五丁目
港二千四十六丁目
港二千四十七丁目
港二千四十八丁目
港二千四十九丁目
港二千五十丁目
港二千五十一丁目
港二千五十二丁目
港二千五十三丁目
港二千五十四丁目
港二千五十五丁目
港二千五十六丁目
港二千五十七丁目
港二千五十八丁目
港二千五十九丁目
港二千六十丁目
港二千六十一丁目
港二千六十二丁目
港二千六十三丁目
港二千六十四丁目
港二千六十五丁目
港二千六十六丁目
港二千六十七丁目
港二千六十八丁目
港二千六十九丁目
港二千七十丁目
港二千七十一丁目
港二千七十二丁目
港二千七十三丁目
港二千七十四丁目
港二千七十五丁目
港二千七十六丁目
港二千七十七丁目
港二千七十八丁目
港二千七十九丁目
港二千八十丁目
港二千八十一丁目
港二千八十二丁目
港二千八十三丁目
港二千八十四丁目
港二千八十五丁目
港二千八十六丁目
港二千八十七丁目
港二千八十八丁目
港二千八十九丁目
港二千九十丁目
港二千九十一丁目
港二千九十二丁目
港二千九十三丁目
港二千九十四丁目
港二千九十五丁目
港二千九十六丁目
港二千九十七丁目
港二千九十八丁目
港二千九十九丁目
港三千丁目
港三千一丁目
港三千二丁目
港三千三丁目
港三千四丁目
港三千五丁目
港三千六丁目
港三千七丁目
港三千八丁目
港三千九丁目
港三千十丁目
港三千十一丁目
港三千十二丁目
港三千十三丁目
港三千十四丁目
港三千十五丁目
港三千十六丁目
港三千十七丁目
港三千十八丁目
港三千十九丁目
港三千二十丁目
港三千二十一丁目
港三千二十二丁目
港三千二十三丁目
港三千二十四丁目
港三千二十五丁目
港三千二十六丁目
港三千二十七丁目
港三千二十八丁目
港三千二十九丁目
港三千三十丁目
港三千三十一丁目
港三千三十二丁目
港三千三十三丁目
港三千三十四丁目
港三千三十五丁目
港三千三十六丁目
港三千三十七丁目
港三千三十八丁目
港三千三十九丁目
港三千四十丁目
港三千四十一丁目
港三千四十二丁目
港三千四十三丁目
港三千四十四丁目
港三千四十五丁目
港三千四十六丁目
港三千四十七丁目
港三千四十八丁目
港三千四十九丁目
港三千五十丁目
港三千五十一丁目
港三千五十二丁目
港三千五十三丁目
港三千五十四丁目
港三千五十五丁目
港三千五十六丁目
港三千五十七丁目
港三千五十八丁目
港三千五十九丁目
港三千六十丁目
港三千六十一丁目
港三千六十二丁目
港三千六十三丁目
港三千六十四丁目
港三千六十五丁目
港三千六十六丁目
港三千六十七丁目
港三千六十八丁目
港三千六十九丁目
港三千七十丁目
港三千七十一丁目
港三千七十二丁目
港三千七十三丁目
港三千七十四丁目
港三千七十五丁目
港三千七十六丁目
港三千七十七丁目
港三千七十八丁目
港三千七十九丁目
港三千八十丁目
港三千八十一丁目
港三千八十二丁目
港三千八十三丁目
港三千八十四丁目
港三千八十五丁目
港三千八十六丁目
港三千八十七丁目
港三千八十八丁目
港三千八十九丁目
港三千九十丁目
港三千九十一丁目
港三千九十二丁目
港三千九十三丁目
港三千九十四丁目
港三千九十五丁目
港三千九十六丁目
港三千九十七丁目
港三千九十八丁目
港三千九十九丁目
港四千丁目
港四千一丁目
港四千二丁目
港四千三丁目
港四千四丁目
港四千五丁目
港四千六丁目
港四千七丁目
港四千八丁目
港四千九丁目
港四千十丁目
港四千十一丁目
港四千十二丁目
港四千十三丁目
港四千十四丁目
港四千十五丁目
港四千十六丁目
港四千十七丁目
港四千十八丁目
港四千十九丁目
港四千二十丁目
港四千二十一丁目
港四千二十二丁目
港四千二十三丁目
港四千二十四丁目
港四千二十五丁目
港四千二十六丁目
港四千二十七丁目
港四千二十八丁目
港四千二十九丁目
港四千三十丁目
港四千三十一丁目
港四千三十二丁目
港四千三十三丁目
港四千三十四丁目
港四千三十五丁目
港四千三十六丁目
港四千三十七丁目
港四千三十八丁目
港四千三十九丁目
港四千四十丁目
港四千四十一丁目
港四千四十二丁目
港四千四十三丁目
港四千四十四丁目
港四千四十五丁目
港四千四十六丁目
港四千四十七丁目
港四千四十八丁目
港四千四十九丁目
港四千五十丁目
港四千五十一丁目
港四千五十二丁目
港四千五十三丁目
港四千五十四丁目
港四千五十五丁目
港四千五十六丁目
港四千五十七丁目
港四千五十八丁目
港四千五十九丁目
港四千六十丁目
港四千六十一丁目
港四千六十二丁目
港四千六十三丁目
港四千六十四丁目
港四千六十五丁目
港四千六十六丁目
港四千六十七丁目
港四千六十八丁目
港四千六十九丁目
港四千七十丁目
港四千七十一丁目
港四千七十二丁目
港四千七十三丁目
港四千七十四丁目
港四千七十五丁目
港四千七十六丁目
港四千七十七丁目
港四千七十八丁目
港四千七十九丁目
港四千八十丁目
港四千八十一丁目
港四千八十二丁目
港四千八十三丁目
港四千八十四丁目
港四千八十五丁目
港四千八十六丁目
港四千八十七丁目
港四千八十八丁目
港四千八十九丁目
港四千九十丁目
港四千九十一丁目
港四千九十二丁目
港四千九十三丁目
港四千九十四丁目
港四千九十五丁目
港四千九十六丁目
港四千九十七丁目
港四千九十八丁目
港四千九十九丁目
港五千丁目
港五千一丁目
港五千二丁目
港五千三丁目
港五千四丁目
港五千五丁目
港五千六丁目
港五千七丁目
港五千八丁目
港五千九丁目
港五千十丁目
港五千十一丁目
港五千十二丁目
港五千十三丁目
港五千十四丁目
港五千十五丁目
港五千十六丁目
港五千十七丁目
港五千十八丁目
港五千十九丁目
港五千二十丁目
港五千二十一丁目
港五千二十二丁目
港五千二十三丁目
港五千二十四丁目
港五千二十五丁目
港五千二十六丁目
港五千二十七丁目
港五千二十八丁目
港五千二十九丁目
港五千三十丁目
港五千三十一丁目
港五千三十二丁目
港五千三十三丁目
港五千三十四丁目
港五千三十五丁目
港五千三十六丁目
港五千三十七丁目
港五千三十八丁目
港五千三十九丁目
港五千四十丁目
港五千四十一丁目
港五千四十二丁目
港五千四十三丁目
港五千四十四丁目
港五千四十五丁目
港五千四十六丁目
港五千四十七丁目
港五千四十八丁目
港五千四十九丁目
港五千五十丁目
港五千五十一丁目
港五千五十二丁目
港五千五十三丁目
港五千五十四丁目
港五千五十五丁目
港五千五十六丁目
港五千五十七丁目
港五千五十八丁目
港五千五十九丁目
港五千六十丁目
港五千六十一丁目
港五千六十二丁目
港五千六十三丁目
港五千六十四丁目
港五千六十五丁目
港五千六十六丁目
港五千六十七丁目
港五千六十八丁目
港五千六十九丁目
港五千七十丁目
港五千七十一丁目
港五千七十二丁目
港五千七十三丁目
港五千七十四丁目
港五千七十五丁目
港五千七十六丁目
港五千七十七丁目
港五千七十八丁目
港五千七十九丁目
港五千八十丁目
港五千八十一丁目
港五千八十二丁目
港五千八十三丁目
港五千八十四丁目
港五千八十五丁目
港五千八十六丁目
港五千八十七丁目
港五千八十八丁目
港五千八十九丁目
港五千九十丁目
港五千九十一丁目
港五千九十二丁目
港五千九十三丁目
港五千九十四丁目
港五千九十五丁目
港五千九十六丁目
港五千九十七丁目
港五千九十八丁目
港五千九十九丁目
港六千丁目
港六千一丁目
港六千二丁目
港六千三丁目
港六千四丁目
港六千五丁目
港六千六丁目
港六千七丁目
港六千八丁目
港六千九丁目
港六千十丁目
港六千十一丁目
港六千十二丁目
港六千十三丁目
港六千十四丁目
港六千十五丁目
港六千十六丁目
港六千十七丁目
港六千十八丁目
港六千十九丁目
港六千二十丁目
港六千二十一丁目
港六千二十二丁目
港六千二十三丁目
港六千二十四丁目
港六千二十五丁目
港六千二十六丁目
港六千二十七丁目
港六千二十八丁目
港六千二十九丁目
港六千三十丁目
港六千三十一丁目
港六千三十二丁目
港六千三十三丁目
港六千三十四丁目
港六千三十五丁目
港六千三十六丁目
港六千三十七丁目
港六千三十八丁目
港六千三十九丁目
港六千四十丁目
港六千四十一丁目
港六千四十二丁目
港六千四十三丁目
港六千四十四丁目
港六千四十五丁目
港六千四十六丁目
港六千四十七丁目
港六千四十八丁目
港六千四十九丁目
港六千五十丁目
港六千五十一丁目
港六千五十二丁目
港六千五十三丁目
港六千五十四丁目
港六千五十五丁目
港六千五十六丁目
港六千五十七丁目
港六千五十八丁目
港六千五十九丁目
港六千六十丁目
港六千六十一丁目
港六千六十二丁目
港六千六十三丁目
港六千六十四丁目
港六千六十五丁目
港六千六十六丁目
港六千六十七丁目
港六千六十八丁目
港六千六十九丁目
港六千七十丁目
港六千七十一丁目
港六千七十二丁目
港六千七十三丁目
港六千七十四丁目
港六千七十五丁目
港六千七十六丁目
港六千七十七丁目
港六千七十八丁目
港六千七十九丁目
港六千八十丁目
港六千八十一丁目
港六千八十二丁目
港六千八十三丁目
港六千八十四丁目
港六千八十五丁目
港六千八十六丁目
港六千八十七丁目
港六千八十八丁目
港六千八十九丁目
港六千九十丁目
港六千九十一丁目
港六千九十二丁目
港六千九十三丁目

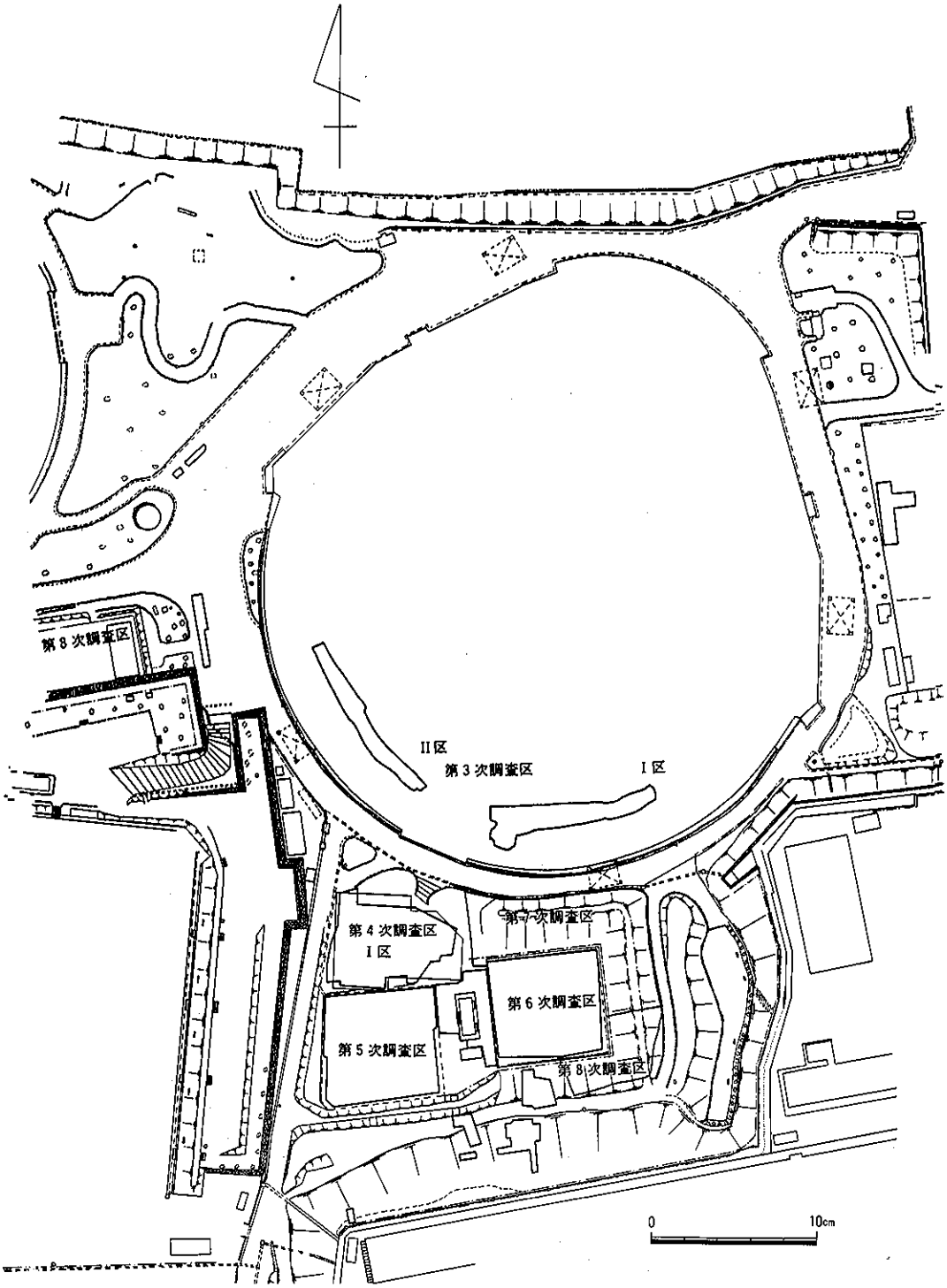


Fig. 2　第３～８次調査区の位置

とせらる」の記事がある。これらの記載、調査成果、ボーリング調査の成果から福岡城の周辺および城内の旧地形を復原すれば以下の如くなろう。

城の西側の現在の大濠公園には大きな入江がはいり込み潮が入り込んでいたことがわかる。城の前面（北側）には狭い砂丘が存在するものの海岸線が間近にせまり、後面（南側）は赤坂山に連なる丘陵となっている。この丘陵は城内にものびてきている。益軒の記事や天守台から発見された箱式石棺の存在からみて、南からのびてくる丘陵は天守台から北西方面の黒田如水屋敷跡（御鷹屋敷）にむかってのび、天守台と御鷹屋敷の所にそれぞれ頂部があったことが推測される。なお、ボーリング調査の結果では天守台と御鷹屋敷の間の西側に大きな谷が存在することが予測される。また、城の東端にある福岡高等裁判所と平和台野球場の間にも大きな谷が存在することが、第２次調査の成果から明らかである。第３次調査やボーリング調査の成果から各所に谷状の地形が認められるので、南からのびる丘陵は天守台から御鷹屋敷にのびる尾根を主幹とし、その東西に枝状に分かれた支脈が数多く形成されていたと予測される。これらの谷は筑紫館・鴻臚館の時代に大規模な造成工事によって、埋められている。特に平和台野球場南半部から南側テニス・コート、テニス・コート西側、二の丸内のラグビー場にかけては、かなり大きな舌状の支脈がのびていて、それを削平し、両側の谷を埋め、かなりの広さの屋敷地を確保していることが判明した。現在調査を進めているテニス・コート部分の方形の張り出しは、この時形成されたもので、築城においてはそのまま利用していることになる。大規模な造成工事がおこなわれたことは、谷部埋めたてだけでなく、古墳が破壊され、丹塗りの古墳石室石材や銅鏡・銅鏃・玉類が、調査区の各所から出土することからも傍証できる。福岡城の築城に際しては、城周囲の堀切りや堀の掘削は別にして、基本的には鴻臚館の造成を踏襲し、削平された所は少なく、大部分は盛土によっていることが予測できる。

２．各年度調査区の位置

各年度調査区の位置関係はFig. 2 に示したとおりである。第３次調査区は平和台野球場外野席を対象としているが、緊急調査であったため面積は狭い。第４次調査は野球場南側の緑地帯を対象とした。各遺構の関連性把握が困難であったために、途中から樹木の移植をおこない調査区の確保をはかった。調査面積830m²。第５次調査は第４次調査区南側テニス・コート部分を対象とした。一部、南門検出のため南側福岡城土塁にも試掘トレンチを入れる。調査面積1155m²。第６次調査は第５次調査区東側のテニス・コートを対象とした。調査面積1100m²、第７次調査は第６次調査区北側と東側のテニス・コート観客席土盛下を対象とした。調査面積1600m²、観客席土盛は一部連隊弾薬庫土塁を利用しており、コンクリートの入口部がそのまま埋め込まれており、調査に困難をきわめた。第８次調査は野球場西側の弓道場跡地と、テニス・コート南東コーナー部分を対象とした。調査面積2100m²。

第３章　第７次調査の概要

１．第７次調査概要

(1)　検出遺構の概要

第７次調査は平和台野球場南側、東側テニス・コートの北・東側観客席の下を対象として実施した。観客席は第24連隊の弾薬庫土壘を利用してつくられており、観客席の盛土の下には、弾薬庫出入口のコンクリートのアーチやその他の施設が埋め込まれていて調査は難行を極めた。土壘下の状況は他の調査区と同様で、江戸時代の旧表土があり、その下に有機質の黒色土があり、鴻臚館時代の包含層となっている。その分布範囲はせまく部分的で、大部分は削平され、直接、岩盤になっている。故に、遺構の残存状態は悪く、Ⅲ期に比定される礎石建物群の続きは第６次調査区同様に完全に削滅していた。

本調査区内で検出された鴻臚館関連遺構は次の如くである。調査区西側では版築状の地業がみられるが、基壇であるか否かは確定できなかった。範囲はかなりの広さにわたっている。時期的には礎石建物の上に乗るのでⅢ期遺構より後出する。ゴミ捨て用の土坑は３基（SK―208、SK―243、SK―255）を確認した。SK―208とSK―243は方形の端正に掘り込まれており、SK―255は不整楕円形をている。中からは瓦類、中国産青磁器、高麗陶器、ガラス片等が出土している。SK―255は次に述べる奈良時代と考えられる掘立柱柱穴を切っている。奈良時代と考えられる遺構は掘立柱建物４棟と掘立柱柵列である。建物柱穴掘り方は一辺が１～1.2ｍの方形掘り込みで大規模である。配置はL字形をなす。この建物群を囲むように東側に柵列があり、第３次、第６次調査で確認した柵列と連なり、方形の区画をつくり出すと考えられる。この柵列柱穴はⅠ期の布掘り柵列の布掘りを切ってつくられている。Ⅰ期の布掘り柵列は調査区内で南東部コーナーを確認し、第３次～第６次調査の成果から完全な方形区画が復原できる。その区画の規模は東西75ｍ、南北58ｍとなる。また、東辺の中央部には門址を検出することができた。門は柵列に連接し、同様に布掘りの掘立柱である。八脚門と考えられ、規模・構造は現存する法隆寺東大門に近いと考えられている。以上の遺構の外、時期比定は困難であるが、通路状の遺構が確認されている。この遺構は両側に平瓦を半裁したものを立て並べている。他の遺構との関連が不明で、どの時期になるかは明らかにしがたいが、状況からは古代の遺構であることは疑いない。

以上のように第７次調査の成果は、第３次～第６次調査成果との関連が良好に把握され、この地区一帯の一区画の全容が明らかになったことは、今後の調査に向けて重要な成果といわねばならない。

(2) 出土遺物の概要

出土遺物は包含層が削平されているために量的には多くない。ゴミ穴の土坑に投棄されたものが大部分であるが、遺構出土の一括遺物であることから、考古学的にもその重要性は高い。量的には第3～6次調査区同様に瓦類が最も多いが、次いで中国産の青磁器、白磁器、高麗陶器などの外国産遺物が多く、日本産の陶器、土器類が少ないのが特徴である。

SK—243からは平安時代末期の軒丸・軒平瓦が完形に近い状態でセットで出土しているのが注目される。なお、この土坑からは古墳時代の銅鏃1点も出土している。SK—208は第6次調査において南側半分を調査していた土坑である。この土坑から五代に属すると考えられる中国浙江省越州窯産の青磁器および白磁器が良好な一括遺物として出土している。越州窯青磁器の中には、SK—01より出土した毛彫りと片切り彫りで文様施文した花文椀と全く同一のものが出土している。白磁器には外面は蓮弁を彫んだ本遺跡新出例もあり、セット関係がより明瞭になりつつある。なお、高麗陶器の中にはSK—01と全く同一のタタキをもつものがあり同一個体の破片ではないかと考えられること等を加味すると、SK—01とSK—208は同時期の所産であることが判明する。SK—208からは、この他、ガラス容器の破片2点が出土している。いずれも小破片であるが、1点は周辺から剝離を加え円形に整形されているので他の物（遊具）に再利用された可能性もある。遊具類と考えられるものに、瓦片や青磁器、白磁器底部を利用した円盤類がある。研磨や打痕を加えることで円形にしたもので櫛石、八直行成、毬杖などに使用されたと考えられる。古代において類品は少ないが、中世以降その類例は増加するようである。SK-255では9世紀後半に位置づけられる青磁器類が多量に出土している。第4次調査SK—38、第5次調査SK—56、SK—61、SK—80と同様の品で、いずれも二次的に火を受けていることを考えれば、倉庫等に保管されていた商品が火事にあい一括投棄されたみられる。SK—56と61との接合関係等を考慮すれば、これらの土坑はいずれも同時期の所産と考えられる。なお、SK—255からは、粗製のコネ鉢がほぼ完形に復原できる状態で2個体が出土している。また、珍しい遺物として滑石製の握手つき鉢が出土している。内外面共、製作痕を丁寧に消している。類例はないが、当時、石鍋が高価なものであることを考えれば興味深い。

2．第3～7次調査にみる遺構の変遷

平和台野球場からその南側のテニス・コートにかけては、第3次～第7次調査でほぼ全域の調査を終了した。検出遺構も一つのまとまった関連性で把握され、時間的にその変遷がわかるようになってきた。遺構は同一場所で順次建て替えられるため複雑であるが、時期的に整理すると極めて整然とした配置を示している。以下、各遺構をⅠ期～Ⅳ期に分け、その変遷を概観しておこう。

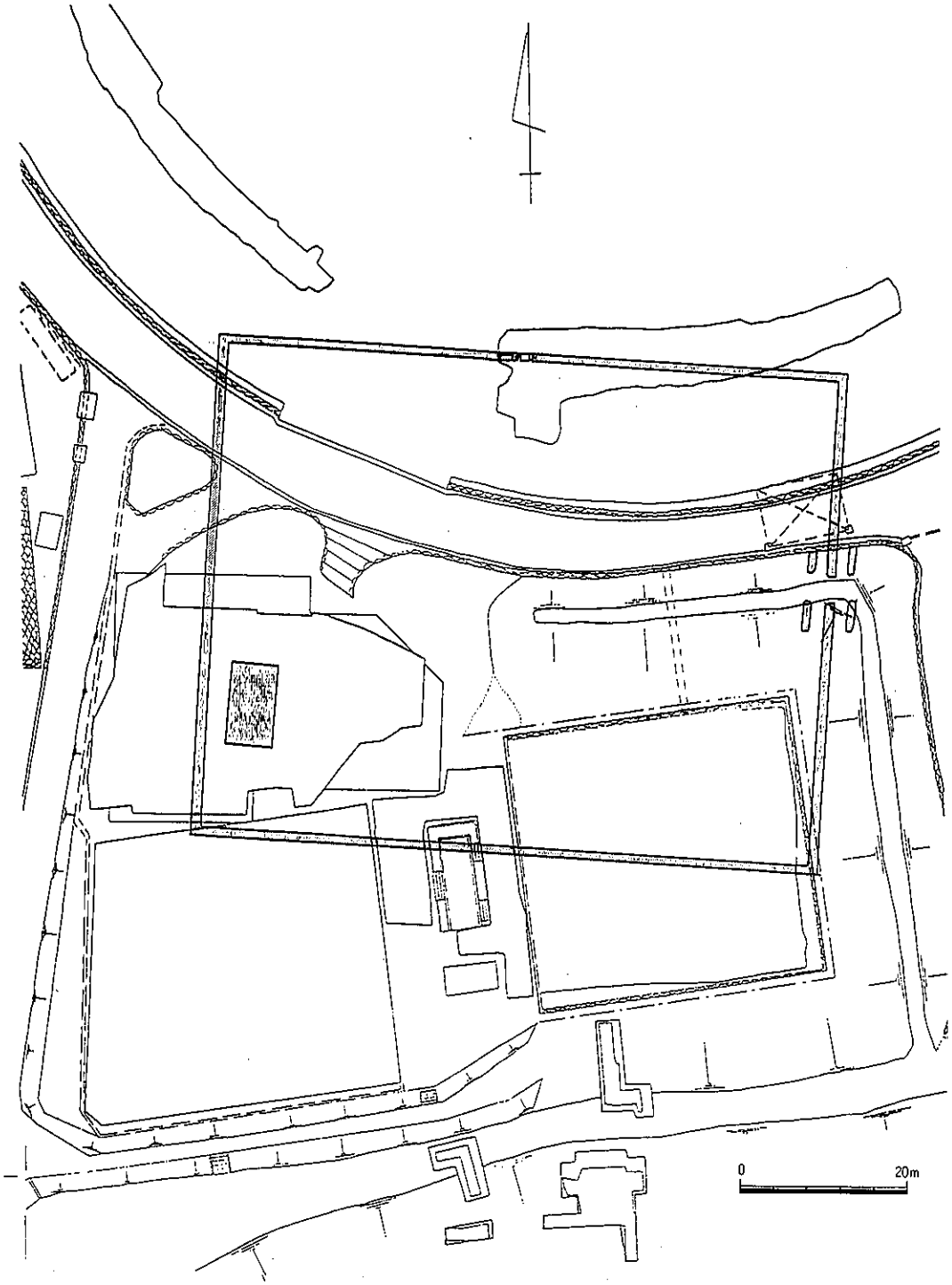


Fig. 3　Ⅰ期遺構の配置

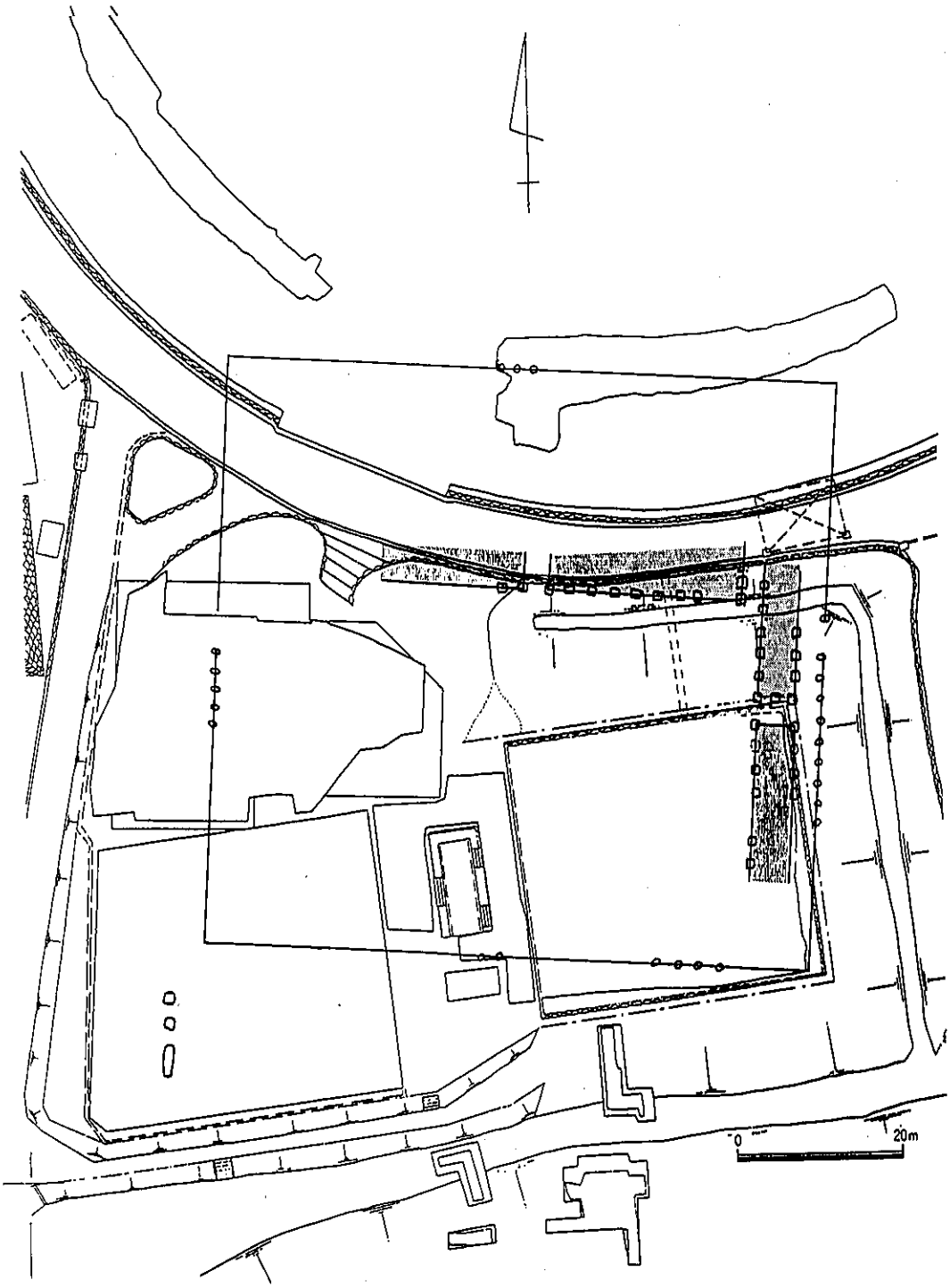


Fig. 4　II期遺構の配置

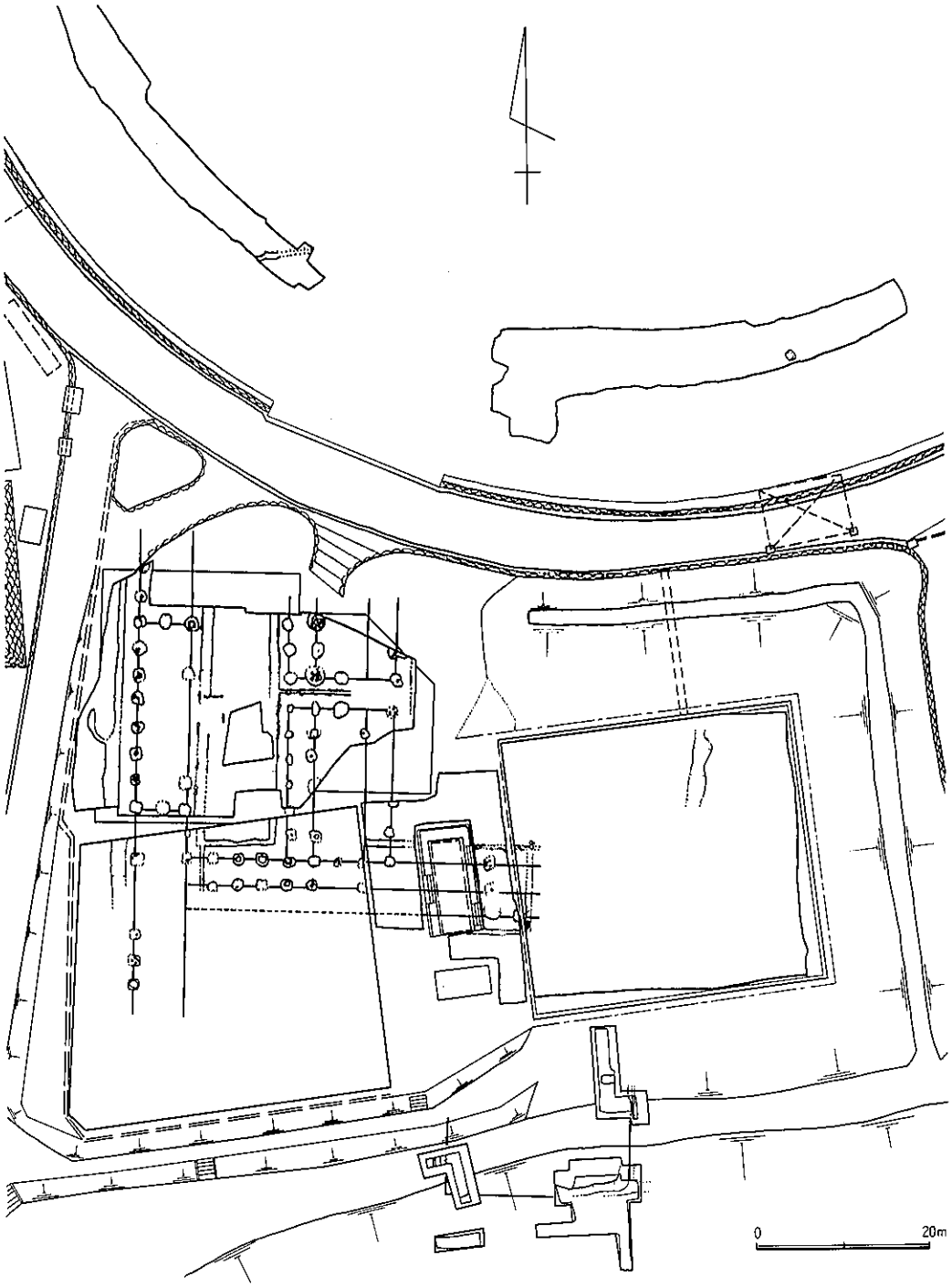


Fig. 5　Ⅲ期遺構の配置

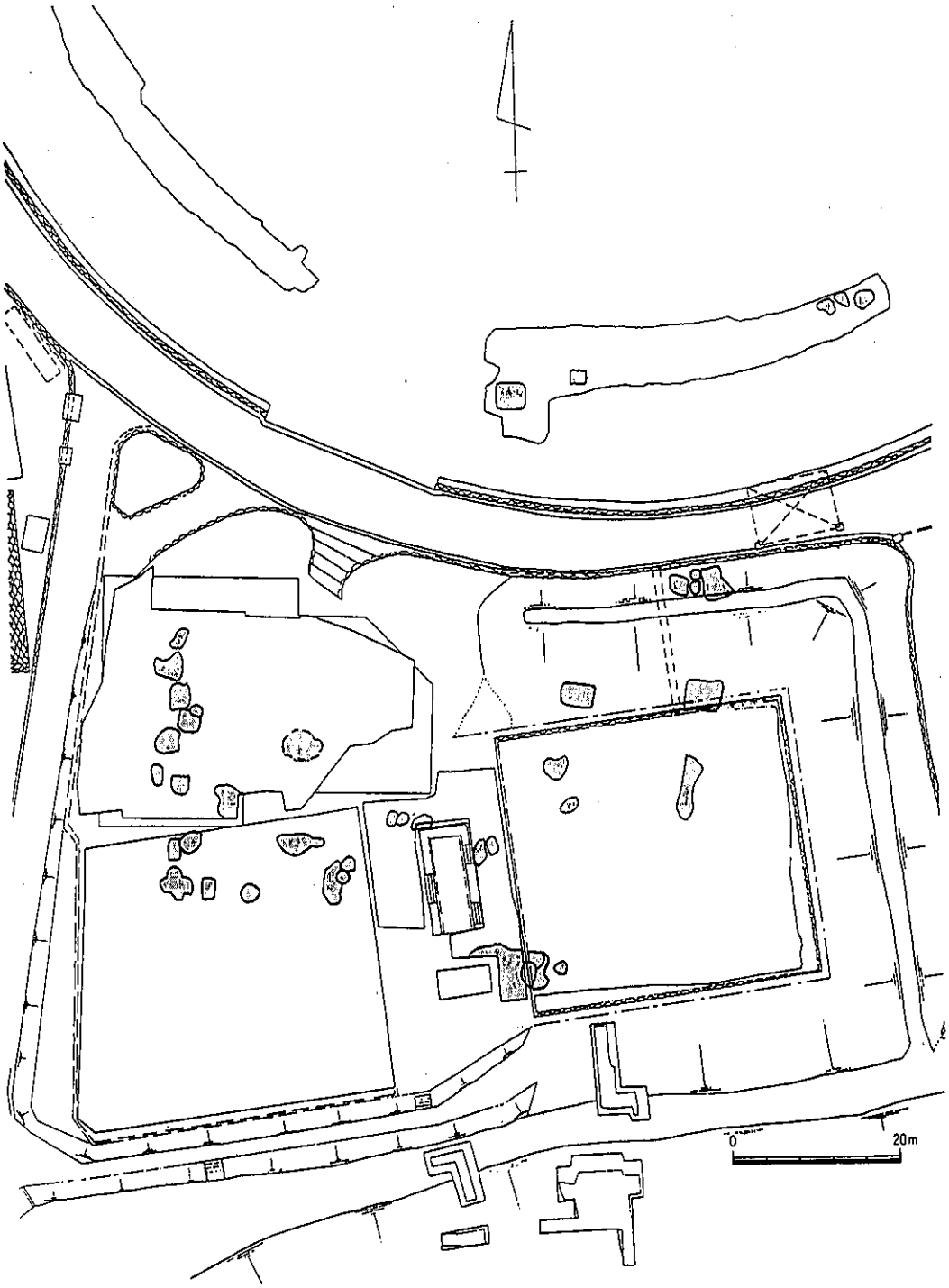


Fig. 6　Ⅳ期遺構の配置

(1)　Ⅰ期遺構（Fig. 3）

筑紫館の遺構と考えられ、最も先行した遺構群である。平和台野球場外野スタンドからテニス・コート部分にかけて見つかっている。東西75ｍ、南北58ｍの長方形区画に柵列（築地塀か）がめぐらされ、東辺の中央部に東門がつくられている。門は八脚門と考えられ、規模、構造はこの時期の門で現存している法隆寺東大門に近いと考えられている。柵列・門址は共に幅1.0～1.2ｍ、深さ1.0～1.5ｍの布掘りである。区画内には南西コーナー近くに南北11ｍ、東西5.6ｍの掘り込み地業がある。中軸線をはさんで左右対称に存在する可能性があるが、北側は未調査。これら以外には建物の痕跡はなく、この区画内の使用目的は儀式のための広場か。

(2)　Ⅱ期遺構（Fig. 4）

切り合い関係から奈良時代に比定される。また、同時期と考えられる便所遺構から出土した木簡は里制・郷里制の両者で書かれたものを含み715年前後を示している。区画は新たに掘立柱の柵列に替わる。北側と東西は前段階の柵列と重なり合うが、南がやや拡張される。区画は東西75ｍ、南北67ｍとなりやや広くなる。前段階に設置された門はなくなり、変わって東西柵列の中央部に柱間が他より若干広くなる所があり、通常の出入口としての簡単な門が設置されたと考えられる。区画内には柱穴掘り方が1.0～1.2ｍの方形になる大型の掘立柱建物が南北と東西列に各二棟L字形に配置されている。建物はいずれも端部が不明で正確な規模は明らかにしがたいが、東西棟は２間以上×９間である。(柱間は2.7ｍ、東西棟梁行柱間1.5ｍ)、柵列南西コーナーから約７ｍ離れて便所遺構が存在する。便所遺構は南北一直線に３基の土坑が1.8ｍ間隔で並んでいる。土坑は北側の２基が径1.4ｍの隅丸方形、南側が1.1ｍ×４ｍの長方形で、深さは共に４ｍである。中は中位以下に黒色粘土層が水平堆積し、籌木が多量に出土している。

(3)　Ⅲ期遺構（Fig. 5）

乱石積みの基壇をもつ大型の瓦葺きの礎石建物に替る時期である。主に野球場南側の西側に見つかっている。東側は削平によって消失しており建物配置の全形は明らかでない。建物は西側に片寄って二棟の南北棟建物が並列している。西側の棟は梁行２間（６ｍ）桁行16間以上（48ｍ以上）所々に間仕切りがある小子房的建物、東側の棟は大きく、梁行４間（12ｍ）桁行９間以上（27ｍ以上）で東西に廂をもつ。西脇殿あるいは大子房的建物である。南側には、この二棟をつなぐ軒廊あるいは前面回廊かと推定される二列の礎石があるが、近世遺構に破壊されていて詳細は明らかにできない。さらに南側、城の土壘下に南門かと推定できる基壇を確認しているが詳細は今後にゆずる。この基壇の東西には回廊ないしは築地塀が連接する可能性が強く、前段階同様に方形区画を想定することができる。

(4)　Ⅳ期遺構（Fig. 6）

この時期は建物遺構はなく、すべてがゴミ捨て用の土坑。建物配置に変動が考えられる。

第４章　鴻臚館をめぐる諸問題

鴻臚館跡出土の新羅・高麗陶器

１．はじめに

1987年鴻臚館が再発見された以降、福岡市教育委員会では全容解明のための本格調査を進め、今年度で既に５年を経過した。その間出土した莫大な量の中国産陶磁器や遠く中近東地域から運ばれたイスラム陶器は同学諸氏の驚嘆の声をほしいままにしてきた。実際、鴻臚館出土の中国陶磁器は９世紀～11世紀の長きにわたり、越州窯青磁器をはじめとし、邢窯、定窯の白磁器、長沙窯の加彩陶、窯の明かでない浙江省の製品を含み、多彩である。同時に鴻臚館で使用されたと考えられる優品の青・白磁器の中には、これまで国内では知られていなかった器種や製品が含まれ、また、倉庫に残された下手の青磁器は倉庫等の火事によって土坑中に一括投棄されていて、その出土状況や磁器の中には重ね焼きのままの状態であったり、窯道具が同時に出土することから、中国での取引きが窯買いであったことなども判明し、古代の貿易陶磁研究において興味ある成果をあげている。

一方、新羅陶器や続く高麗陶器については、鴻臚館関連の文献に新羅・高麗商人がしばしば登場する割には関心が払われていない。これは一重に中国陶磁器の量と華やかさの影にかくれ、また、新羅・高麗陶器の雑器類は国内産の須恵器との区別が困難であること、韓国内において新羅・高麗陶器の編年が確立していない事が原因としてあげられる。しかしながら、鴻臚館出土の新羅・高麗陶器のもつ歴史的意義は大きい。幸いにも鴻臚館出土の新羅・高麗陶器は筑紫館・鴻臚館の存続期間の各期のものが含まれ、出土状況も土坑一括出土のものが多く、中国産陶磁器や国内産土器との共伴関係が明らかで編年の見通しもつけられそうである。よって、本稿では、鴻臚館出土の新羅・高麗陶器の紹介をすると共に、これらの陶器の概略の編年を試み、鴻臚館における新羅・高麗陶器の歴史的意義解明の一段階としたい。

２．新羅・高麗陶器出土遺構と出土陶器の検討

新羅・高麗陶器は国内産須恵器と極めて類似し、その判別は困難であるので、以下の基準で抽出した。①．胎土が良質で焼成は堅緻、あずき色の独特の色調を示す。②．上記と異なり軟質の焼きで、瓦質のもの。③．文様として多条の沈線をめぐらしたり、粘土紐を貼りつけた突線をめぐらしたもの、あるいは沈線間、突線間にヘラ・櫛によって波状文をつけたもの。④．タタキは正格子が多いが、須恵器にない特殊なタタキをもつもので、さら内面あるいは外面のタタキを消すか、消そうとしているもの。以上の基準で抽出した土器は全体的に須恵器とは異質の趣をもっているが、須恵器とは判別がつかないものもあるので、以下に紹介する陶器の中

には若干の須恵器も混入していることをことわっておく。以下、各遺構と出土陶器の概略について検討を加える。

(1)　SK－01と出土陶器（Fig.7～11－72）

第3次調査　平和台野球場外野スタンドの試掘調査に検出した土坑である。頁岩の岩盤に掘り込まれた整正な平面形を有する。東西径3.33m　南北径3.15mの隅丸方形で深さ0.75m、断面形は逆台形で埋土は自然の流れ込みによるレンズ状堆積をなす。

出土陶器はすべてが破片であるが72点にのぼる量で多い。中国越州窯系の青磁器、白磁器、無紬陶器、日本産の土師器、黒色土器等が共伴する。Fig.7～Fig.11－72が新羅・高麗系の陶器である。器形には大甕、小壺、広口壺などがあるが大部分は大甕である。

1～14は大甕の胴部破片で同一個体とみられるものである。外面には小さな格子のタタキが施されるが上面がなで消される傾向にある。次にのべる大甕と極めて類似するが、やゝ格子が大きく粗雑である。体部の肩部および下半に断面三角形の低い貼り付け突線がめぐらされるが条数は不明、内面受け具痕は良好に遺存する部分がないため判然としないが丸太材の木口を利用して放射状の刻みを入れた車輪文風である。刻みの間には、やゝ粗い年輪が観察できるのでスギ材等の軟いものが利用された可能性が強い。内面も外面同様にタタキがなで消される傾向にある。胎土には白色の砂粒を含むが須恵器の胎土とは明らかに異なる。胎土は良質で焼成は堅緻。厚さ0.5～0.7cm色調は黒灰色をなす。15～40も大甕の胴部破片で同一個体と考えられる資料である。前者と極めて類似するがタタキ文様や胎土の色調に若干の相異点があるので別個体と認識できる。器形等は前者と極めて類似したものと考えられる。体部外面は小さな格子目文のタタキ、胴下半部がナデ消される傾向にある。残存する破片からは肩部に三条以上の貼り付けの突線がめぐらされる。突線は前者と比較し、整然とした断面三角形で高く、突線状に稜線がみられその差は大きい。内面の受け具痕はかなり深くついている所もある。丸太の木口を利用することは前者同様であるが刻みは全く異なり幾何形である。木の年輪は狭く材の違いを思わせる。横ナデによって受け具痕を消そうとしているが、痕跡が深いため大部分は消えていない。器壁の厚さは前者と同じである。胎土は精選され良質、焼成は堅緻で良好。色調は前者に比較しやゝ灰色が強い。41～48は前二者同様に大甕の胴下半部破片で同一個体と考えられる破片である。色調やタタキの状態は前々者に極めて良く似ている。同様に大甕の破片であることはいうまでもあるまい。外面は格子同文のタタキ、内面は丸太の木口に放射状の刻みをもつ車輪文風であり、その識別は困難であったが、丸太の円弧の違いから別個体と認定した。外面は横ナデによって大部分のタタキ文様が消されているが、内面の横ナデは荒く消し方が部分的である。胎土には白色の砂粒を含むが良質、焼成は堅緻、色調は黒灰色である。49、50、53は小壺の破片と考えられる。49は肩部破片、一条の沈線がめぐる。外面は自然釉、内面は丁寧な横ナデ調整、下半に受け具痕が残る。胎土は良質であずき色をなす。50は口縁部破片。口縁下

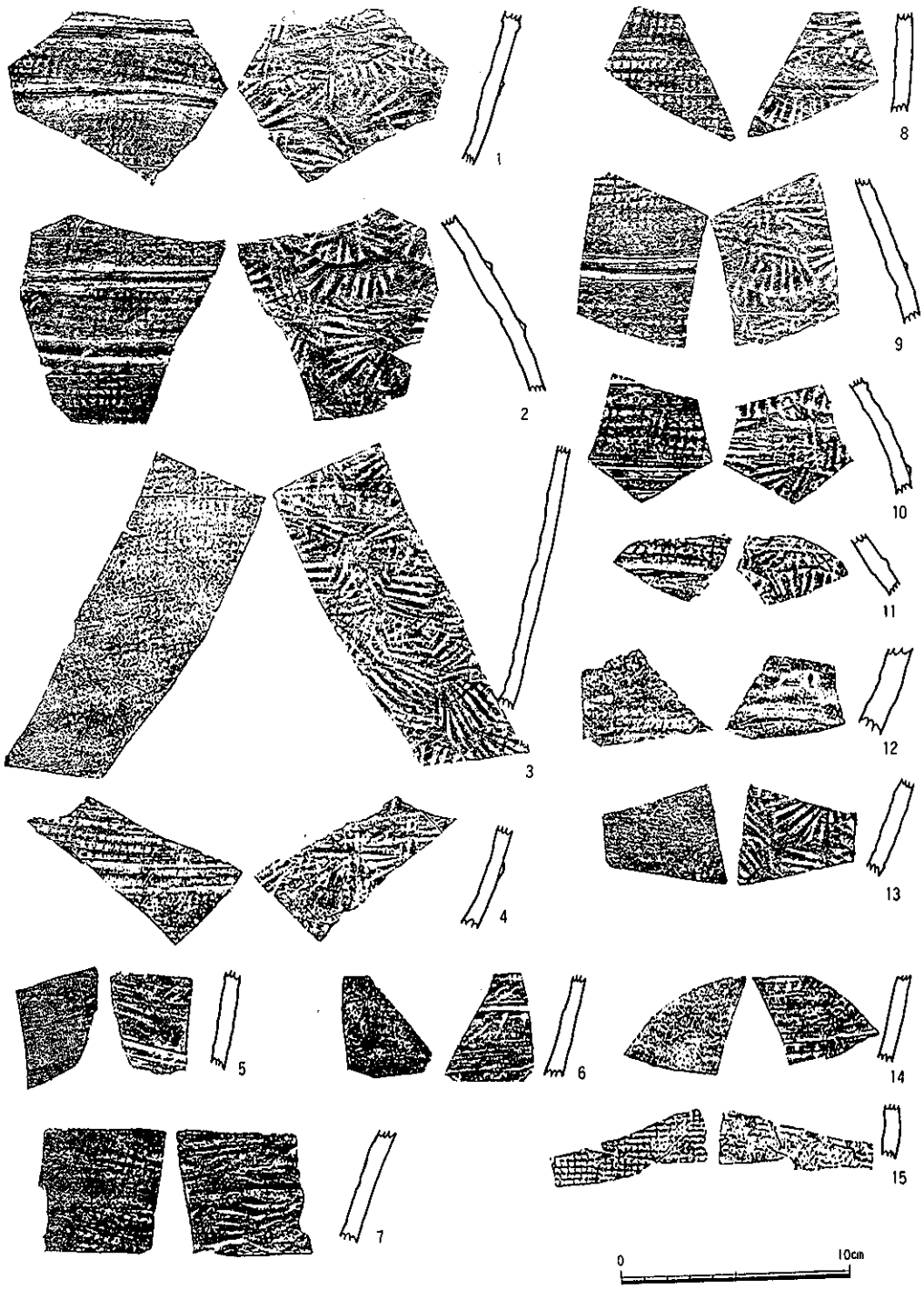


Fig. 7　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ

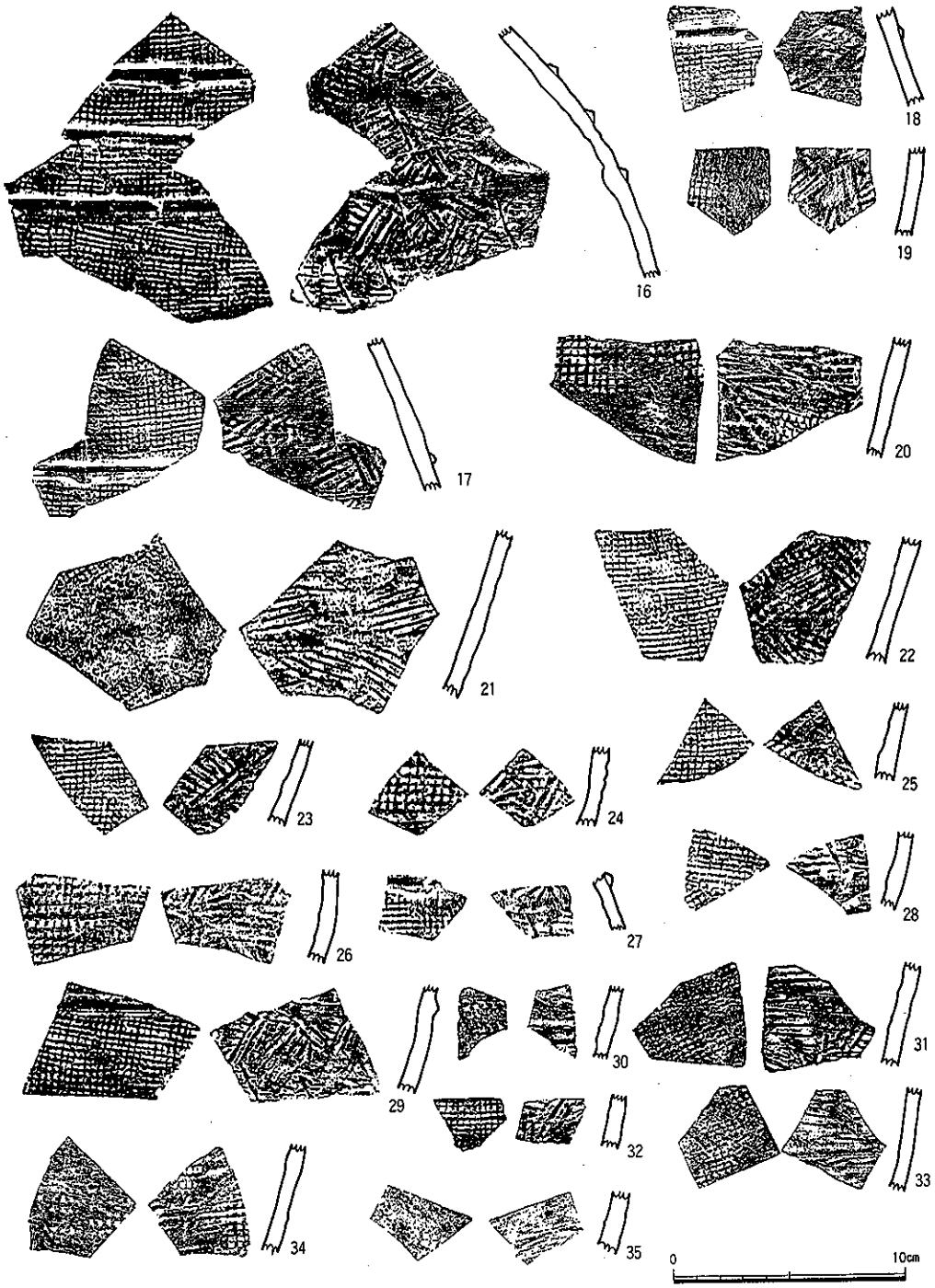


Fig. 8　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図Ⅱ

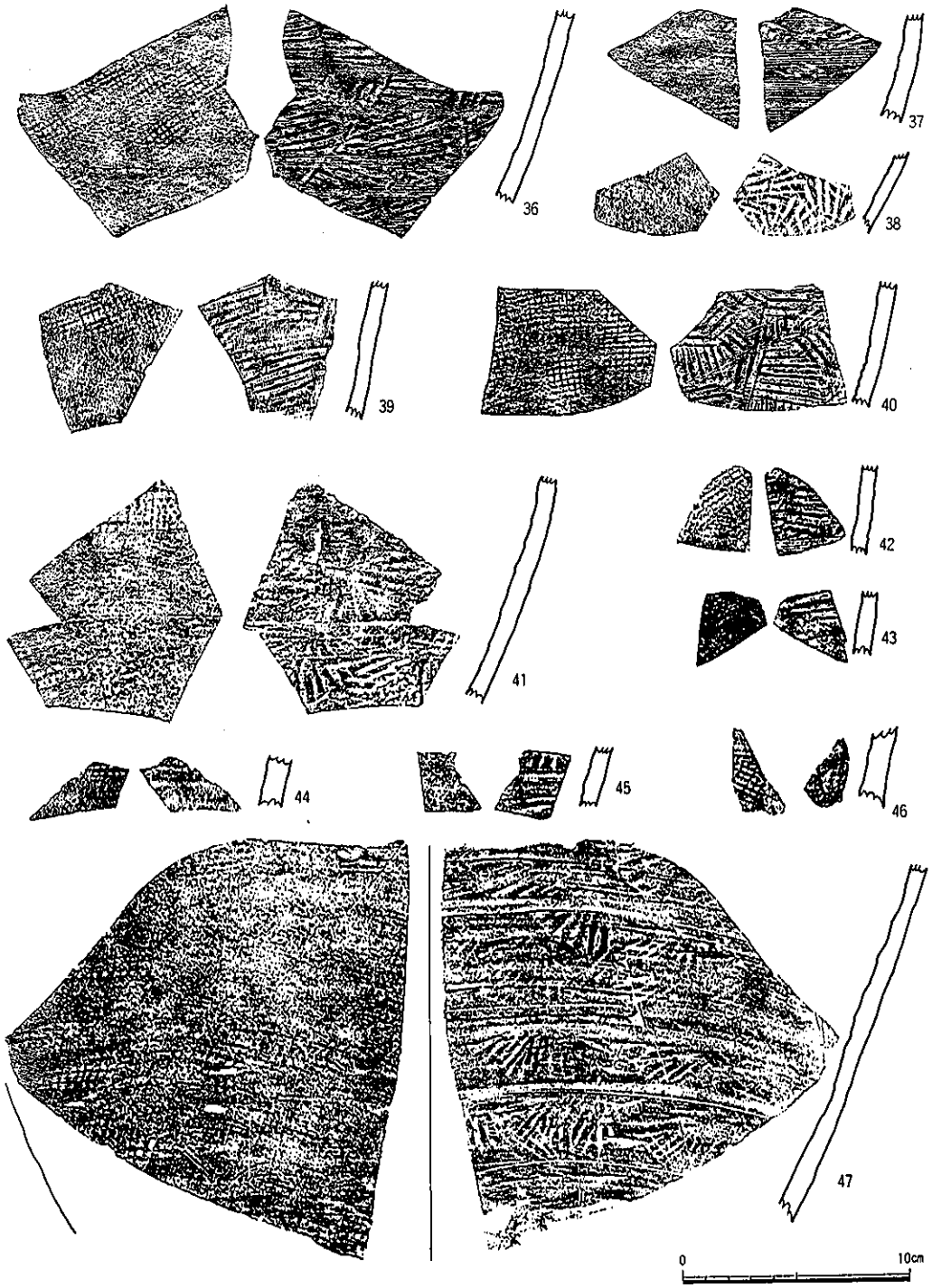


Fig. 9　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図III

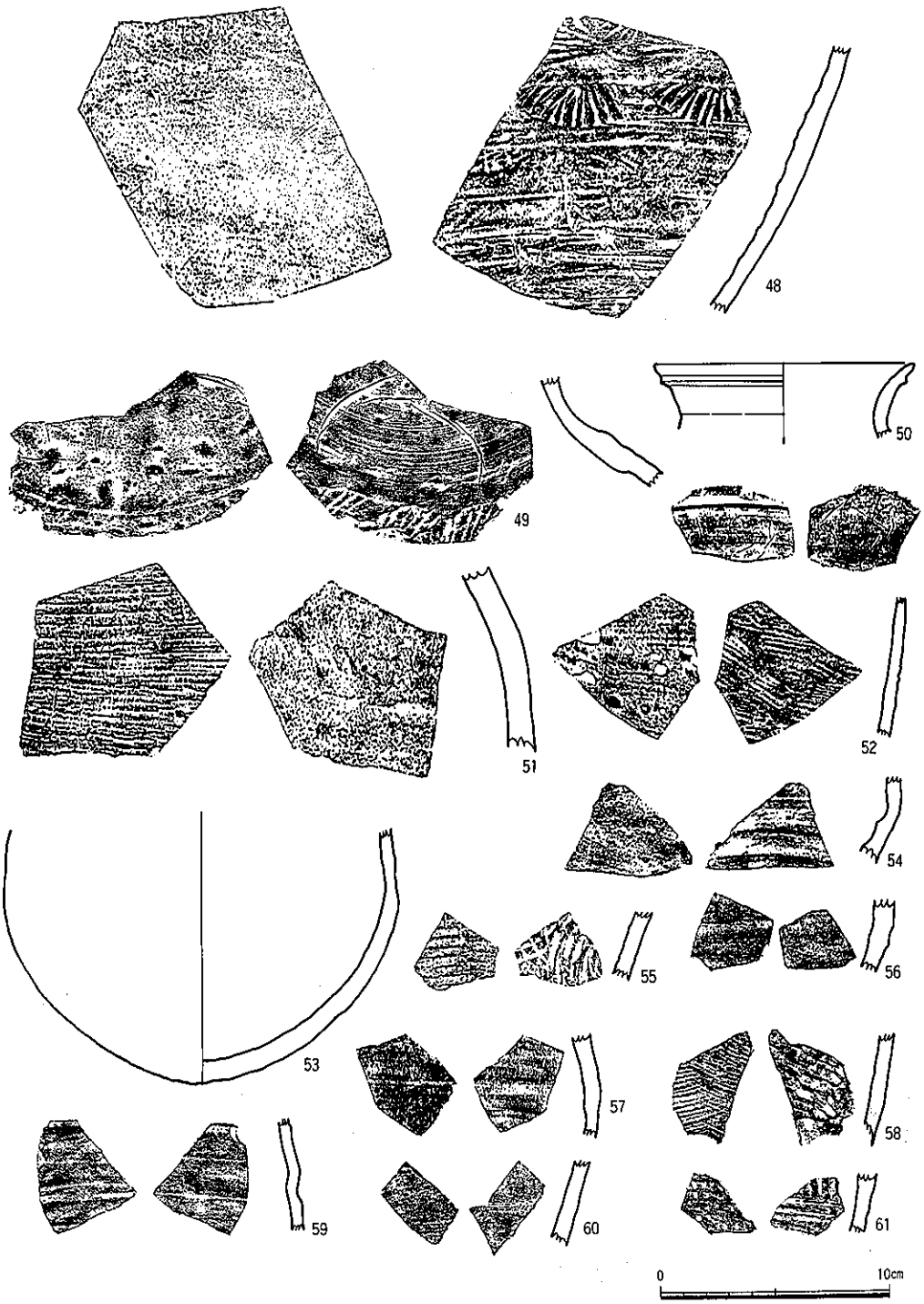


Fig.10　SK—01出土新羅・高麗陶器実測図Ⅳ

に突線をめぐらす。内外面は黒灰色～灰色、胎土はあずき色をなす。硬質。53は50の胴下半部か。51は大甕の肩部破片で外面は平行タタキ、内面はナデによって消される。52～72はいずれも小破片で器形の特定はできないが広口壺あるいは壺の破片である。59、60、62、71は表面に黒色顔料が塗布される特徴から広口壺とみられ、62は底部破片である。61、67は軟質、他は硬質の陶器である。

(2) SK－05と出土陶器 (Fig.11－73、74)

第3次調査平和台野球場外野スタンドの試掘調査で確認した土坑である。東西径2.35m、南北径1.95m、深さ70～95mの不整楕円形土坑である。

出土陶器は2点ある。青磁器、白磁器、土師器、黒色土器と共伴関係にある。73は底部付近の破片、外面は平行タタキを加えるが、上より横ナデが施される。内面は横ナデ調整であるが丁寧でない。74は広口壺の胴部破片とみられる。内外面共に横ナデ調整。器壁は0.5cm前後であるが凸凹が著しい。体部上半に一条の沈線がめぐらされ、内外面に黒色顔料が塗布されるが特に内面は丁寧である。共に胎土は良質、焼成堅緻、色調は73がアズキ色、74は灰色である。

(3) SD－07と出土陶器 (Fig.11－75)

第3次調査平和台野球場外野スタンドの試掘で調査した溝である。溝幅1.2～1.8cm、深さ25～50cm、断面U字形。主軸方向S－98.5°－E、調査区内の約2.4mを調査。

出土陶器は75の1点で若干の青磁器と共伴する。底部破片で平底をなす。内外面長横ナデ調整であるが内面は荒い。外面は自然紬あるいは顔料が塗布されている。胎土には白色の砂粒が混入される。色調は内外面共青灰色であるが胎土はアズキ色をなす。

(4) SD－08と出土陶器 (Fig.11－76)

第3次調査平和台野球場外野スタンドの試掘調査で調査した大溝である。溝幅約11m、深さ1.7mで断面形は浅いV字形をなす。埋土は流れ込みによるレンズ状をなし、大別三層に分離できる。新羅陶器は最下層より出土し、須恵器と共伴する。本遺跡で最も古くなる新羅陶器である。

76はほぼ完形になる蓋一個体である。天井中央部に環状のつまみがつく。天井部は丸味をもって下り、口縁部は大きく屈曲し外側へのび、端部はくちばし状に下方にのび端部は尖る。天井部には竹管文による花文様が等間隔で5個施される。また、つまみの直下の天井部に相対して焼成前の米粒形の穿孔がある。内外面は横ナデ調整、天井部に自然釉がかかる。胎土は精良で焼成は堅緻、口径10.3cm、器高4.4cmの小型品。長頸壺の蓋とみられる。

(5) SD－22と出土陶器 (Fig.12－75)

第4次調査で確認したSB－31の西側の雨落ち溝である。溝幅0.8～1.5m、深さ20cmである。明らかに雨落ち溝出土の陶器とSB－31とは区別して提示する。

75は大型甕の口縁部、頸部は短かく屈曲し、口縁端部はつまみあげられ内側に段を有する。内外面共横ナデ調整、頸部にヘラ描きのヘラ記号をもつ。胎土には石英・長石の砂粒を混入す

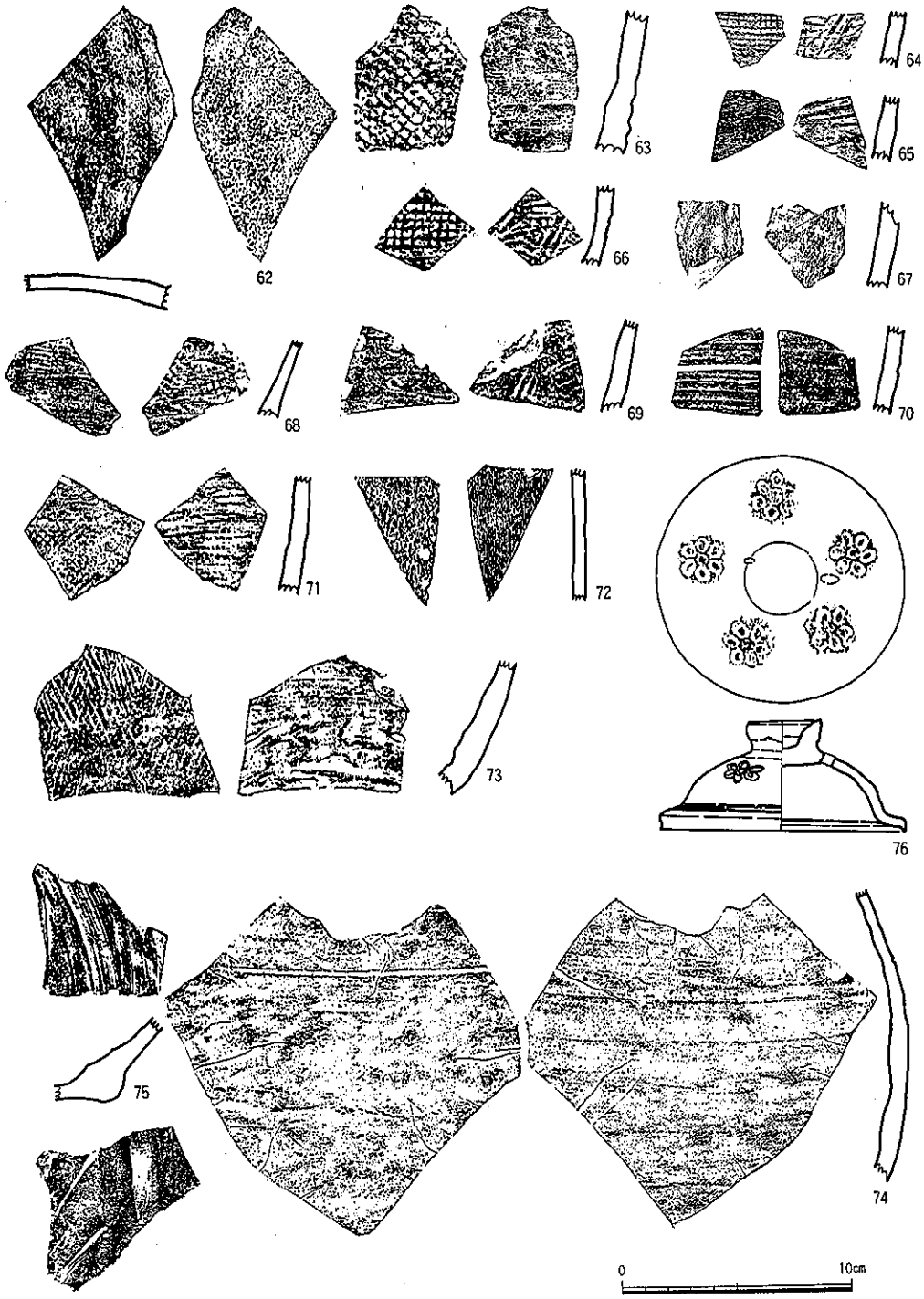


Fig.11　SK—01、SK—05、SD—07、SD—08出土新羅・高麗陶器実測図

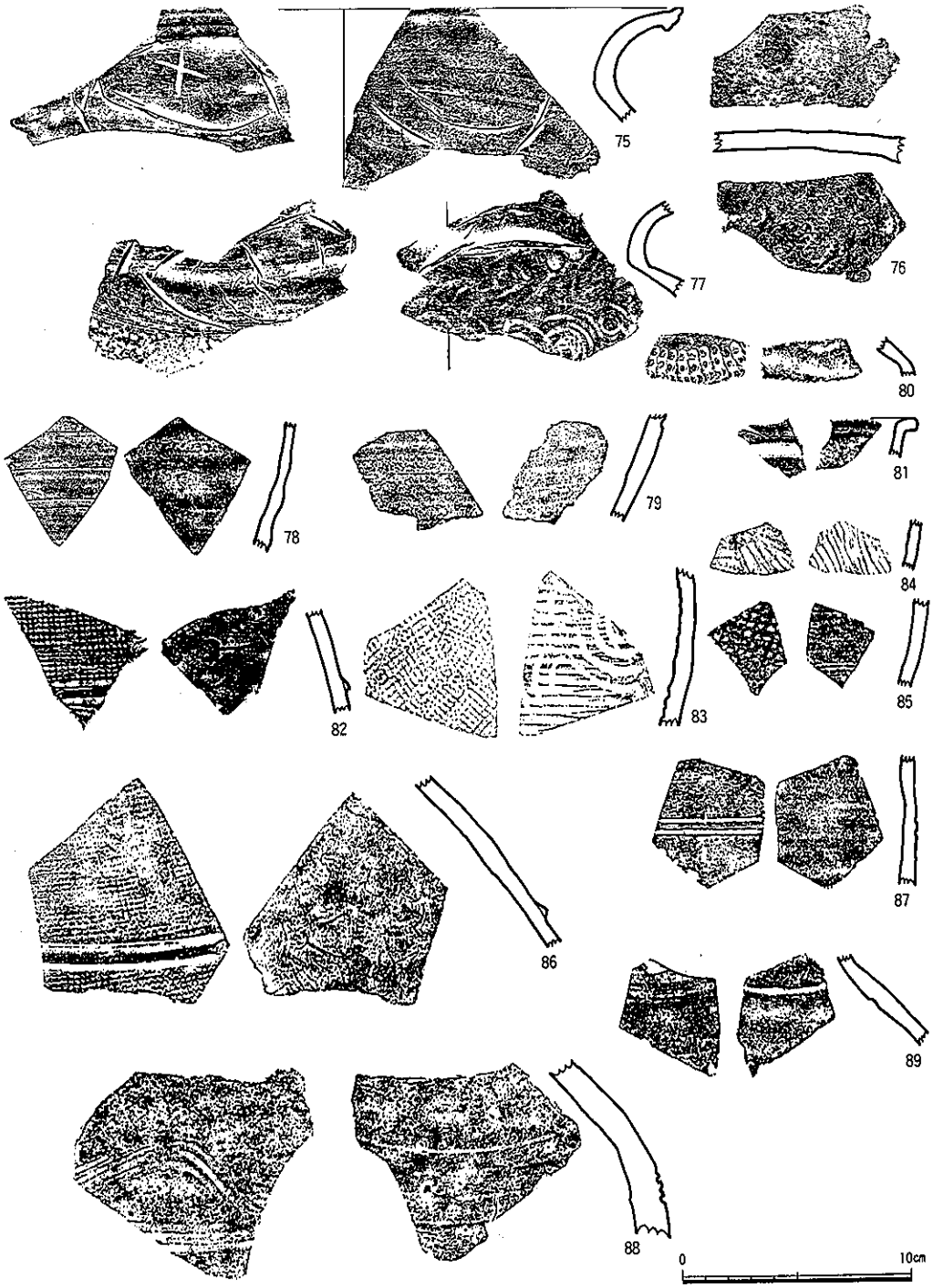


Fig.12　SD—22、26、SK—23、27、28出土新羅・高麗陶器実測図

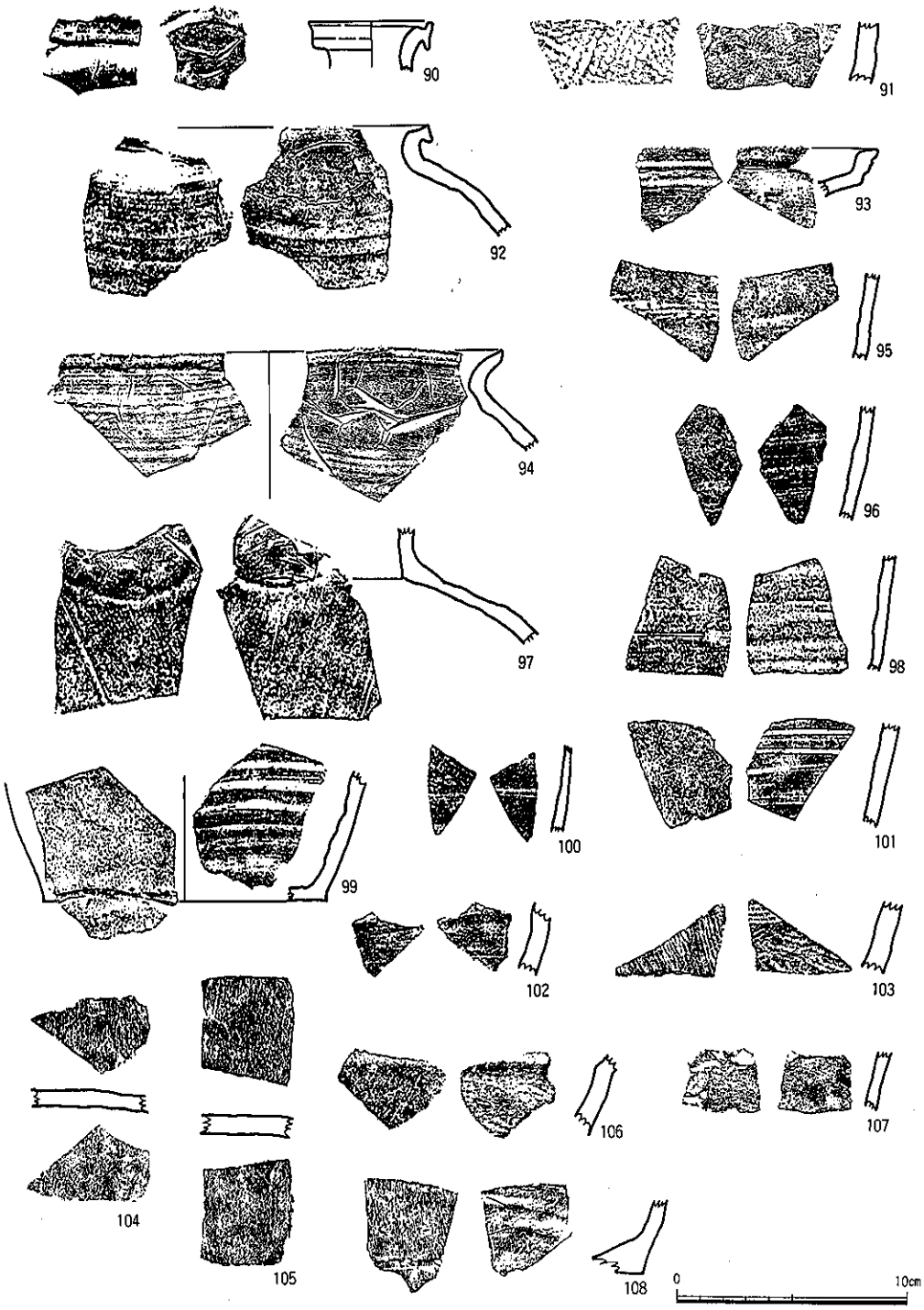


Fig.13　SK—29、SD—30出土新羅・高麗陶器実測図

る。焼成は良好、色調は黒灰色をなす。胎土・焼成からみると須恵器である可能性が高い。

(6) **SK－23と出土陶器** (Fig.12－76～78)

第4次調査で調査した瓦溜めの土坑、東西径2.2m、南北径2.5m、深さ10mの浅い不整楕円形の土坑である。

3点の出土がある。76は底部破片。胎土の状態等からすれば、中国産無釉陶器の破片である可能性も強い。77は甕の肩部から口縁部にかけての破片。体部は格子目タタキの上からカキ目調整を加える。頸部内外面は横ナデ、体部内面は同心円文受け具痕の上に横ナデを加えている。78は内外面共横ナデ調整、外面に一条の沈線をめぐらす。小型の壺であろうか。

(7) **SD－26と出土陶器** (Fig.12－79～81)

第4次調査で確認したSB－31の東側の雨落ち溝である。溝幅1.5m、深さ20cm、雨落ち溝出土として明確なものも提示した。

出土陶器は3点あるがいずれも小破片である。79は壺の破片、内外面共横ナデ調整、沈線一条をめぐらす。80は蓋の破片か、外面全面に印花文を施す。やゝ軟質で胎土に白色の砂粒を混入している。81は壺の口縁、口縁部は短かく外側に屈曲する。

(8) **SK－27と出土遺物** (Fig.12－82－85)

第4次調査で確認した瓦溜めの遺構である。SB－31の基壇を切ってつくられている。長径5.5m、短径3.1mの不整楕円形である。多量の瓦類の他、若干の青磁器が混在している。

4点の陶器の出土がある。82は軟質、外面は小さな格子目文のタタキ、一条の貼り付け突線がめぐる。突線項部はナデによつ平坦で断面は丸味をもった台形をなす。83～85は壺胴部の小破片、83は外面が格子目文、内面が同心円文と平行文受け具痕が重複している。84は内外面共に平行タタキ、85は外面が格子目文タタキの上から横ナデ調整、内面横ナデ調整である。いずれも焼成は良好で硬質。

(9) **SK－28と出土陶器** (Fig.12－86～89)

第4次調査で確認した地下式横穴である。SB－31の基壇内につくられているが、天井部が崩落し、その凹みに多量の遺物が流れ込んでいる。攪乱と同様で正確な共伴関係等は不明。陶器類は整地層のものが混入した可能性が高い。

陶器は4点がある。86はやゝ軟質の甕肩部破片である。外面は小さな格子目タタキを加えた後、全面にヘラナデが施される。一条の貼り付けの突線は断面は丸味をもった台形。内面は特異な受け具痕がつき、上から削り状のヘラナデが加えられる。87、89は小型壺の肩部～胴部破片、内外面共横ナデ調整。88は大型壺の肩部破片。肩部下半に三条の平行沈線をめぐらしている。全面に自然釉がかかる。内面は横ナデ調整。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は堅緻、胎土の状態から中国産の無釉陶器の可能性もある。

(10) **SK－29と出土陶器** (Fig.13－90、91)

第4次で調査した梵鐘鋳造遺構である。SB－31の基壇を切ってつくられている。埋土中からは鋳造関連遺物以外に若干の青磁器、新羅陶器が出土していて、新しい時期の遺物は含まないが、梵鐘の型式からは新しくなり、これらの遺物は混入とみなければならない。

2点の陶器がある。90は小型壺の口縁部、口縁の上下が引きのばされる。良質の土器である。91は外面に格子目文のタタキ、内面に布痕がみられる。焼成はやゝ軟質であるが明らかに瓦とは区別できる。

(11)　SD－30と出土陶器（Fig.13－92～108）

第4次調査区で調査した溝状の遺構である。SB－31、32を切り、わずかに蛇行している。溝幅は西が狭く約1m、東にいくにしたがい広くなり幅約1.8m、深さ10～30mの断面U字形をなす。出土遺物は多く、青磁器、白磁器、須恵器、土師器があるが、溝底より中世遺物が出土しており、先の遺物は周辺からの流れ込みと考えられる。

陶器は17点が出土している。いずれも壺の破片である。92～94は口縁部、97は頸部、99、104、105、108は底部破片である。口縁部はいずれも広口壺と考えられる。92は口縁部は短かく屈曲し、端部は平坦、内外面には黒色顔料を丁寧に塗布している。93は二重口縁でたちあがり部に三条の凹線をめぐらしている。94は92と同様の器形をなすが、口縁端部は尖り気味におさめる。内外面共に横ナデ調整。外面に黒色顔料を塗布している。97は樽形土器の頸部とみられる。内外面共横ナデ調整で外面には自然釉が付着する。胎土はアズキ色で硬質。102は軟質の陶器で、外面にススが付着する。底部を除いた他は胴部の小破片でいずれも硬質である。95、103の外面にタタキが見られる以外は内外面共横なで調整である。101、102には黒色顔料が塗布される。底部はいずれも平底。内外面共横ナデ調整で、105を除いた3点には黒色顔料が塗布されている。

(12)　SB－31と出土陶器（Fig.14、15）

第4・5次調査区西側に検出した基壇をもつ礎石建物である。梁行2間、桁行14間以上、基壇幅9m、長さ42m以上で、東西に幅1～1.5mの雨落ち溝がついている。基壇には乱石積みの基壇化粧がみられる。陶器類は雨落ち溝、礎石抜き穴等から出土していて、他の陶器類との共伴関係は明確ではない。また、抜き穴出土品は建物に先行するものも含まれていると考えられ、SB－31出土の陶器の同時性は明らかにしがたい。

陶器は29点あり量的に多い。いずれも壺形土器の小破片と見られる。111、112、124は口縁部破片、113～115は肩部破片、133、137、138は底部破片、他は胴部破片である。109は蓋破片か。外面全面に印花文を施し、内面は横ナデ調整。胎土には赤色、白色の砂粒を多く含み焼成はやゝ軟質である。111は外面はタタキの上を横ナデ調整、内面は荒いナデ調整、焼成は硬く、胎土はアズキ色をなす。112は口縁内側に段をもつ。124は口縁端部が大きく外反し丸味をもつ。内外面共自然釉がかかる。115は外面に貼り付け突線一条をめぐらす。突線は断面カマボコ状をなす。厚く自然釉がかかり、内面はヘラ削り状の横ナデ調整。118は体部下半の破片で断面長方形の突

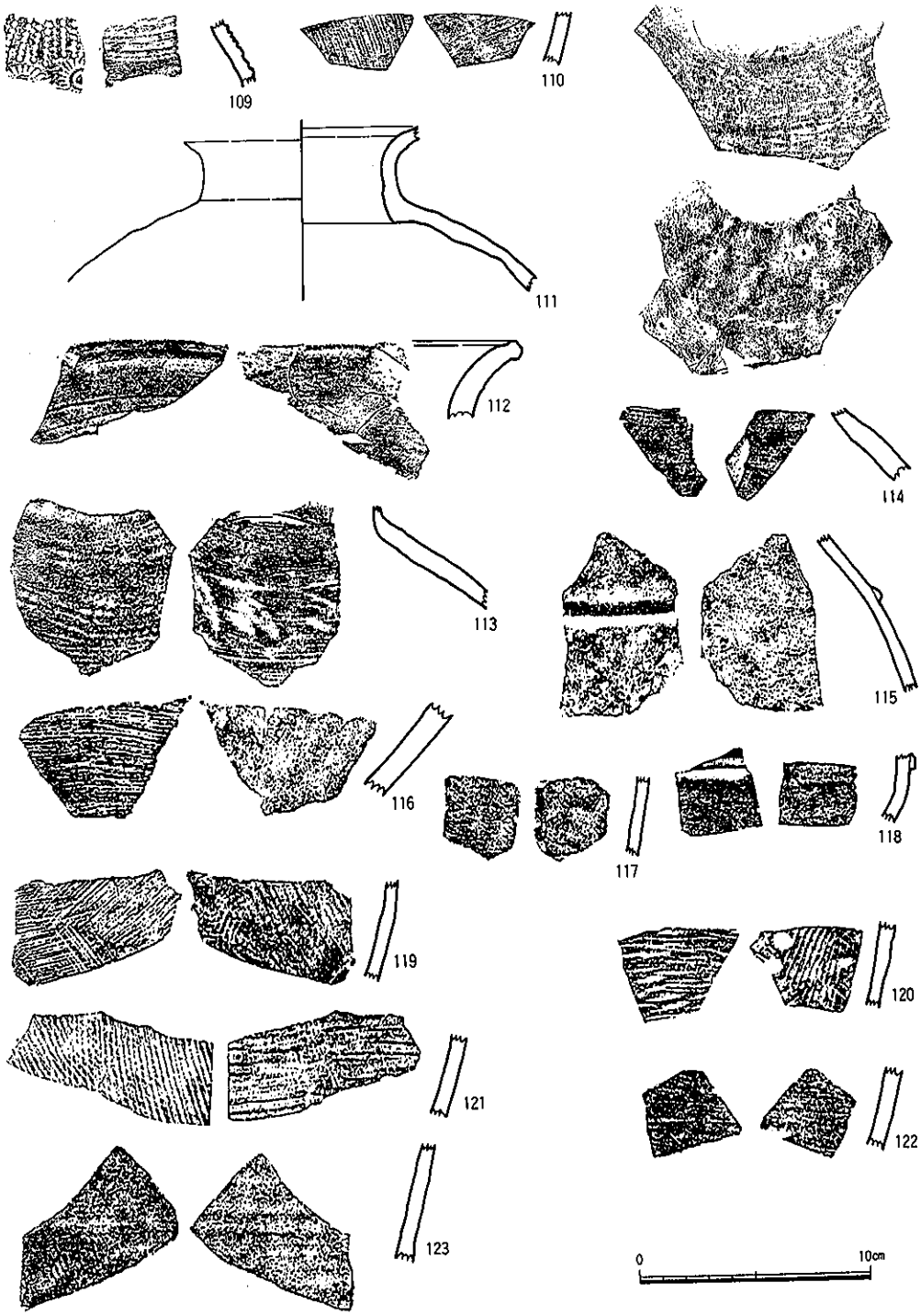


Fig.14　SB—31出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ

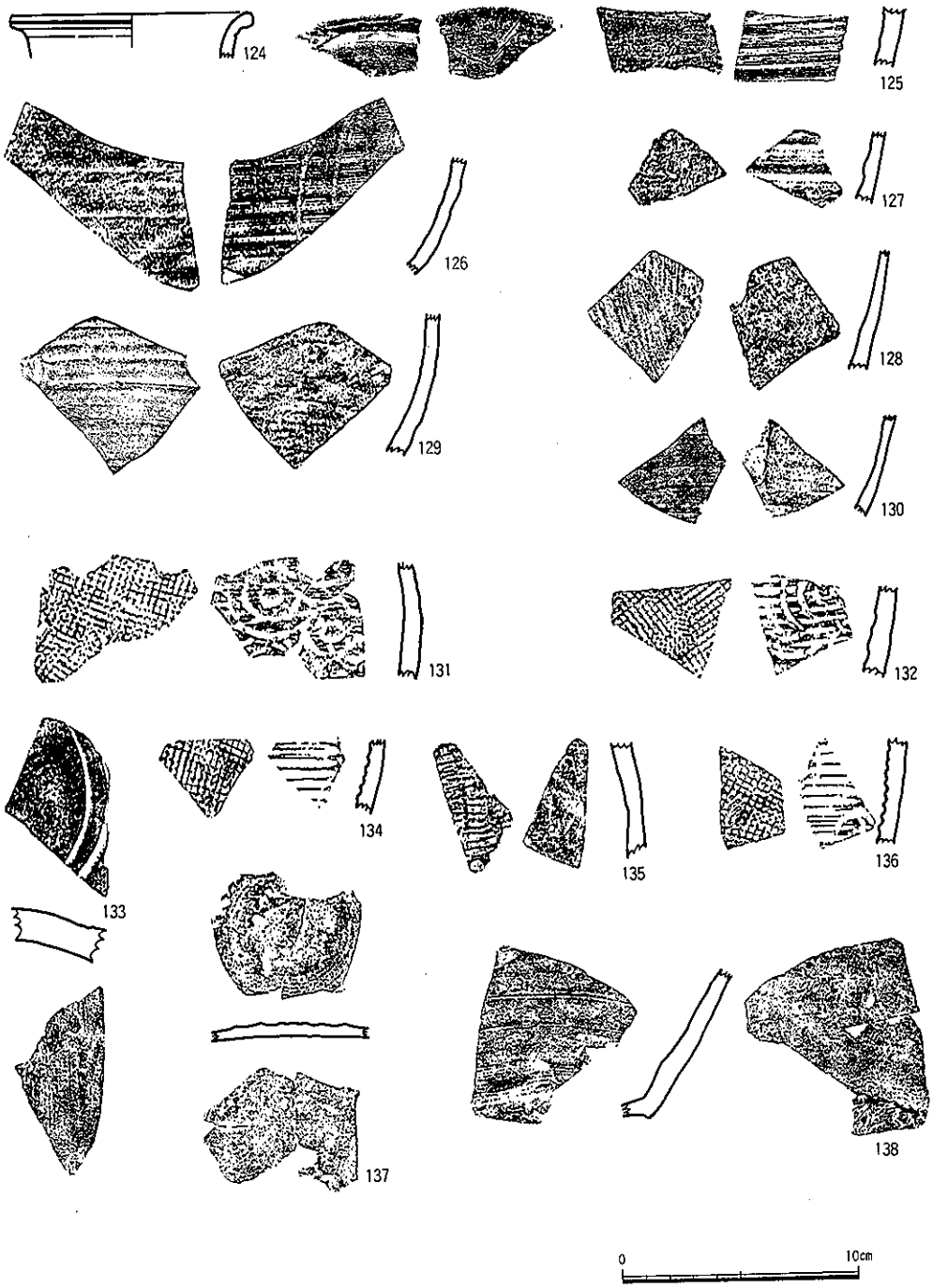


Fig.15　SB—31出土新羅・高麗陶器実測図II

線一条がめぐる。117、122は軟質、116、119～121、123は内外面に平行タタキを加え、内面は上から横ナデが加えられている。126、129は広口壺の破片で外面全面と内面の一部に黒色顔料が塗布されている。125、127、135は軟質、前二者は内外面共横ナデ調整。135は内外面にタタキをもつ。131、132、134、136は外面が格子目タタキ、内面は同心円、平行タタキの上に横ナデ調整を加えている。同一個体か、128に外面平行タタキ、130は内外面横ナデ、底部はいずれもあげ底状の平底である。いずれも硬質。

(13) SB－32と出土陶器 (Fig.16)

第4・5次調査でSB－31の東側に検出した基壇建物で基壇化粧や雨落ち溝はSB－31と同様である。梁行4間、桁行9間以上、基壇幅15m、長さ26m以上である。陶器の出土状況等もSB－31同様で共伴関係は正確にし難い。

陶器は15点ある。139、140は口縁部破片、142～145は軟質、142～144は同一個体で杯と思われる。145は外面に沈線一条をめぐらす。139は口縁に沈線一条、140は断面三角形の突線一条をめぐらしている。149、151は樽形土器の破片、149は外面が格子目タタキの上を横ナデ、内面横ナデ。151は内外面共横ナデ調整である。150、152～154は底部破片、いずれも平底で内外面共に横ナデ、141～148は胴部破片、141は外面に黒色顔料が塗布される。146は外面に二条の沈線をめぐらし、内面はタタキの上に横ナデを加えている。147、148は内外面にタタキを施し、上からナデを加えている。

(14) SK－33と出土陶器 (Fig.17)

第4次調査区の東側で確認した、南北径6.5m、東西径4.5mの長方形プランをなす深さ1.8mの土坑である。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、北西部コーナーから幅0.6m、深さ1mの溝が北側にのびている。最下層に江戸時代の瓦を含み、明らかに江戸時代の遺構であり、出土した多量の古代遺物は整地層からの混入品である。

17点の陶器がある。いずれも甕、壺の破片、155、156は口縁部、157～160は頸部から肩部、170、171は底部、他は胴部破片。158、159が軟質で他は硬質である。155は短かい頸部から外反し端部が上に引きのばされる。156は短かい口縁が外反する。両者共に外面から口縁内面にかけて黒色顔料が塗布されている。157～160は内外面共横ナデ調整、157の頸部にヘラ描きによる波状文、160の胴部には沈線一条めぐらし、その下にヘラ描きの波状文がめぐる。いずれも外面には自然釉がかかる。170、171は共に平底、170の外面はタタキの上から横ナデ、内面は横ナデ調整。165は内外面にタタキを加え、その上にナデを加えている。167は外面がタタキ後ナデ調整、内面が横ナデ調整。他は内外共に横ナデ調整、161は二条の沈線をめぐらし、164には一条の沈線をめぐらしている。

(15)　SE－35と出土陶器（Fig.18－172～179）

第4次調査区の中央部に存在する江戸時代の井戸、石積みの井戸で掘り方から多量の古代遺物が出土するが、いずれもが周辺の整地層のものと考えられる。

8点の陶器がある。172が頸部、他は胴部破片。172は頸部と肩部の境に段がつく、内外面共に横ナデで、黒色顔料が塗布される。広口壺か。175、177、178は内外面共横ナデ調整、175は二条の沈線をめぐらしている。177は軟質。173は外面はタタキの上に丁寧なナデを加えている。一条の沈線がめぐる。174は内外面共タタキ。176は外面に扁平な突線一条をめぐらす。自然釉がかかる。内面は受け具痕の上に横ナデがみられる。

(16)　SK－37と出土陶器（Eig.18－180～188）

第4次調査で検出した大型の瓦溜めの土坑。SB－31とSB－32の間に掘り込まれている。東西径7m、南北径6m以上、深さ40cmの不整楕円形をなす。埋土中には焼土塊が多量に含まれ、SB－31・32の焼失後に掘り込まれた可能性が強い。青磁器、白磁器、褐釉陶器、土師器、須恵器が共伴しているがその数は少ない。

陶器は9点がある。いずれも壺の破片とみられる。180は口縁部、他は胴部破片である。180は口縁の両端部が引きのばされ、口縁内側に段をもつ。頸部外面には二段にわたってヘラ描きの波状文が二段に描かれる。外面から口縁にかけて自然釉がかかる。胎土には多量の砂粒が混入されている。181は外面が斜格子のタタキで、その上に断面形カマボコ状の突線二条が貼り付けられている。内面は丸太の小口に刻み込まれた受け具痕が残る。年輪の幅はやゝ広い。183は肩部、小さい突線一条と沈線二条をめぐらし、上下二段に櫛描き波状文を施す。内面は横ナデ調整。軟質。182、186、188は内外共に横ナデ調整。182は沈線一条がめぐる。184、185、187は外面に平行タタキ、内面はナデ調整、外面は黒色に焼きあげる。

(17)　SK－40と出土陶器（Fig.19－189）

第4次調査でSB－31の基壇内に検出した土坑。南北径約3m、東西径約2.5mの不整長方形プラン、浅い土坑。

1点の陶器がある。胴部破片で軟質。外面は平行タタキの上に横ナデが加えられ、内面は受け具痕が凹みでかすかに残る程度にナデが加えられている。

(18)　SK－43と出土陶器（Fig.19－190）

第4次調査で確認した瓦溜め、SB－31とSB－32の間の北側に位置する。南北径5m、東西径4mの不整楕円形をなす。

1点の出土がある。外面には自然釉がかかり、内面は横ナデ調整。胎土は精選されたもので、焼成は堅緻、胎土の色調はアズキ色をなす。

(19)　SK－47と出土陶器（Fig.19－191、192）

第4次調査でSB－32の基壇内に検出した土坑である。SB－32の焼失後に掘り込まれたと考え

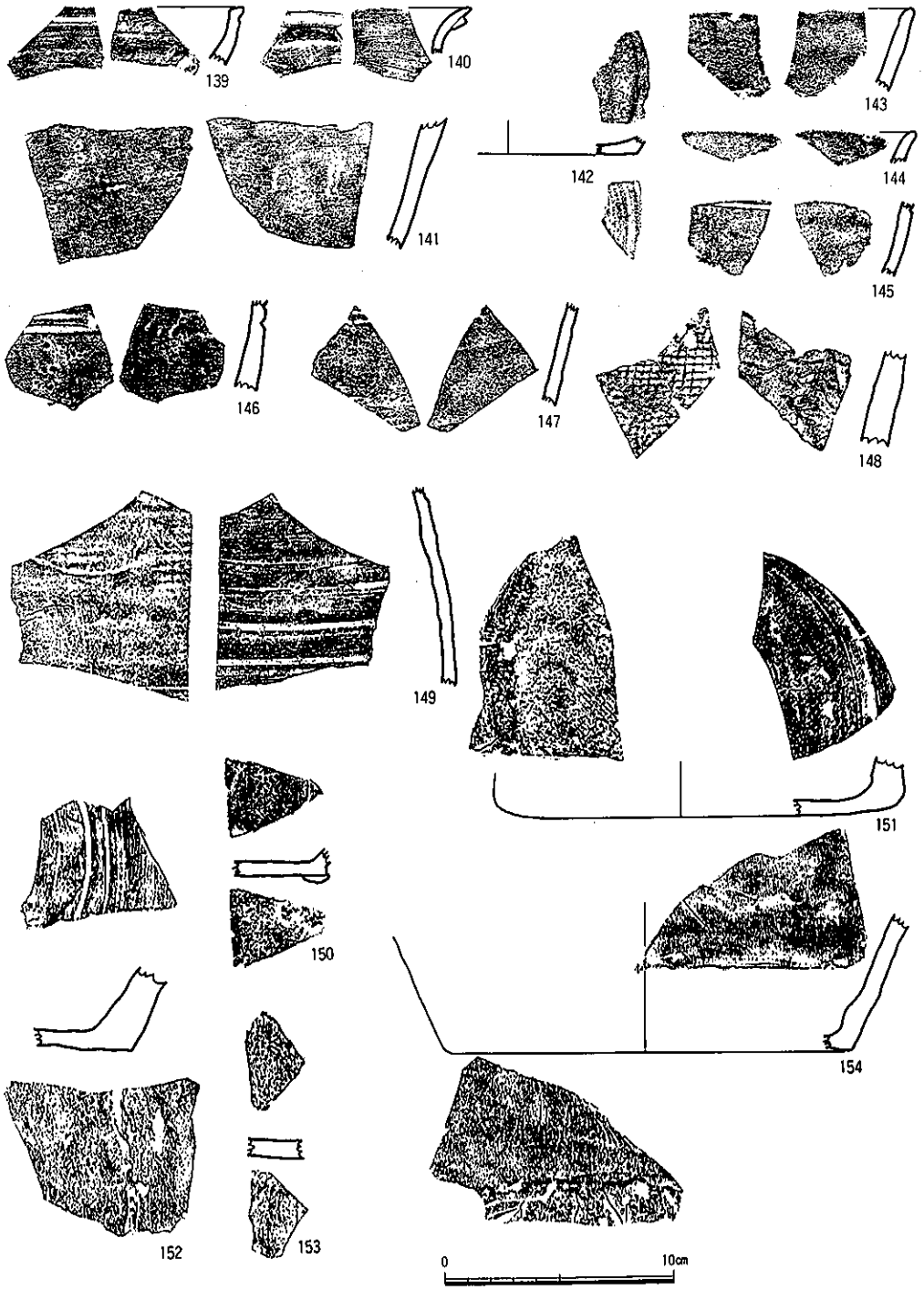


Fig.16　SB—32出土新羅・高麗陶器実測図

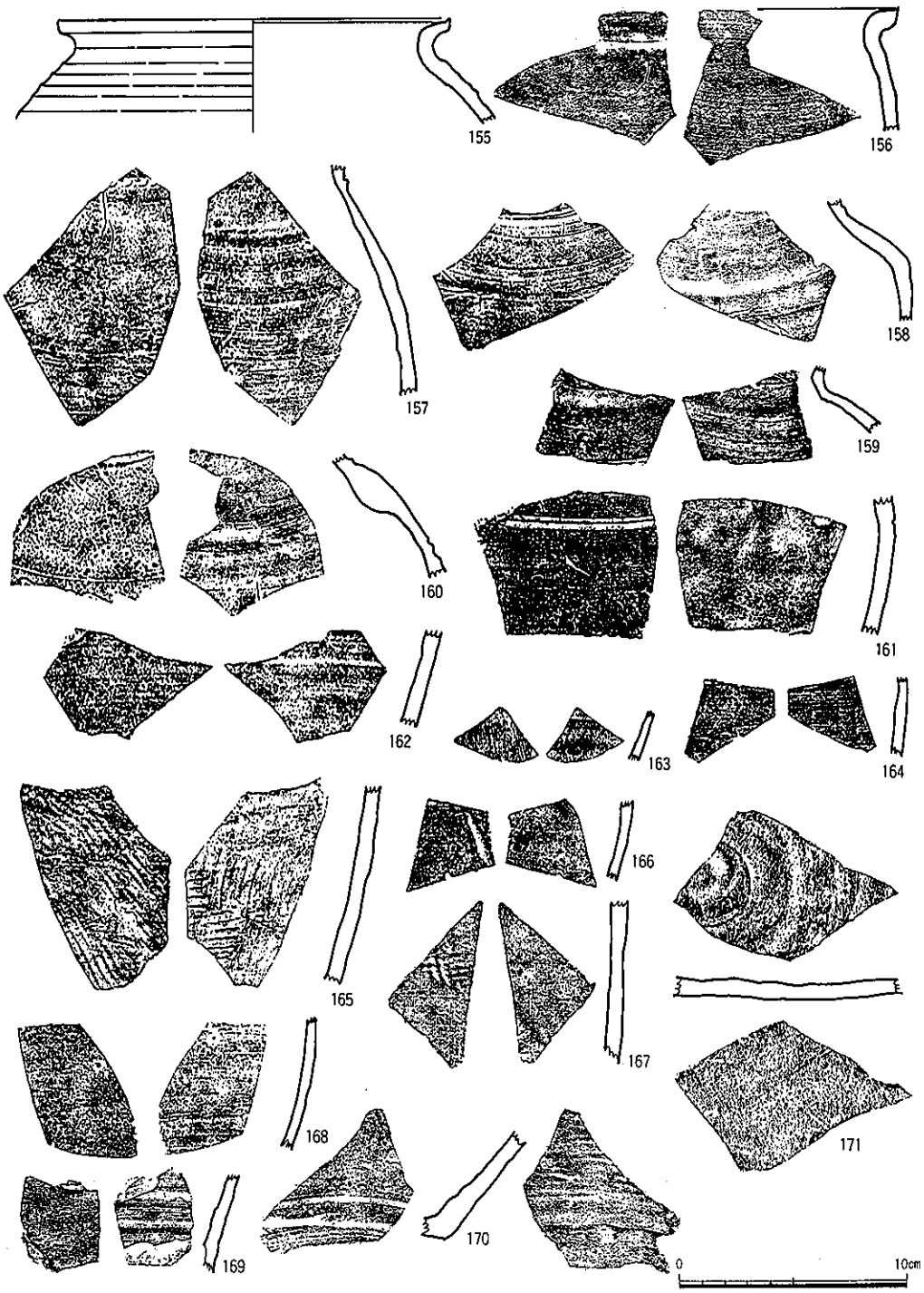


Fig.17　SK—33出土新羅・高麗陶器実測図

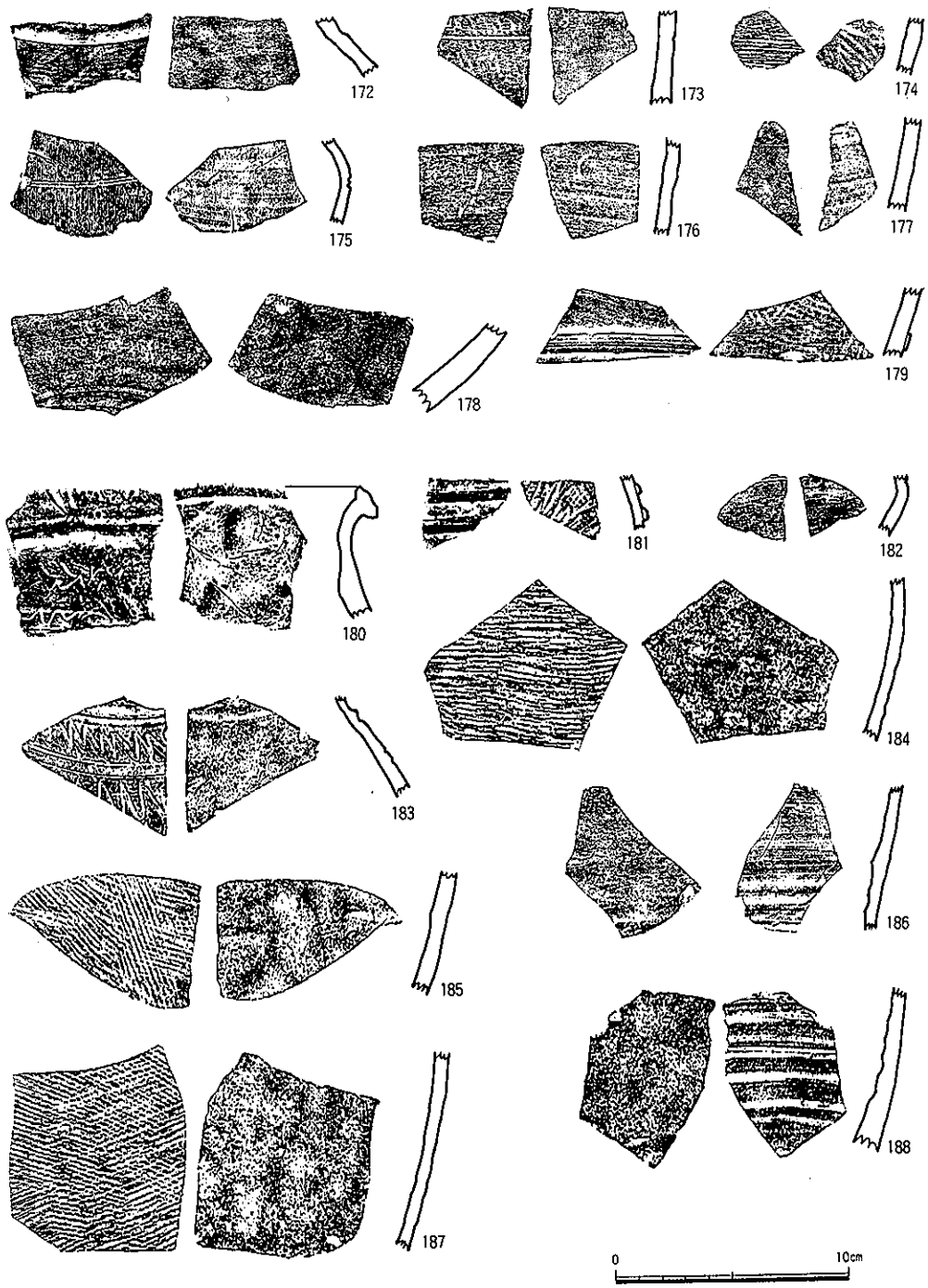


Fig.18　SE—35、SK—37出土新羅・高麗陶器実測図

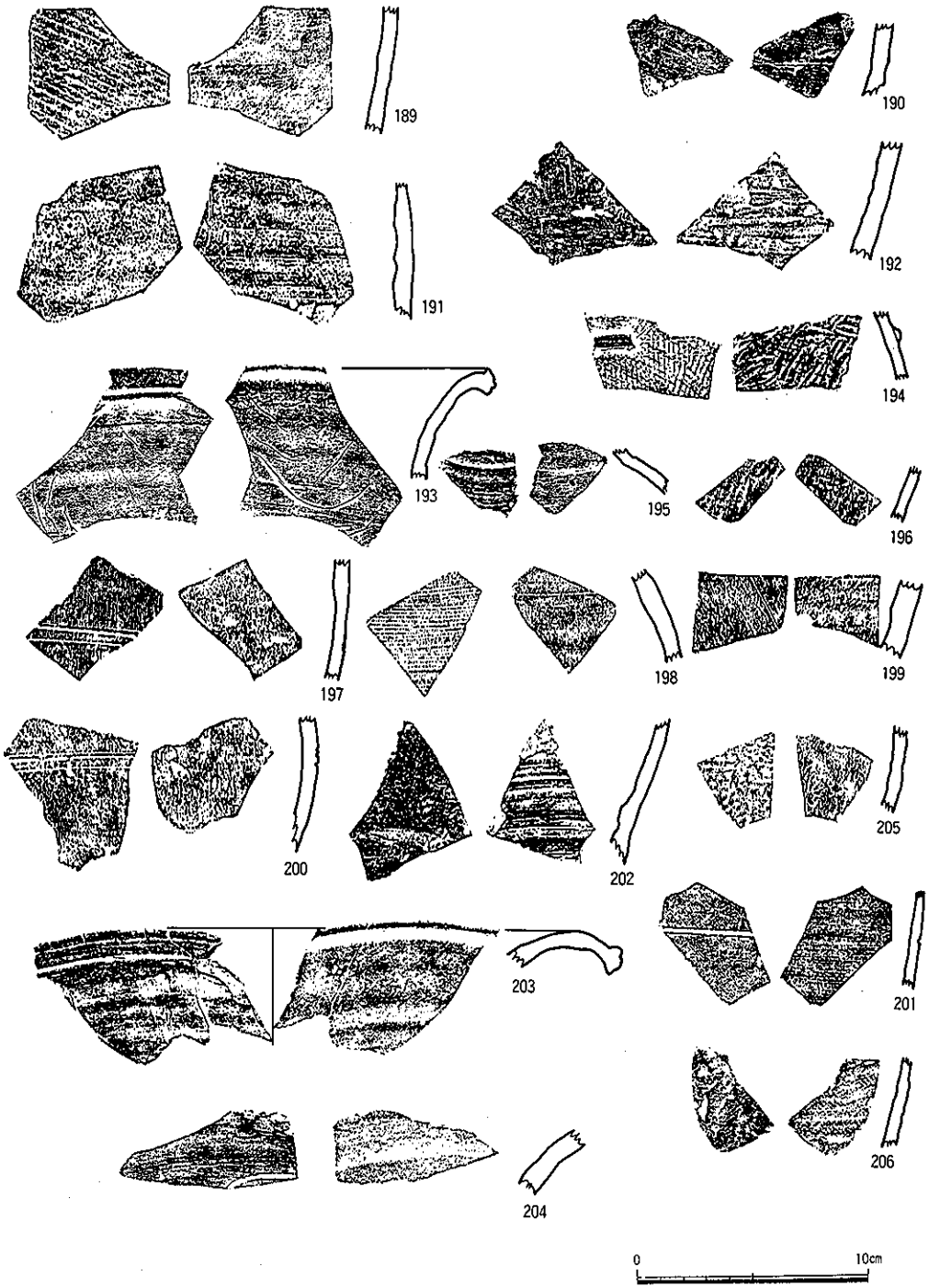


Fig.19　SK—40、43、47、54、55、SB—50、SG—51、SD—52出土新羅・高麗陶器実測図

られる。東西径4.5ｍであるが。展示館内に露出展示しているので攪乱部を除いた部分は未調査のため明かでない。若干の青磁器が共伴している。

２点がある。191は硬質、192は軟質である。いずれも甕の胴部破片。192は外面が横ナデ調整、内面はカキ目状の調整である。内外面共に黒色顔料が塗布されている。胎土はアズキ色、192は外面は格子目のタタキ後、横ナデ調整を加え、内面はヘラ削りである。

(20) SB－50と出土陶器 (Fig.19－193～200)

第５次調査で検出した大型の礎石建物。SB－31とSB－32を結ぶ軒廊か前面回廊とみられる建物であるが、前面が江戸時代の池によって切られているため不明。SB－31、32と同時期の建物である。遺物は雨落ち溝、礎石抜き穴のもので量は多くない。SB－31・32同様にすべてが同時期と認定することはできない。

８点の陶器が出土している。193は口縁部、195は頸部、他は胴部破片。195、197、200が軟質で他は硬質である。193は口縁部が肥厚し、下端部に沈線一条がめぐり、口縁内側に段がある。内外面共に横ナデ調整である。194は外面に斜格子目文のタタキ、断面カマボコ形の突線一条を貼りつける。内面は丸太の木口に刻みを入れた受け具痕がつく。木の年輪の間隔は粗くスギ材等と考えられる。195は頸部と肩部の境に段をもつ。内外面共に横ナデ調整。197、200は同一個体、三条の沈線をめぐらす。外面は横ナデ調整、内面は削り状の横ナデ調整である。196は外面がカキ目、内面が横ナデ調整である。須恵器か。199は内外面共横ナデ調整である。

(21) SG－51・SD－52と出土陶器 (Fig.19－201、202)

第５次調査で確認した江戸時代の池、溝状に掘り込まれたゴミ穴。共に主体となる遺物は江戸時代後半の陶磁器類で、高麗陶器は周辺から流れ込んで混入したものとみられる。

201は内外面共に丁寧な横ナデ調整が加えられ、外面に一条の沈線がめぐる。202は広口壺の底部付近の破片とみられる。内外面は横ナデ調整、内面は凸凹が著しい。共に硬質。

(22) SK－54と出土陶器 (Fig.19－203、204)

第５次調整でSB－31の基壇上に確認した土坑である。SK－61、SK－62を切って掘り込まれている。土坑は南北径2.65ｍ東西径1.4ｍの端整な長方形プラン。深さ0.8ｍで断面形は逆台形。多量の瓦と青磁器、土師器が共伴する。

２点の出土がある。共に軟質、口縁部、頸部の破片で同一個体の可能性がある。203は口縁が大きく外反し、やゝ下方に下る。口縁は両端部が引きのばされ、沈線一条がめぐる。口縁内部には段ができる。204はヘラ描きによる波状文がある。共に内外は横ナデ調整。

(23) SK－55と出土陶器 (Fig.19－205、206)

第５次調査で確認した土坑。SB－50の基壇上に掘り込まれている。東西径2.3ｍ、南北径2.5ｍの楕円形プラン。

２点の出土がある。206は軟質205は外面に格子目文のタタキ、南面は横ナデ調整、須恵器の

可能性が強い。

(24)　SK－56と出土陶器（Fig.20－207～217）

第５次調査区の西側で調査した土坑である。検出面では東西径4.15ｍ、南北径3.85ｍの不整楕円形プラン、底は三つにわかれるが土層断面では切り合い等は認められない。深さ0.8ｍ～0.2ｍ。埋土は上下二枚に大別される。多量の青磁器、土師器、須恵器が共伴する。また、馬骨、鹿骨、魚骨等の食料残滓も多量出土している。

11点の陶器が出土している。210が底部破片で他は胴部破片である。207、208、211、213、215は軟質、他はすべて硬質である。207、208、211、213、215は軟質、他はすべて硬質である。207は外面が格子目文でタタキ後横ナデ、内面が横ナデ調整、粘土の接合痕が明瞭。208は外面が格子目文のタタキ、断面カマボコ形の突線を貼り付ける。内面は大きい格子目文のタタキの上にヘラ削り状のナデを施す。209は広口壺の胴部内外面に黒色顔料が塗布される。内外面共横ナデ調整。210は平底、底部に糸切り痕が明瞭である。211は外面が格子目文のタタキで灰釉がかけられている。内面はナデ調整。212、214、217は内外面共に横ナデ調整。212には一部に黒色顔料が塗られる。217には一条の沈線がめぐる。213は外面に粗い格子目のタタキを施し、一条の沈線がめぐる。内面は横ナデ調整、215は外面に細い格子目文のタタキ、内面は横ナデ調整。216は内外面共に格子目文のタタキであるが、大きさに違いがあり、内面が粗い。

(25)　SK－57と出土陶器（Fig.20－218～225、Fig.21－226～227）

第五次調査で確認し、第６次調査で調査した土坑。SK－69・70と一直線に並び便所遺構とみられるものである。土坑は岩盤に掘り込まれ、主軸をほぼ真北にとっている。南北径3.95ｍ、東西径1.1ｍの隅丸長方形、深さは現状で3.1ｍ、江戸時代に削平されているので元来は４ｍ以上であったと考えられる。埋土は便槽にたまった糞尿の類と以後に流れ込んだ土層の二層に大別できる。共伴遺物は繊木、木簡、須恵器、土師器、瓦類がある。木簡は里制・郷里制で書かれた二者があり、、木簡でみる限り715年を前後するものであるが、使用目的や共伴の須恵器からすればやゝ時期が下る。新羅陶器の実年代をおさえるには好都合の遺物である。

11点の陶器が出土している。220、222、225を除いて樽形になると考えられる。223、224、227、228は軟質で瓦質である。226は樽形をなす瓶。短側の平坦面を下にして樽形に成形し、側辺の一ヶ所に穿孔し口頸部をとりつけたもの。頸部は内傾しながらたちあがり、口縁部は外反し、途中屈曲しやゝ内傾気味に直立する。端部は平坦におさめる。全体は横ナデ調整、口縁下およびその左右の３ヶ所に２条の沈線をめぐらす。沈線は一部では三条になる。胎土は精良、焼成良好で赤味をおびた灰色をなす。口径6.4cm、218、219は同一個体とみられる。樽形の丸味をもつ部分の破片。外面は横ナデ調整で三条の沈線をめぐらす。内面も横ナデ調整であるが凸凹が著しい。白い結晶化した付着物が著しい。221も同様の部位と考えられる。外面はカキ目状の調整、内面は横ナデ調整、224、227、228は同一個体と考えられる。外面には格子目文のタタキが

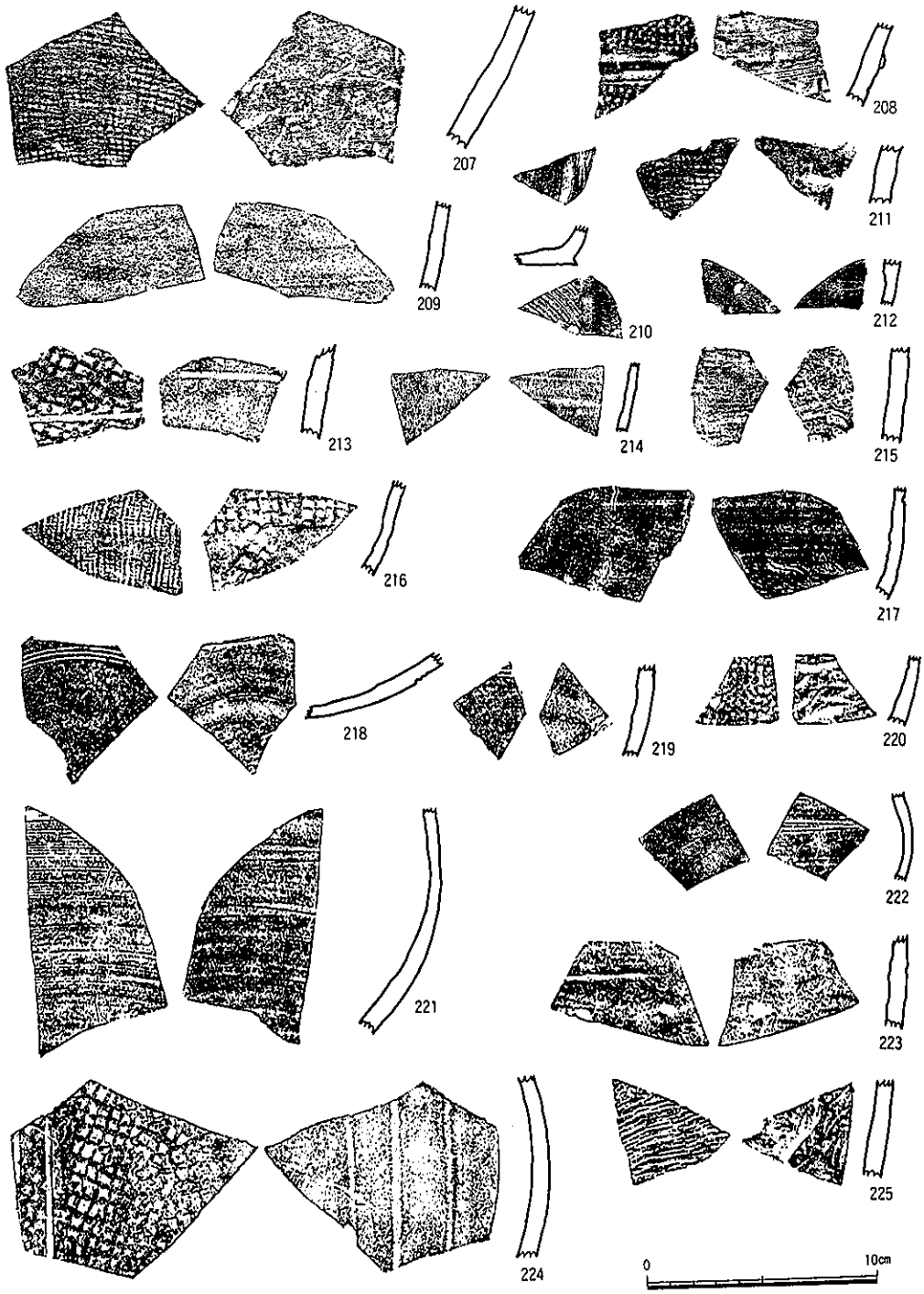


Fig.20　SK—56、57出土新羅・高麗陶器実測図

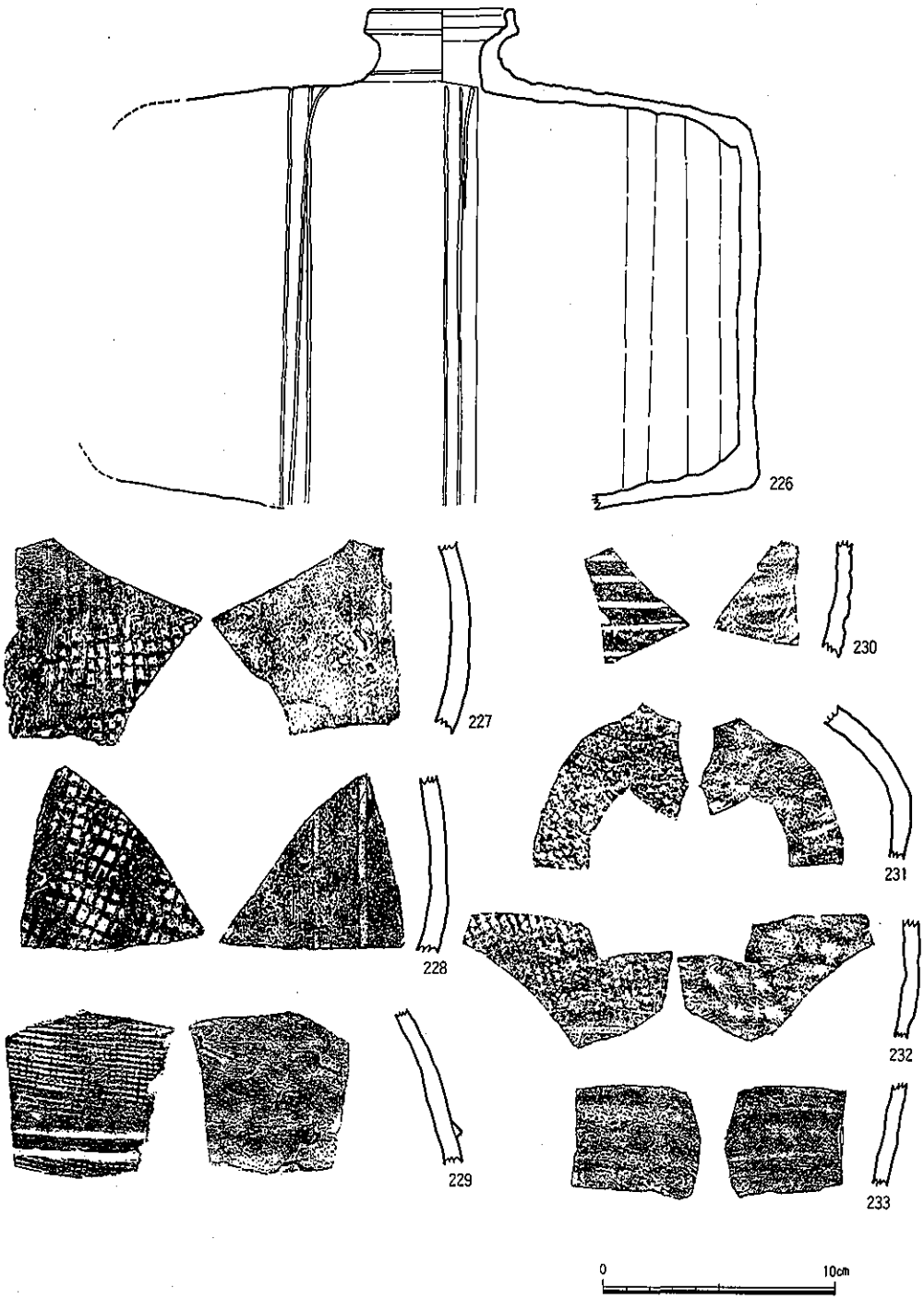


Fig.21　SK—57、59、61出土新羅・高麗陶器実測図

あり、その上に横ナデが加えられる。224には沈線がめぐらされている。内面は横ナデ調整。227の内面には218同様の白い付着物がみられる。223は内外面共に横ナデ調整、外面に一条の沈線をめぐらす。222は内外面共に横ナデ。220は外面が格子目タタキ、内面が同心円文タタキである。

(26) SK－59と出土陶器 (Fig,21－230)

第５次調査区東南に検出した土坑、削平が著しく底のみが残る。東西径約２ｍ、南北径約2.5の楕円形プランをなす。深さ10cm前後。若干の青磁器、瓦類がある。

陶器は１点出土している。硬質で内外面に横ナデ調整。外面に５条の沈線がめぐる。中国産陶器の可能性もある。

(27) SK－61と出土陶器 (Fig.21－229、231～233)

第５次調査で調査した土坑、SB－31の基壇を切り、SK－54に切られている。南北径2.05ｍ、東西径1.65ｍの不整楕円形プラン。深さ0.4ｍ。床面から多量の青磁器が一括出土していて共伴する。SK－56の青磁器との接合関係があり、両者が同一時期であることがわかる。

４点の陶器が出土している。229は軟質で他は硬質。229は外面に細い格子目文のタタキを施し、上に横ナデを加えている。断面カマボコ形の突線一条を貼りつける。内面には特異な受け具痕が残り、その上にナデを加えている。231、232は同一個体、小型壺の肩部から胴部にかけての破片。外面には格子目文のタタキを加え、肩部は横ナデ、下半部はヘラ削りによって消している。内面はナデ調整であるが、部分的に布痕が残る。233は内外面共に横ナデ調整である。

(28) SK－62と出土陶器 (Fig.22－234～238)

第５次調査で調査した土坑。SB－31、SB－50、SK－54、SK－56と切り合い関係にあり、SB－31、50、SK－56を切り、SK－54に切られている。東西径2.2ｍ、南北径2.4ｍの不整方形プラン、深さ0.5ｍ、土坑中には玄武岩の大石三個が入れられている。建物廃絶後に礎石等のかたづけに掘られた穴か。埋土中には食料残滓が捨てられ、青磁器や瓦類が多量存在する。

５点の陶器が出土している。いずれも小破片、237は底部、他は胴部破片である。234は外面が平行タタキ、内面がやゝかわった受け具痕が残る。235は内外面共に横ナデ調整。外面に櫛描波状文を施す。236は外面が長方形格子のタタキで、内面はナデ調整。238は薄手、内外面共横ナデ調整。内外面に黒色顔料を塗る。237の底部は小さい平底。やゝ厚味がある。内外面共に横ナデ調整。

(29) SD－67と出土陶器 (Fig.22－239)

第５次調査区西側で検出した幅の狭い溝でSB－31を切っている。溝幅20cm、深さ15cmである。近世溝か。

１点の出土があるが、周囲から流れ込んだ可能性が強い。軟質で、外面には細い格子目文のタタキを施し、上から横ナデを加えている。断面カマボコ形の突線一条を貼りつけている。内

面は特異な受け具痕があり、上から削り状のナデを加えている。

(30)　SK－69と出土陶器（Fig.22－240～244、246）

第5次調査で確認し、第6次調査で発掘した土坑である。便所遺構の三基のうち一番北側に位置する。土坑は東西径1.4m、南北径1.3mの隅丸方形プランで深さ4m。土層堆積等はSK－57と同様である。多量の籌木や須恵器、土師器、瓦類が共伴する。年代的にはSK－57と同じである。

陶器は6点出土している。240、243、244は樽形陶器とみられる。240、243は同一個体である。胴部破片。外面は平行タタキ後、わずかにナデを加える。内面には細い縦線と横線を組み合せた受け具痕が残り、上からナデが加えられている。内面には白い付着物がみられる。胎土は砂粒を含むが精良、軟質、244は丸くおさめられる部分の破片、内外面は横ナデ調整で一条の沈線がめぐる。246は胴部破片。外面は格子目文のタタキ、内面は横ナデ調整。軟質、241は内外面共に横ナデ調整。242は外面にやゝ横長の格子目タタキを加え、内面はナデ調整である。

(31)　SK－70と出土陶器（Fig.22－245、247、248　Fig.23－249、250）

三基並列した便所遺構の中央に位置する。SK－69、SK－57とはそれぞれ1.8m離れている。土坑は東西径1.25m、南北径1.35mの円形に近い隅丸方形プラン、現状の深さは3mであるが元来は4mである。埋土の状態はSK－57と同様である。共伴資料は多量の籌木の他、土師器、瓦類がある。

5点の陶器が出土している。いずれも硬質で、同一個体の可能性が強い。247は平坦なる部分、他は胴部破片である。外面は平行タタキ後、横ナデ調整によってタタキを消している。内面は丁寧な横ナデ調整。247には一条の沈線、249には三条の沈線がめぐらされ、沈線間には櫛描きの波状文がつけられる。胎土には砂を含むが精良、焼成良好である。径は24cm前後になる。

(32)　SK－72と出土陶器（Fig.23－251）

第5次調査区東北端にある土坑。径75cmの円形プラン。SB－50の礎石抜き穴と切り合い関係にあり、抜き穴を切っている。共伴遺物には少量の瓦と青磁器がある。

1点の陶器が出土している。壺の口縁部、頸部は短かく口縁は二重口縁になる。口縁は外傾しながらたちあがる。頸部と肩部との境は突帯状になり、口縁内側には段ができる。内外面共に横ナデ調整である。

(33)　SK－73と出土陶器（Fig.23－252）

第5次調査区北側中央に検出した瓦溜めの土坑である。径70cmの円形プランをなす。出土遺物は少ない。

1点の出土がある。底部と考えられる破片で、内外面共に横ナデ調整である。

(34)　SK－75と出土陶器（Fig.23－253～255　Fig.24　Fig.25－275、276）

第5次調査で確認し、第6次調査で発掘した大型の土坑である。多くの遺構と切り合い関係

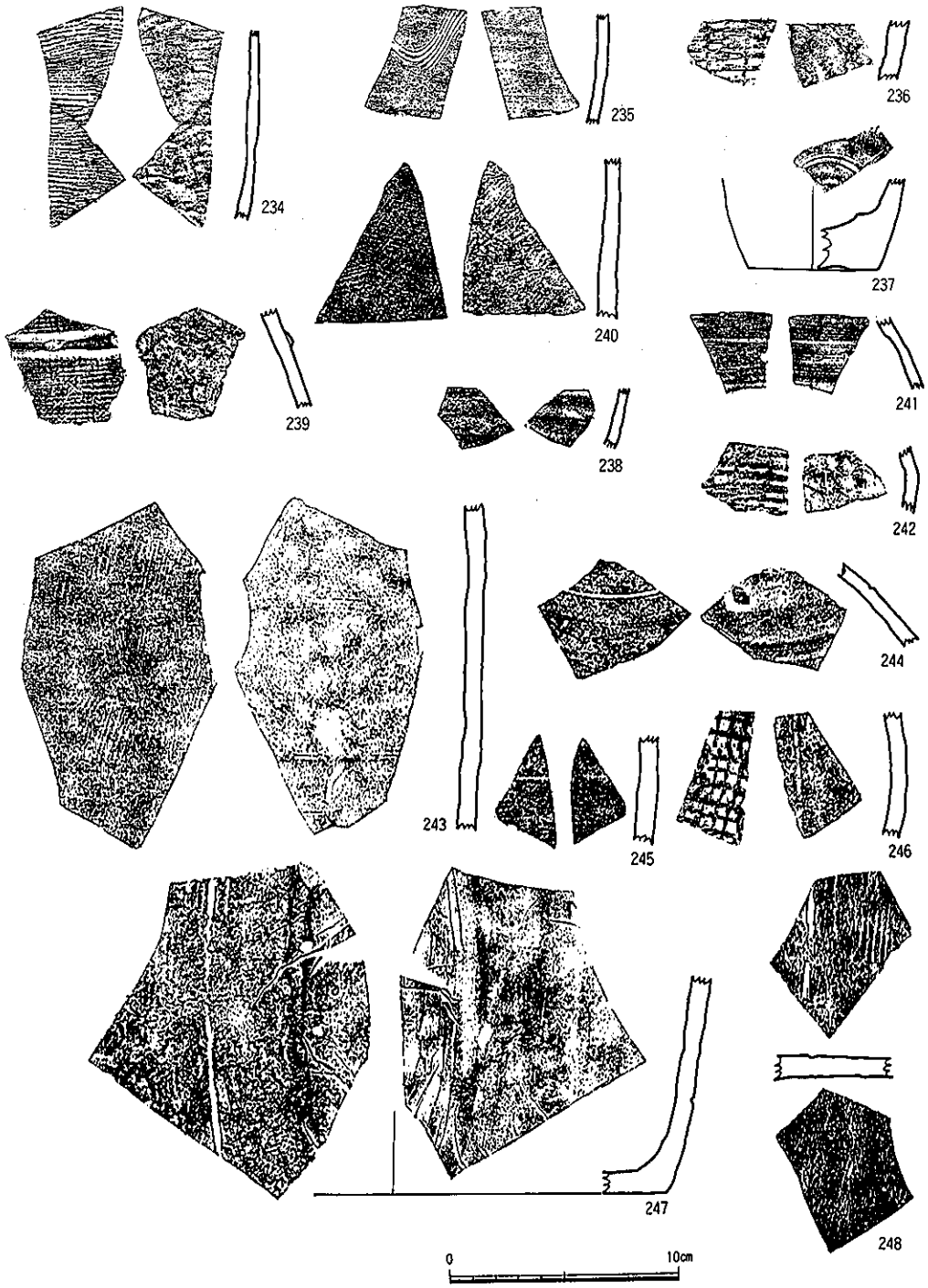


Fig.22　SK—62、67、69、70出土新羅・高麗陶器実測図

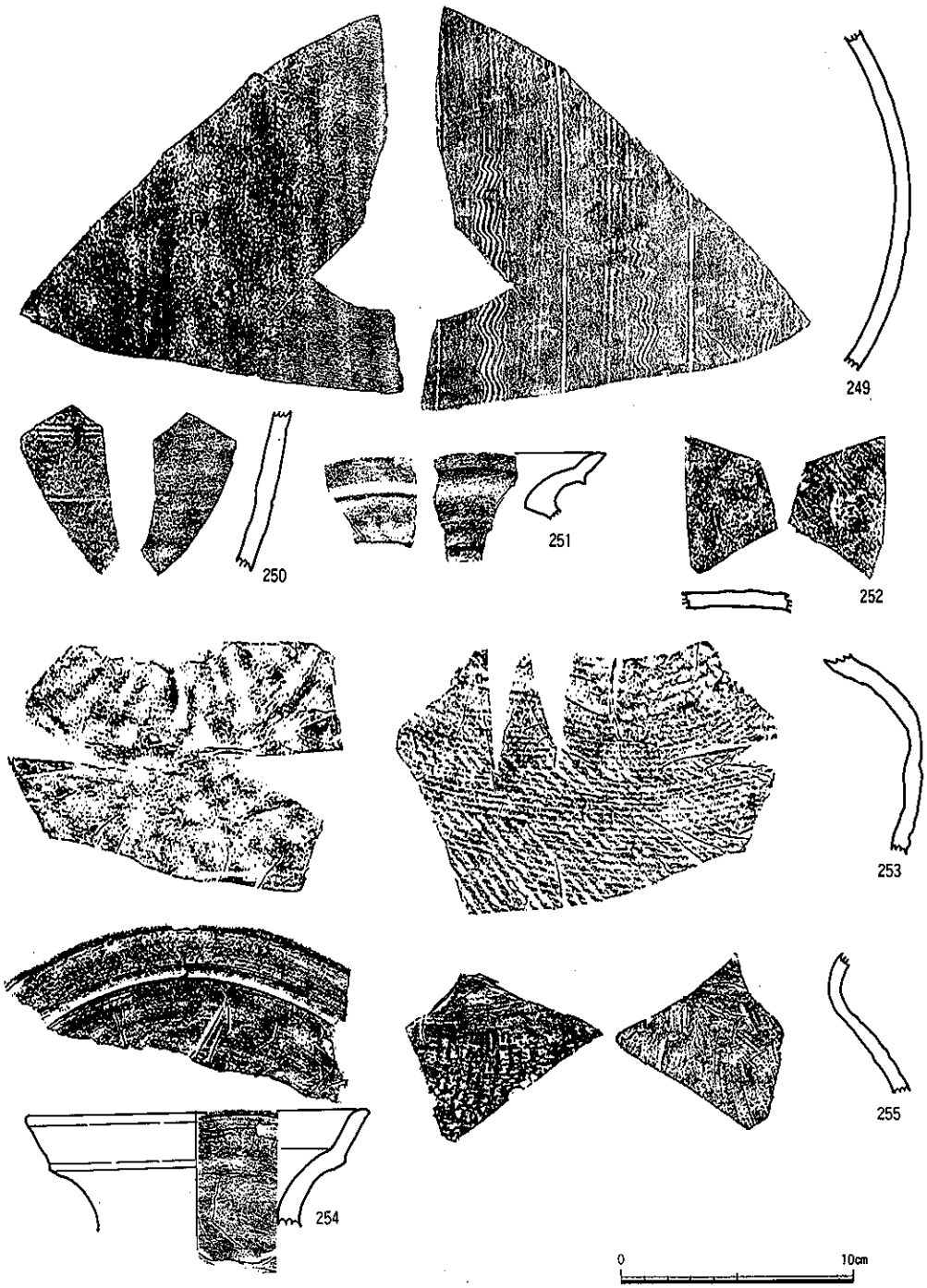


Fig.23　SK—70、72、73、75出土新羅・高麗陶器実測図

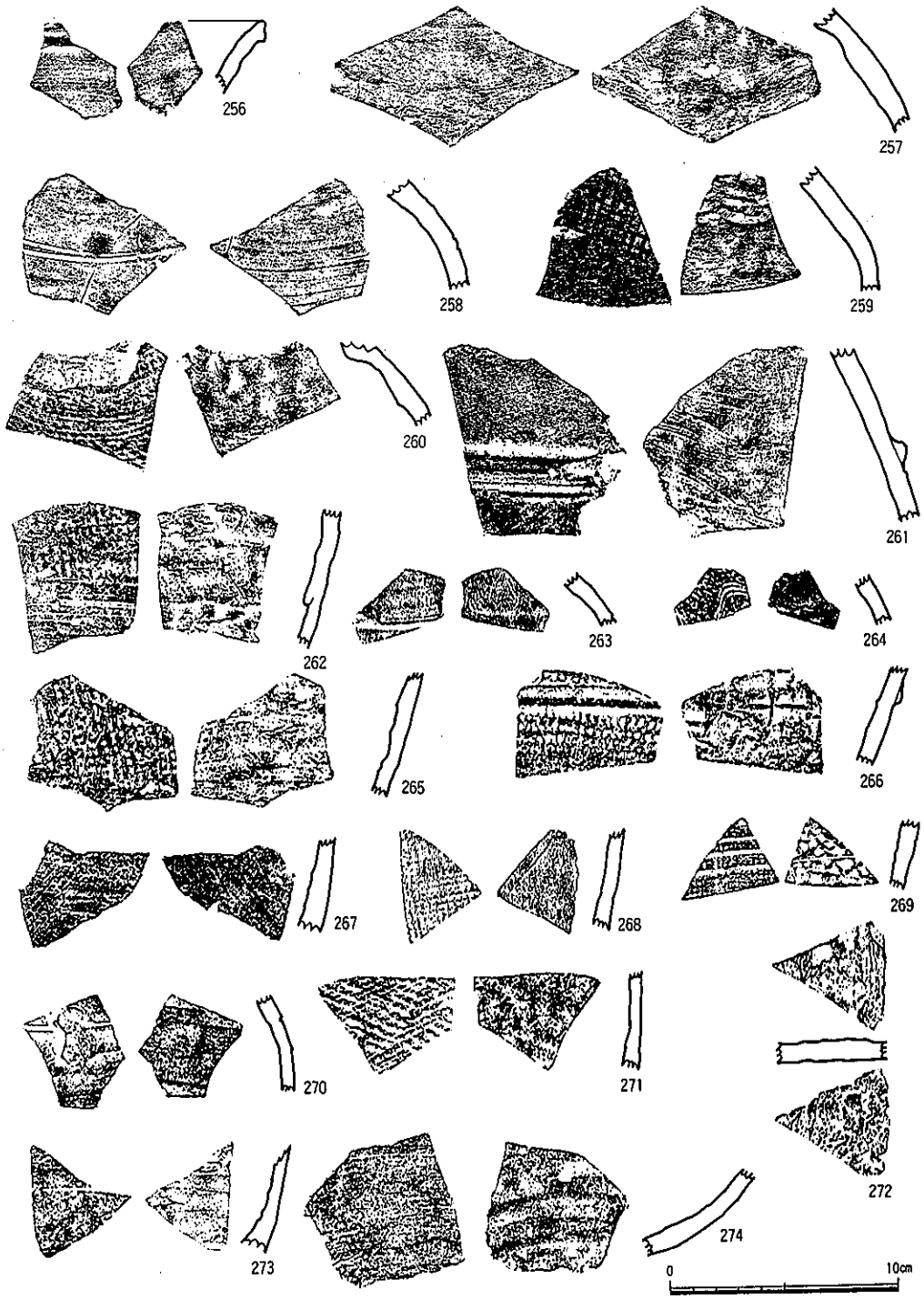


Fig.24　SK—75出土新羅・高麗陶器実測図

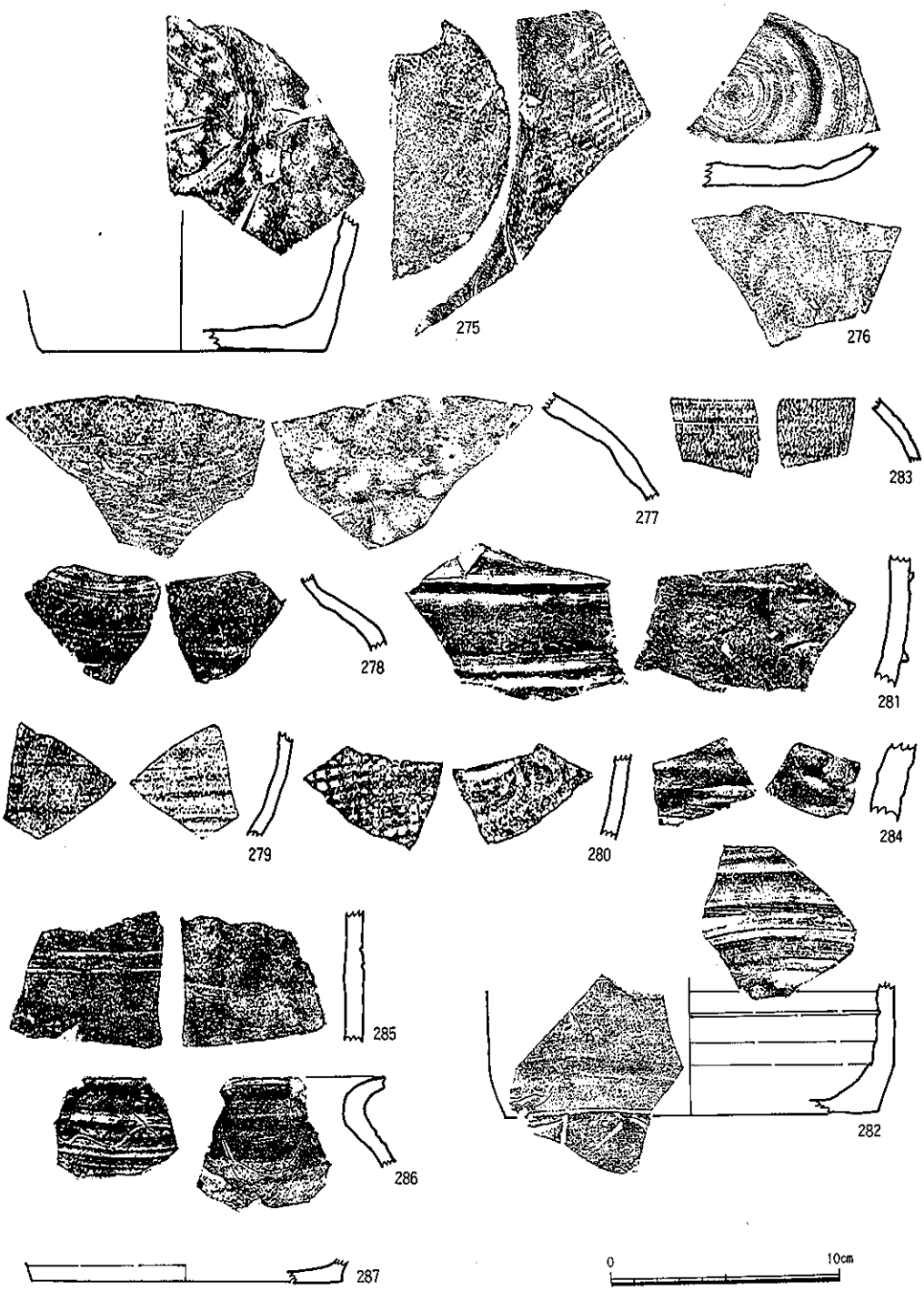


Fig.25　SK—75、78、80、82、84、85、89、99出土新羅・高麗陶器実測図

にあるが、SB－32より後出であることは明確である。東西径5.55ｍ、南北径2.35ｍの不整の長楕円形プラン、深さ1.1～1.6ｍ底は平坦でなく凸凹がある。埋土は自然の流れ込みの状態を示している。土坑内からは青磁器、白磁器、須恵器、二彩、イスラム陶器、ガラス小玉等の他、食料残滓である獣骨、炭化物が多量に出土している。

24点の陶器が出土している。254、256は口縁部、253、255は頸部から肩部、272、275、276は底部、他は胴部破片である。253、254、256、257、259、260、266、271は軟質で他は硬質である。254は二重口縁、口縁と頸部の境が突線状になる。内外面共横ナデ。256は口縁下方がわずかに引きのばされる。253は外面に平行タタキを加えた後、カキ目状の調整。内面はナデ調整。260、271は同一個体か。255は外面に格子目文のタタキ、頸部は削り状の横ナデ、内面はヘラ削り。257は内外面共ナデ。258は二条の沈線をめぐらす。259は外面が格子目文タタキ、内面が平行の受け具痕で、内外面共下半部が消される。261は外面に断面台形の突線一条をめぐらす。内面はヘラ削り状の調整。262は外面に格子目文タタキ後ヘラナデ。さらに刺突文で文様を描く。内面はナデ調整。263、270は広口壺、外面と内面の一部に黒色顔料を塗る。共に一条の沈線をめぐらし、270には横耳の痕跡が残る。264は櫛描き波状文がつく。265は262と同一個体か。266は外面に格子目文のタタキ、断面三角形状の突線一条をめぐらす。内面は粗い格子目文のタタキ。267は内外面にタタキを加え、後からナデ、ヘラ磨きをする。269は外面に三条の沈線をめぐらし、内面は格子目文タタキ。272、273は262と同一個体か。268は外面は格子目文タタキ、内面はヘラ磨き調整。274は外面ヘラ削り、内面横ナデ調整。須恵器か。275は平底、外面は平行タタキ後、カキ目、横ナデ調整。内面はナデ調整。276は丸底、外面は丁寧なヘラ削り、内面はナデ調整。

(35) SK－78と出土陶器（Fig.25－277）

第５次調査で確認、第６次調査で調査した。SK－75に隣接した土坑である。遺物若干が出土している。

１点の出土がある。壺肩部破片。外面は平行タタキを加えた後横ナデ調整を加える。内面はナデ調整であるが指圧による凸凹が著しい。

(36) SK－80と出土陶器（Fig.25－278～280）

第５次調査区東端に検出した溝条の土坑。南北径４ｍ以上、東西径0.7ｍ、深さ40cm。青磁器約200個体がほぼ完形で投棄され、少量の白磁器が共伴している。

３点の陶器が出土している。278は頸部から肩部にかけての破片。肩部は稜線をもって屈曲する。内外面共横ナデ調整。279は外面は丁寧なヘラ削り、内面横ナデ調整、軟質、280は外面格子目文タタキ、内面は同心円タタキ。

(37) SK－82と出土陶器（Fig.25－281）

第５次調査区北半部中央に近い東端部で検出した土坑。他の遺構と切り合いがあるが、SB－

50より新しく、SK－85、SK－100に切られている。土坑は東西径4.95ｍ、南北径2.1ｍの長楕円形プラン。深さ65～70cm。約50個体の完形に近い青磁器、土師器、開元通宝、食料残滓の獣骨などが出土している。

１点の出土がある。大型の甕ないしは壺の胴部破片である。軟質、外面は横ナデ調整で、断面カマボコ形の突線二条が貼り付けられる。内面は一部に受け具痕が残るが、横ナデによって消される。

(38)　SK－84と出土陶器（Fig.25－282）

第５次調査区西端、SK－56と切り合い関係にある土坑であるが、大部分がSK－56に切られているためプランを明らかにすることはできない。浅い土坑で楕円形をなすと考えられる。青磁器など若干の遺物がある。

１点の出土がある。底部破片で、平底、体部はやゝ丸味をもってたちあがる。内外面共に横ナデ調整。

(39)　SK－85と出土陶器（Fig.25－283～285）

第５次調査区東端部に確認した土坑。SK－82と切り合い関係にあり、SK－82を切っている。径約1.5ｍの円形で、スリバチ状をしている、深さ約50cm。

３点の陶器が出土している。いずれも内外面共に横ナデ調整。283は一条の沈線がめぐり、内外面に黒色の顔料を塗る。284は外面に黒色顔料を塗る。285は外面に二条の沈線がめぐる。

(40)　SK－89と出土陶器

第５次調査区東端で検出した土坑である。SK－82と切り合い関係にあり、SK－82に切られている。東西径約１ｍ、南北径1.2ｍの楕円形をなす。

口縁部１点がある。頸部は短かく、口縁は外反する。広口の壺と考えられる。内外面共に横ナデ調整。外面には三条の沈線とヘラ描きによる波状文をめぐらす。外面と口縁内面に黒色顔料を塗るが、外面は自然釉で変色している。

(41)　SK－99と出土陶器（Fig.25－287）

第５次調査区中央部で検出した土坑である。径約0.7ｍの円形プランで深さ30cm、断面形はスリバチ状に凹む。

底部１点の出土がある。平底で内外面は横ナデ調整、内面の一部に黒色顔料が塗られている。胎土は精良で、焼成堅緻、胎土はアズキ色をしている。

(42)　SK－100と出土陶器（Fig.26）

第５次調査区中央部東端に検出した土坑、第６次調査で発掘を行なった。SK－82より新しく、SK－85より古い。南北径1.7cm、東西径1.6ｍ以上の不整円形プラン。深さ0.3ｍで底は平坦。青磁器、土師器、須恵器、食料残滓である獣骨が共伴する。

大型の広口壺２個体がある。288は約半分が現存する。底部はあげ底状の平底、体部下半は外

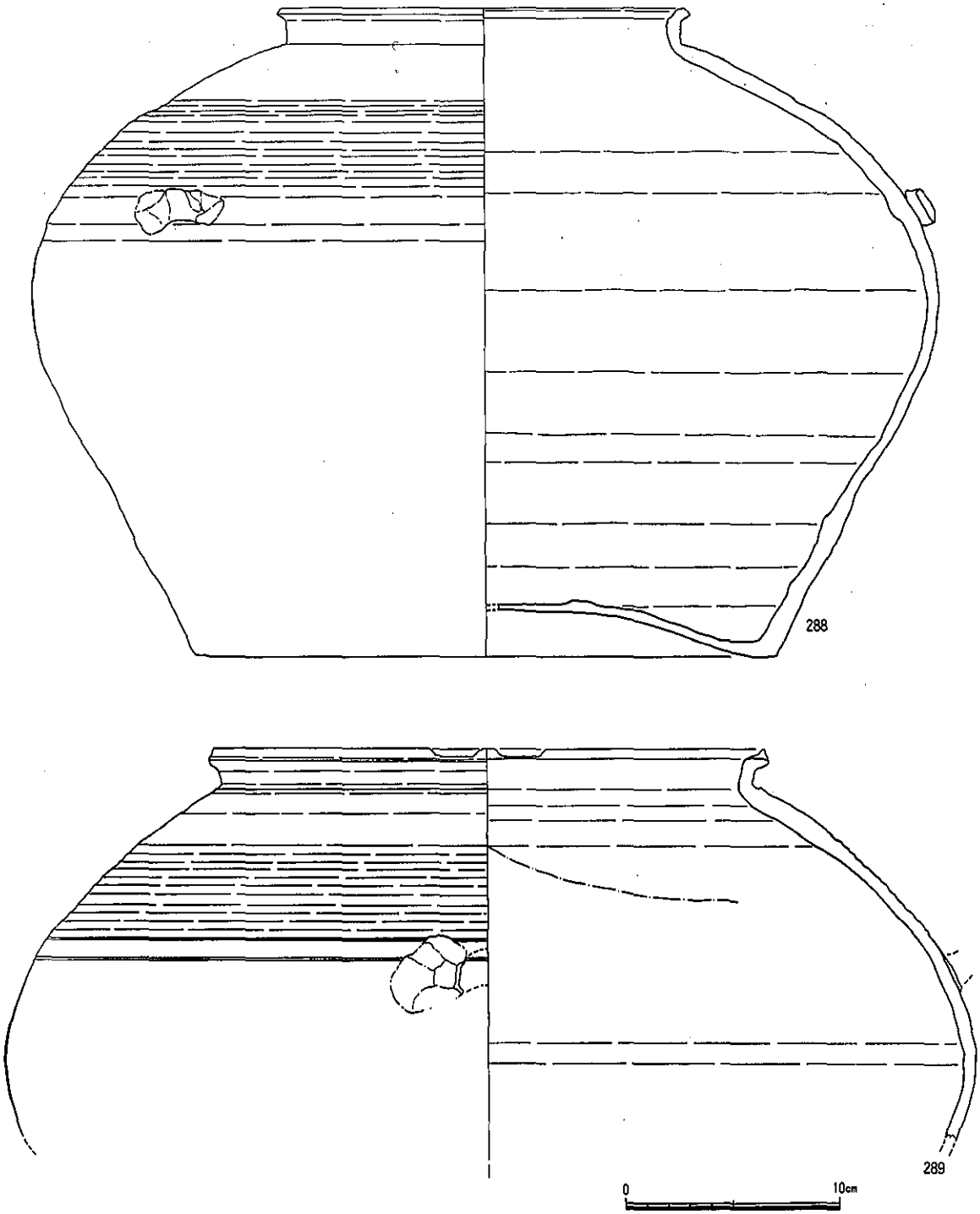


Fig.26　SK—100出土新羅・高麗陶器実測図

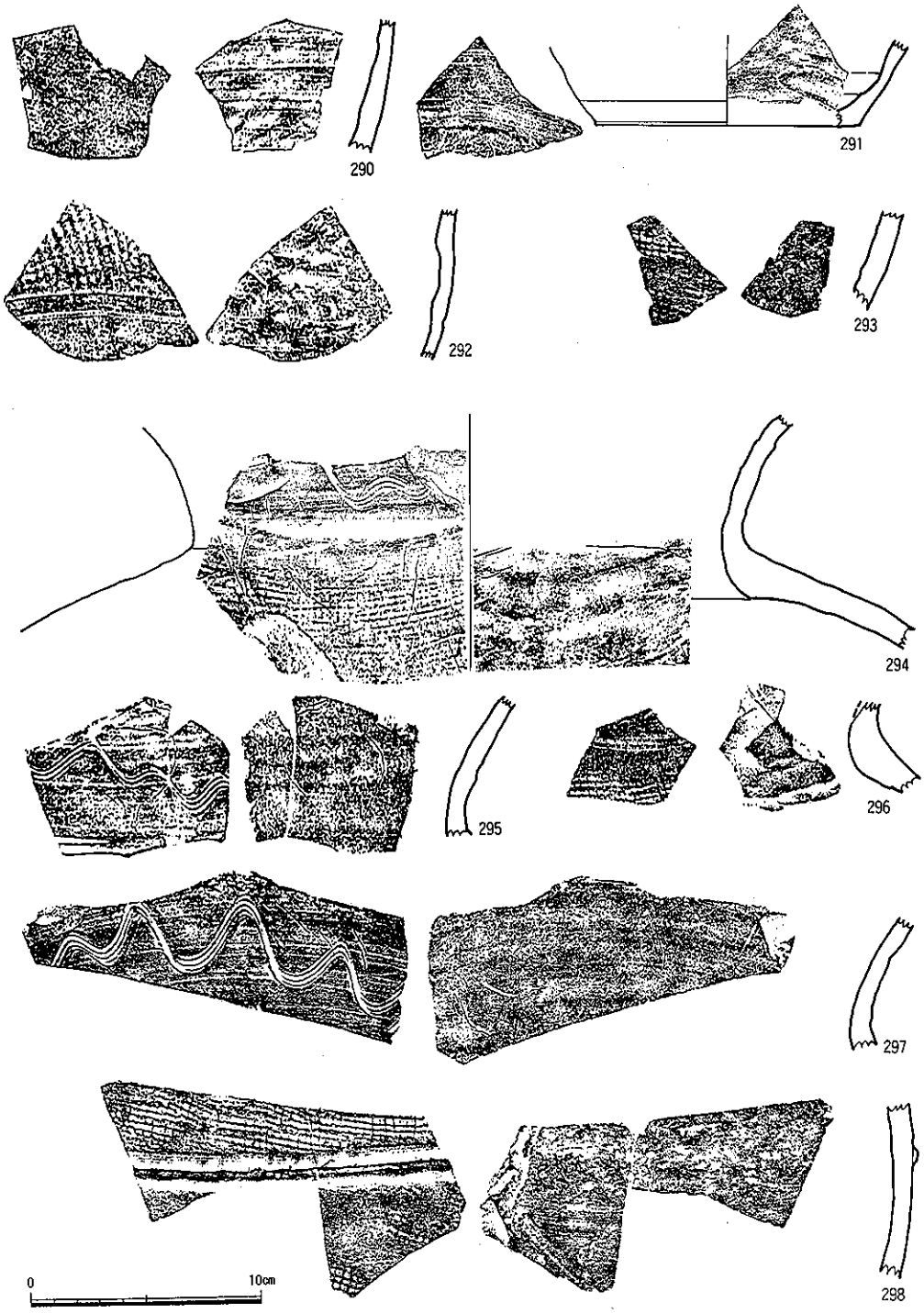


Fig.27　SK—91、92、93、94、105出土新羅・高麗陶器実測図

傾しながら直線的にたちあがり、上半部は屈曲して内湾する偏平な器形。胴部最大径は胴中位にある。頸部は短く直立し、口縁部は外反する。口縁部内側に凹線一条がめぐる。胴最大径よりやや上位に横耳がつく。元来は5個あったとみられる。外面は上半部に平行凹線が数条にわたってめぐらされ、その上に、横ナデ調整、器壁は薄く0.5～0.7cm。下半部と内面は横ナデ調整。全体に黒色顔料が塗られる。無数の火ぶくれ状のふくらみがみられ、上半部から口縁内側、内底部に自然釉がみられる。口径19.1cm、底径27.1cm、器高30.1cm。胴部最大径42.6cm。289は体部下半を欠く。胴部最大径は中位にある。肩部と頸部の境に段がみられ、頸部は短くたちあがり、口縁は外反する。口縁端部はつまみあげられ尖り気味におさめる。口縁内側には平坦面が形成される。胴中位よりやや上に横耳が対称に2個つけられ、それに対応して口縁部にたちあがりが削りとられる。耳の部分に沈線二条がめぐらされる。さらにそれより上に凹線15条がめぐらされている。外面と口縁内側に黒色顔料が塗られる。口縁25.8cm、胴部最大径45.6cm

(43) SK－91と出土陶器 (Fig.27－290)

第5次調査区東端に検出された土坑。SB－50の礎石抜き穴を切っている。江戸時代の池、テニス・コート排水路の下になる全掘していないので全形は不明であるが不整形プラン。

1点の出土がある。底部に近い胴部破片。内外面共に横ナデ調整。

(44) SK－92・93と出土陶器 (Fig.27－291・292)

第5次調査区北側の東端で確認した土坑で、SK－75に切られている。SK－92はさらにSK－93も切る。SB－50の礎石抜き穴をSK－93が切っている。SK－92は東西径1.3m、南北径1.1＋α m、SK－93は東西径1.1m、南北径1.1＋α mの不整楕円形プラン。深さ20cm。

共に各1点が出土している。同一個体で接合できる。外面は格子目文のタタキを加え、下半部はヘラ削りによってタタキを消す。内面はナデ調整。平底の底部、胎土はアズキ色をなす。

(45) SK－94と出土陶器 (Fig.27－293)

第5次調査区東端に検出した土坑。他の土坑との切り合い関係はない。一辺80cmの隅丸方形プラン。深さ30cm。

1点の出土がある。外面に格子目文のタタキがあり、その上に灰釉をかける。内面は横ナデ調整。軟質。SK－105の壺形品と同一個体の可能性が強い。

(46) SK－105と出土陶器 (Fig.27－294～298、Fig.28)

第5次調査区北半部中央に検出した土坑。土坑は小型で、東西径1.1m、南北径1.5m以上の長方形プラン、深さ約30cm。断面は逆台形をなす。土坑の中央底面には、ほぼ完形の青磁四耳壺が横たわっていた。

陶器は17点が出土している。294～305、308～310は同一個体とみられる。大型の壺形土器。294～297は頸部、他は胴部破片である。口縁部は欠失するが大きく外反するとみられる。頸部内外面は丁寧な横ナデ調整。頸部には櫛描き波状文がめぐる。胴部外面は小さな格子目文のタ

タキで、一部は上からの横ナデで消される。胴中央部には断面カマボコ形の突線一条がめぐらされる。外面全面に灰釉が施される。内面は一部受け具痕がみえるが、丁寧な横ナデによって消される。胎土は精良、軟質である。306は内外面横ナデ調整。外面に沈線一条がめぐる。307は二重口縁、内外面は横ナデ調整、306、307は硬質。

(47)　SK－147と出土陶器（Fig.29－311～313）

第4次調査区内、SB－31の基壇に掘り込まれた土坑。展示館内の追加調査で発掘。SK－48を切る。SB－31より新しい。東西径1.5m、南北径1.4mのほぼ同形のプランで深さ40cm。多量の瓦、青磁器、白磁器が共伴する。

3点の陶器が出土している。311は口縁部、312、313は肩部の破片。311は口縁両端部が上下に引きのばされ、三本の浅い条線をめぐらす。内外面は横ナデ、内側に自然釉がかかる。312、313は内外面共に横ナデ調整。312は浅い沈線3条がめぐり、内外面に黒色顔料を塗る。共に胎土はアズキ色をなす。

(48)　SK－148と出土陶器（Fig.29－314、315）

SK－147に隣接する。SK－147より古く、SB－31より新しい。東西径2.7m、南北径2.7mの隅丸方形、深さ40cm前後で、断面形は逆台形をなすと考えられる。瓦類、青磁器、白磁器、土師器が共伴する。展示館内の展示のため完掘していない。

2点の陶器が出土している。314、315共に肩部破片。内外面共に横ナデ調整。314は内底に自然釉が付着する。

(49)　SD－150と出土陶器（Fig.29－316）

SD－150はⅠ期布掘り柵列であるが、第5次調査区から第6次調査区では、SB－50の北側雨落ち溝（排水溝）と完全に重複する。本資料はSB－50の雨落ち溝に伴うものであろう。

樽形の胴部破片1点がある。外面は横ナデ調整。二本単位の沈線が2ケ所にめぐる。内面は丁寧な横ナデであるが、一部ははカキ目状になる。胎土にはわずかに砂粒を含む。

(50)　SK－151と出土陶器（Fig.29－317～323）

第6次調査区西側で検出した土坑である。SB－150、SB－50を切ってつくられる。東西径1.3＋αm、南北径1.8mの浅い楕円形プン。多量の瓦に混じって青磁器、白磁器が出土している。

7点の陶器が出土している。323が底部、他は胴部の小破片である。いずれも内外面横ナデ調整、319を除いた他は黒色顔料が塗られている。

(51)　SK－152と出土陶器（Fig.29－324～326）

SK－151の西側にある土坑。東西径2.6m、南北径2.8mの不整楕円形で浅い。

出土陶器は3点ある。324は胴部、他は底部破片、内外面共横ナデ調整、外面と内面の一部に黒色顔料が塗られる。広口壺か。

(52)　SK－160と出土陶器（Fig.29－327～330）

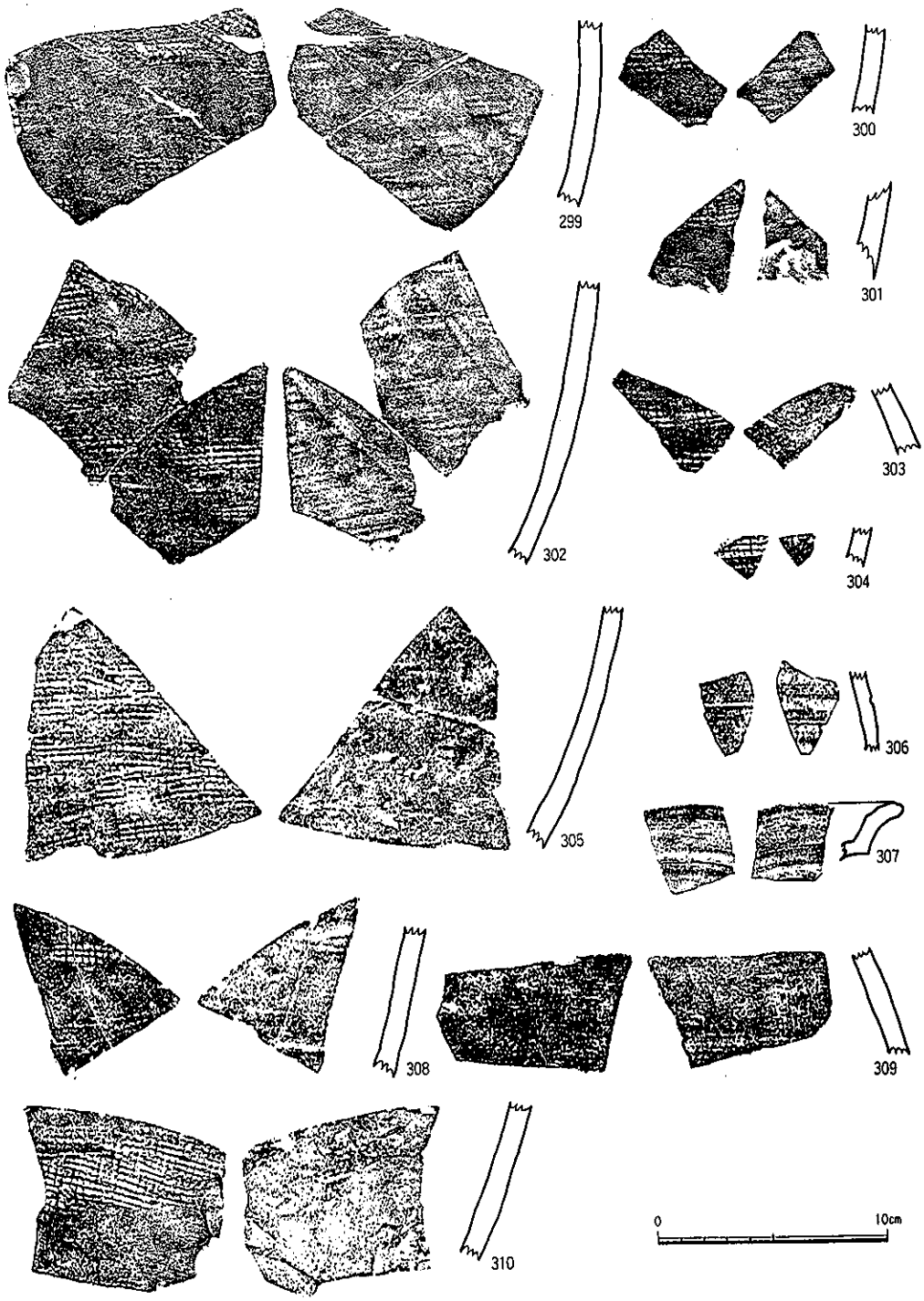


Fig.28　SK—105出土新羅・高麗陶器実測図

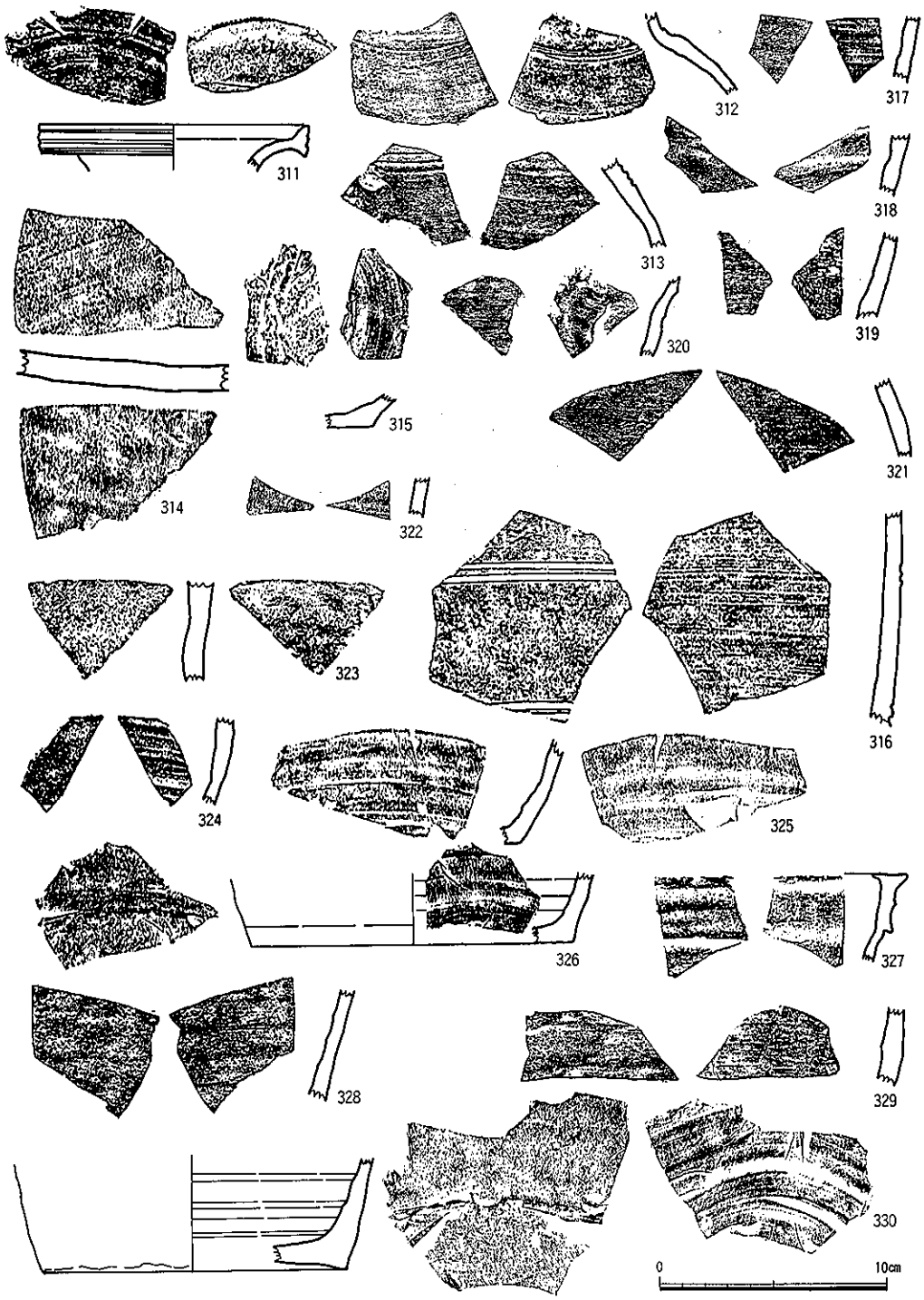


Fig.29　SK—147、148、150、151、152、160出土新羅・高麗陶器実測図

第６次調査区西南端に検出した大型土坑である。大部分は調査区外のにびるため規模不明。青磁器、白磁器、イスラム陶器、土師器、瓦類が共伴して出土している。

４点の出土がある。327は口縁部、328、329は胴部で外面は黒色顔料を塗る。330は平底の底部、内外面共に横ナデ調整。いずれも胎土はアズキ色をしている。

(53) SK－208と出土陶器 (Fig.30、31、32－357～363、365、366)

第６次、第７次調査区わたって検出した土坑、東西径4.6ｍ、南北径3.6ｍの長方形プラン、深さ0.8ｍで断面は逆台形状をなす。瓦類の他、青磁器、白磁器、土師器、ガラスなどが出土している。

35点の陶器が出土している。232は口縁、331、333は頸部、355、357、361は底部、他は胴部破片。332は短い頸部から口縁は屈曲して外反する。口縁内側に段を形成。331は頸部と肩部の境に断面カマボコ形の突線一条をめぐらし、外面には自然釉がつく。333、335、337、340、347、360、362は同一個体と考えられる大型壺あるいは甕である。外面には細い格子目文タタキがあり、上から横ナデでタタキ目を消すが下半部がより顕著である。頸部と肩部の境に断面長方形の突線一条の貼り付け、また、肩部にも突線一条をめぐらす。上半部には自然釉がみられる。内面には弧線の受け具痕が凹みで残り、荒い削り状のナデで調整する。軟質。336、339、345、355、356、359、361、365は広口壺の破片、外面および内面の一部に黒色顔料が塗られる。胎土・色調の違いから三個体がありそうである。硬質。336には横耳がつく。341～344、348、349、366は同一個体で大甕の胴部破片。338、346は同一個体でやはり大甕の胴部破片。両者は外面に細い格子目文のタタキで上から横ナデで加え、内面は丸太の木口を受け具としている。軟質。両者と同一個体と考えられるものにSK－01の同種甕がある。334は外面に平行タタキ、内面には弧線の受け具が残る。軟質。351は内外面とも平行タタキ。352、353は外面が平行タタキ、内面が格子目タタキで上に横ナデが加えられている。共に軟質、354は内外面共横ナデ調整。357は外底が格子目文タタキの上に横ナデ調整。内面ナデ調整。358は外面が格子目文タタキの上からナデ、内面は平行タタキの上にナデ調整を加えている。軟質、363は内外面共横ナデ調整である。

(54) SK－212・213と出土陶器 (Fig.32－367、364)

SK－212は第６次調査区西側で検出した瓦溜めの土坑。2.4ｍ×1.4ｍの楕円形プランで深さ約20cm。SK－213は東端で確認した攪乱土坑である。

それぞれ１点の陶器が出土している。367は外面が格子目文タタキ、内面が平行線の受け具痕で、共に上より横ナデが加えられている。364は内外共に横ナデ調整。一条の沈線をめぐらす。

(55) SK－220・221と出土陶器 (Fig.33－368～370)

SK－220は第６次調査区西側にある攪乱土坑、SK－221とその西側にある江戸時代の土坑で、陶器は周辺部から流れ込んだものであろう。

陶器はSK－220から２点、SK－221から１点出土している。368、369は広口壺で同一個体か。

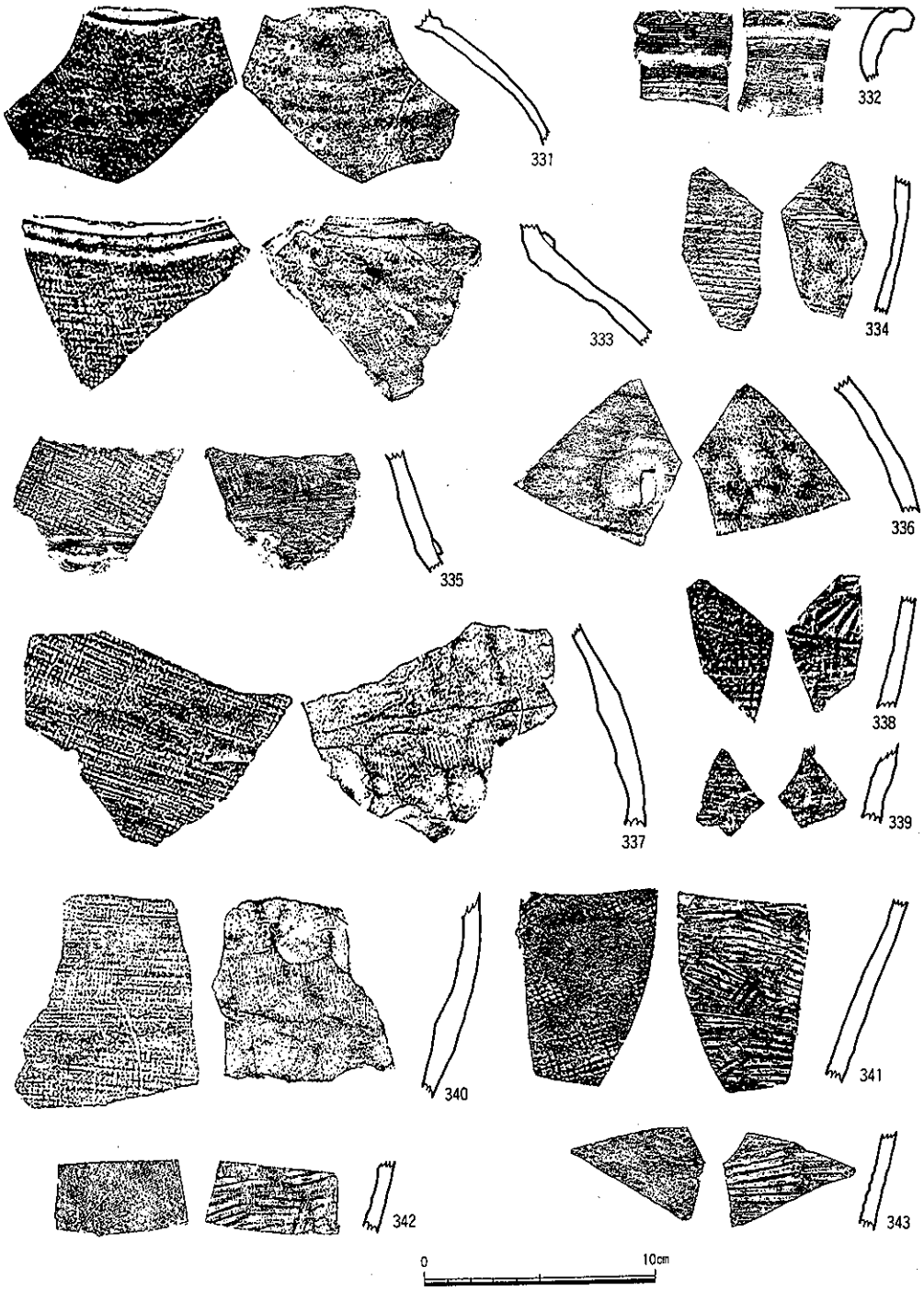


Fig.30　SK—208出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ

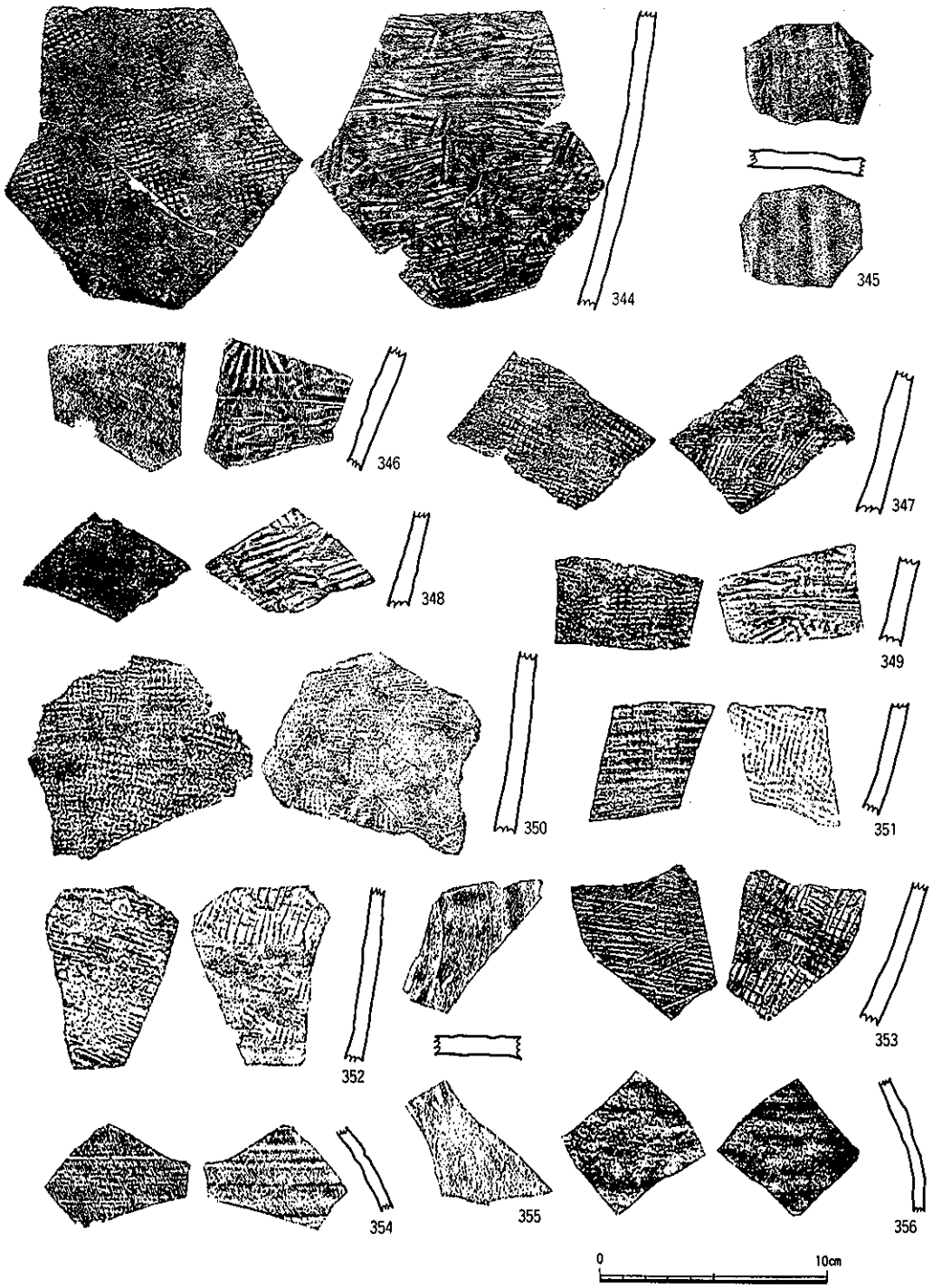


Fig.31　SK—208出土新羅・高麗陶器実測図II

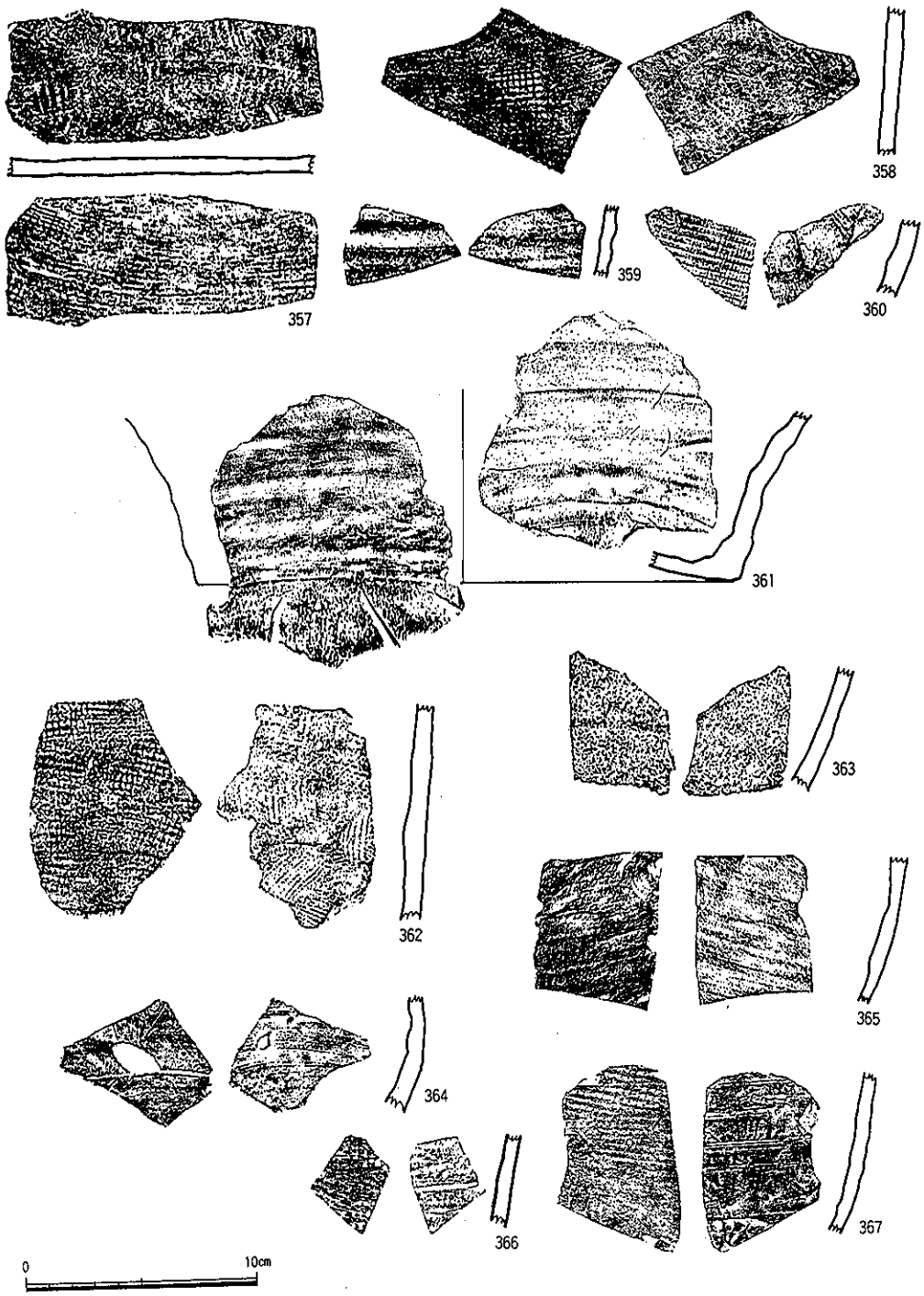


Fig.32　SK—208、212、213出土新羅・高麗陶器実測図

口頸部は短く外反する。口径13cm。肩部に4条の凹線、胴中央に一条の沈線をめぐらす。横耳がつく。内外面は横ナデ調整。外面と内面の一部に黒色顔料を塗る。369には指の跡が残る。370は外面が平行タタキ、内面はナデ調整である。

(56) SK－224と出土陶器 (Fig.33－374)

第6次調査区南西端に検出した小土坑。東西径1.3m、南北径1.2mの円形プランで深さ10cm前後、蛇ノ目高台のみからなる青磁器、白磁器、石硯が共伴する。

1点の出土がある。内外共横ナデ調整、2条の沈線がめぐる。胎土に多量の砂粒を混入。

(57) SK－225と出土陶器 (Fig.33－373)

第6次調査区西南端近くで検出した江戸時代の土坑。陶器は周囲から混入したものであろう。

小破片1点がある。内外面共横ナデ調整。内外面に黒色顔料を塗る。胎土はアズキ色。

(58) SK－243と出土陶器 (Fig.33－372)

第7次調査区の西側で確認した土坑。東西径1.96m、南北径1.3mの長方形プラン、深さ0.5m、断面は逆台形状をなす。整然とした土坑である。瓦類、青磁器、白磁器が共伴する。

1点が存在する。平底の底部で内面は丁寧なナデ調整。

(59) SD－248と出土陶器 (Fig.33－371)

第7次調査区東側で検出した石組み排水溝。江戸時代の瓦、陶磁器類を主体に出土する。

混入と思われる1点がある。内外面とも横ナデ調整。底部破片で須恵器の可能性もある。

(60) SK－255と出土陶器 (Fig.33－375～381、Fig.34－382～385)

第7次調査区の北端中央部に検出した土坑である。SB－321と重複関係にあり、SB－321の柱穴を切っている。東西径2.4～3.7m、南北は両端が道路と江戸時代の溝に切られているが3.5mを測る不整楕円形プラン、深さ2.6m。多量の瓦、青磁器、白磁器、須恵器、土師器を共伴している。

11点の陶器が出土している。376は頸部～肩部、385が底部、他は胴部破片である。376は外面が丁寧な横ナデ調整、頸部に二条、頸部と肩部の境に一条の沈線をめぐらす。内面は格子目タタキの上に丁寧な横ナデ調整を加える。375は379と同一個体で二条の沈線がめぐる。377、379、381は軟質。いずれも外面に格子目文タタキを施し、内面は横ナデによって受け具痕が消される。380、385は外面と内面の一部に黒色顔料を塗る。380は4条の沈線がある。382は外面は格子目文タタキの上に横ナデ、内面は受け具痕の上に同様に横ナデ調整を加える。受け具痕には年輪が観察できる。383は外面平行タタキ、内側は横ナデ、383は須恵器の可能性が強い。

(61) SK－256と出土陶器 (Fig.34－386)

第7次調査区、SK－255のすぐ西に掘り込まれた土坑で、SB－321の柱穴の真上にあたる。径1.5mの隅丸方形プラン。少量の遺物が出土している。

1点の出土があり、内外面共に横ナデ調整、胎土は精選され良質。アズキ色をなす。

(62)　SK－257と出土陶器（Fig.34－387）

SK－256の西側に掘り込まれた土坑。SB－321を切ってつくられる。近世溝に切られプランは不明。浅く遺物量は多くない。小破片１点がある。内外共横ナデ調整。胎土はアズキ色。

(63)　SK－258と出土陶器（Fig.34－389、391）

第７次調査に検出した土坑、SB－321を切り、江戸時代の排水溝SD－244に大部分を切られ一部のみが残存している。元来は楕円形の土坑とみられる。

２点の出土がある。589は二重口縁で口縁部は大きく外反する。内外面共に横ナデ調整。391は外面に黒色顔料を塗る。内面はタタキ後横ナデ調整。

(64)　SK－261と出土陶器（Fig.34－390）

第７次調査区北端中央部、SK－255と西、SK－256の北側に掘り込まれた土坑。一辺１ｍの方形プラン。深さ20cm。

１点が出土している。頸部から肩部にかけての破片。頸部からと肩部の境に沈線一条をめぐらす。内外面共に丁寧な横ナデ調整。

(65)　SK－262と出土陶器（Fig.34－388）

第７次調査区の東端部、Ｉ期東門（SB－310）と重複し、SB－310を切っている。北側はSD－244に切られる。東西径2.2ｍ、南北径0.9ｍ以上の楕円形プランの土坑である。瓦溜めで若干の青磁器が伴う。

１点の陶器が出土している。胴部破片で外面には細い格子目のタタキ後横ナデが加えられ、全面に灰釉をかける。内面は格子目文タタキ後、横ナデを加えている。

(66)　南門トレンチ出土の陶器（Fig.34－392～399、Fig.35－400）

第５次調査で設定した南門部分と考えられるトレンチでは、古代の表土が良好な状態で遺存し、多量の遺物が出土している。９点の陶器が出土している。393、395、397～400は広口壺の破片とみられる。内外面共に横ナデ調整、外面と内面の一部に黒色顔料を塗る。398はカキ目状の調整がさらに加えられ、400は底部である。392、394は内外面横ナデ調整。392は外面に灰釉がかれられ、394は沈線一条がめぐる。396は外面が平行タタキ、内面は横ナデ調整。

(67)　整地層出土の陶器（Fig.35－401～416、Fig.36～43）

鴻臚館は長期間にわたるため整地層が多くみられ、また、西側では包含層も若干遺存していて、その中からも多量の陶器類が、青磁器、白磁器、須恵器、土師器と共に出土している。しかしながら、これらの遺物は正確な時期決定が困難である。

陶器は多量で、143点を図示した。代表的な陶器について概略を説明しておこう。416～418は内面に印花文がある。胎土には砂粒を多く含む。419は軟質、外面は格子目文タタキ、内面は横ナデ調整。425はほぼ全形がわかる資料。頸部は短くたちあがり、口縁は外反するとみられる。胴部は肩が張り長胴化するもので、胴部最大径は上位にある。頸部に２条、体部には等間隔に、

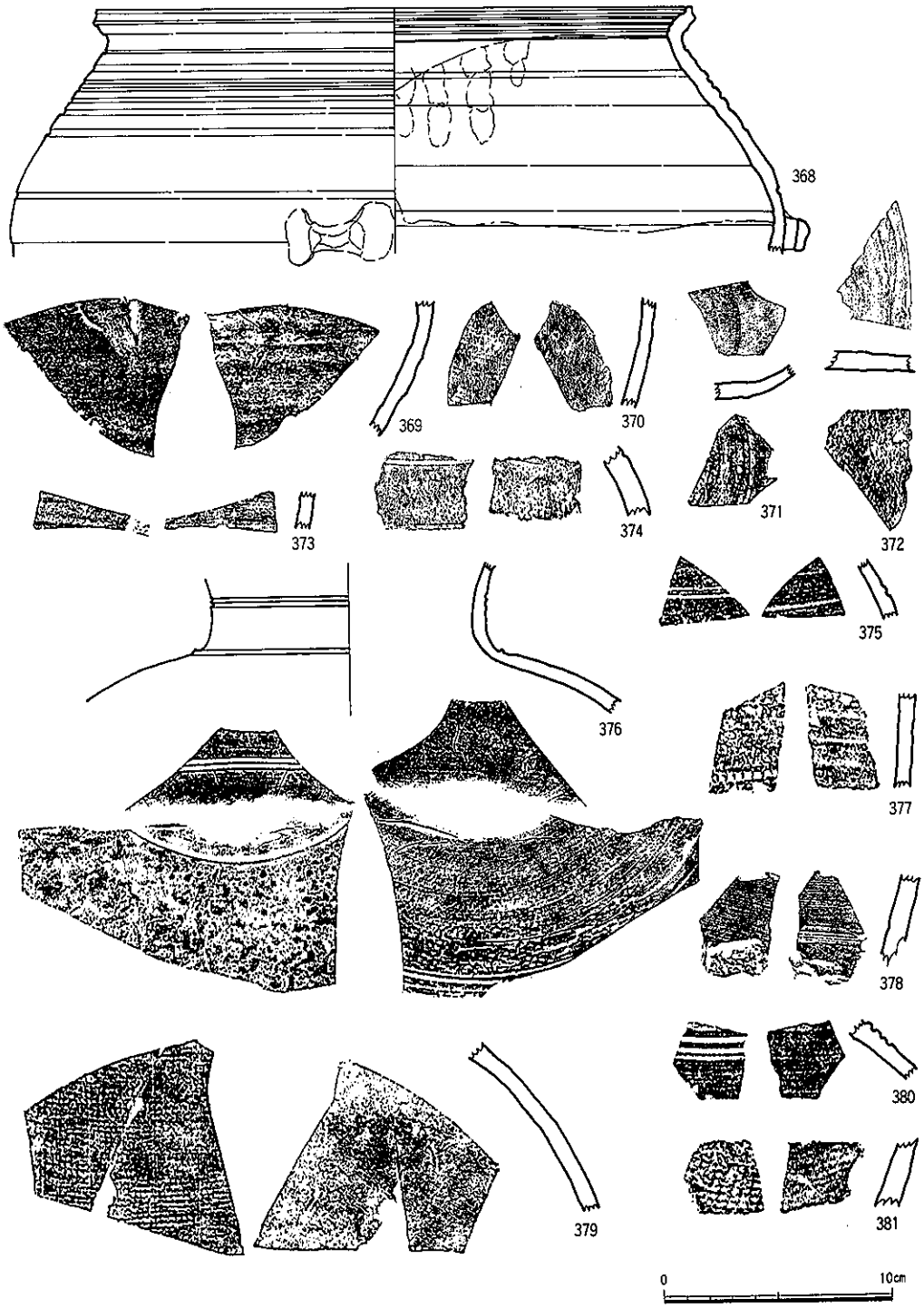


Fig.33　SK—220、221、224、225、243、255、SD—248出土新羅・高麗陶器実測図

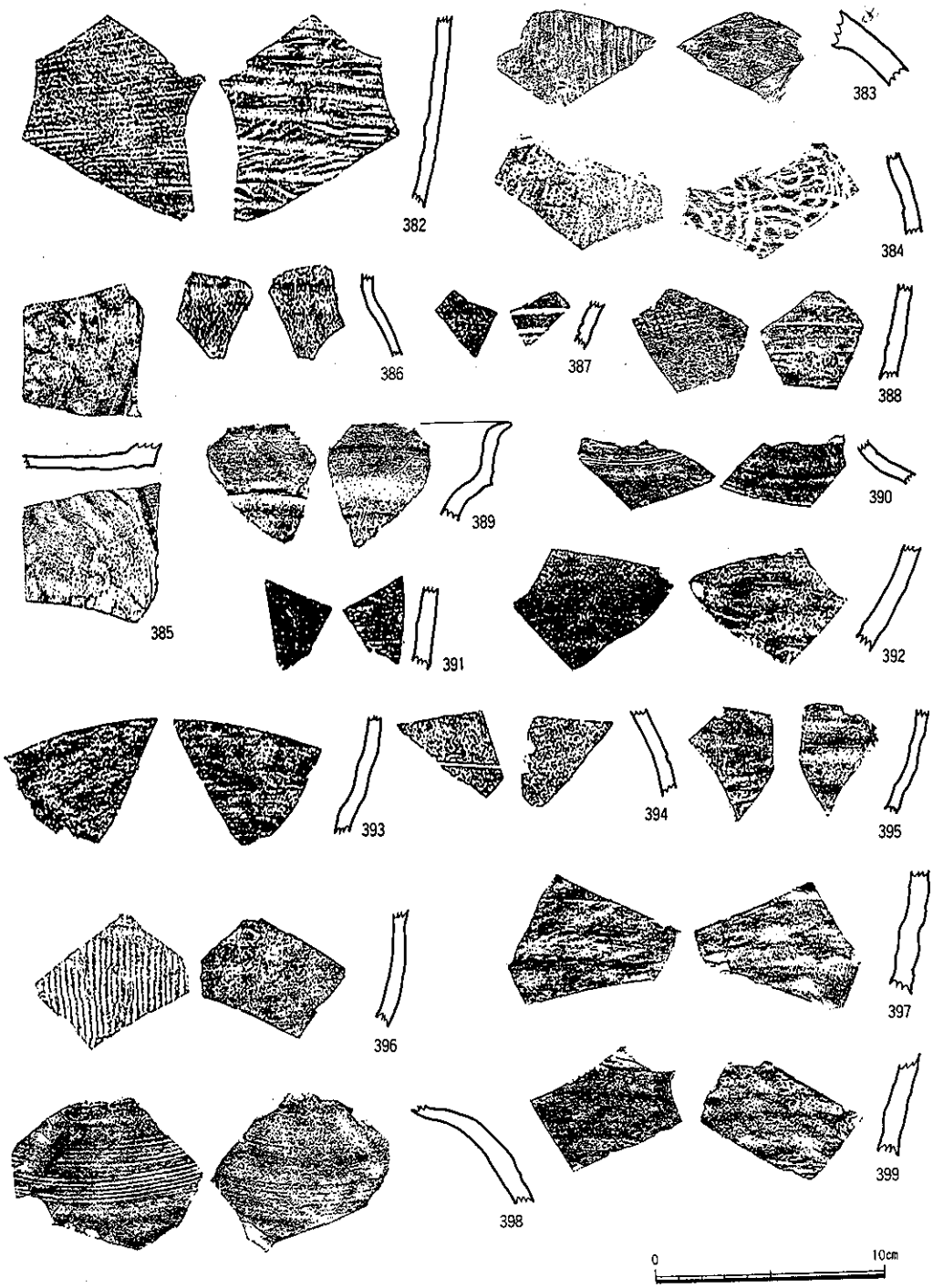


Fig.34　SK—255～258、261、262、南門トレンチ出土新羅・高麗陶器実測図

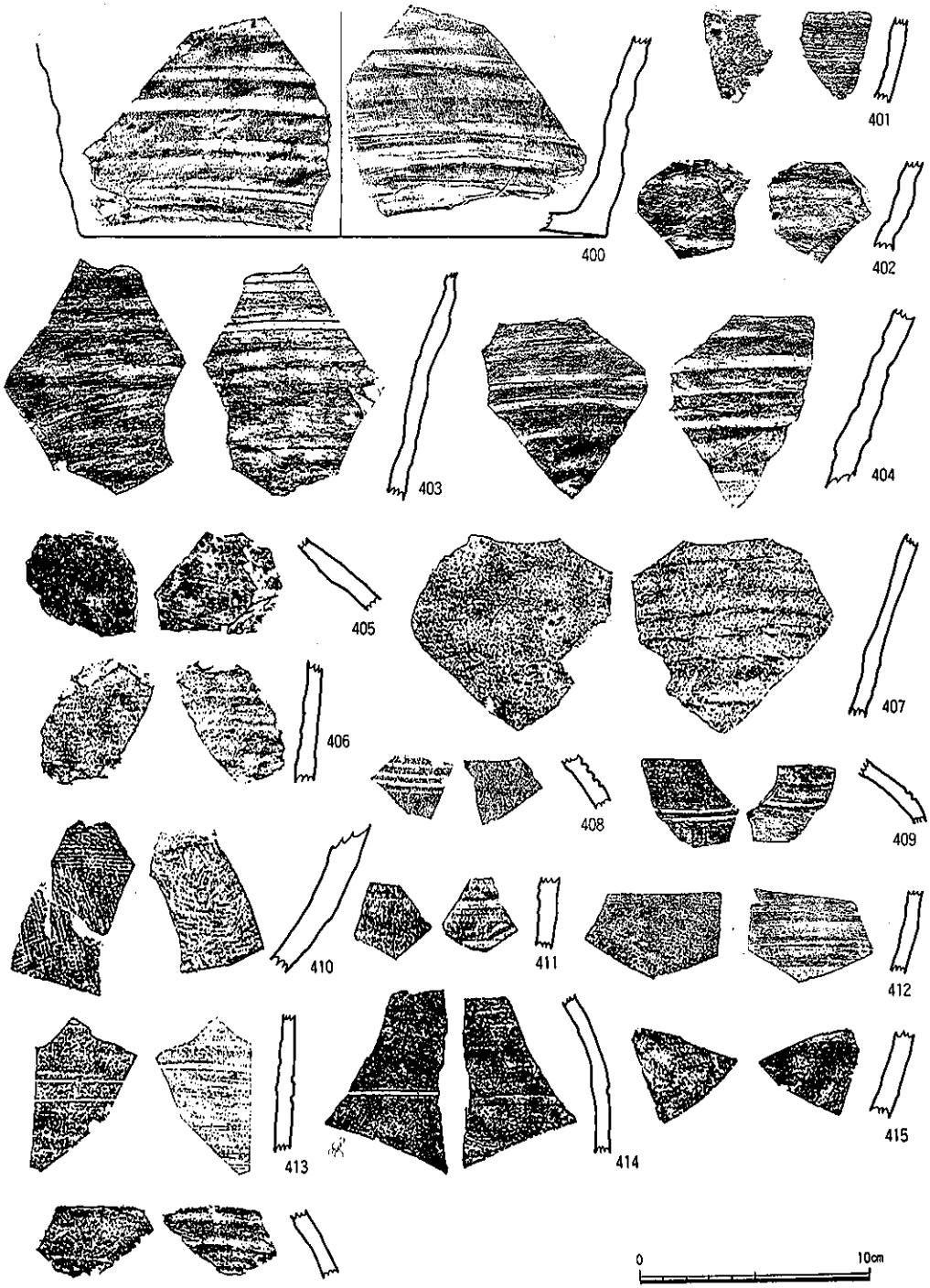


Fig.35　南門トレンチ・整地層出土新羅・高麗陶器実測図

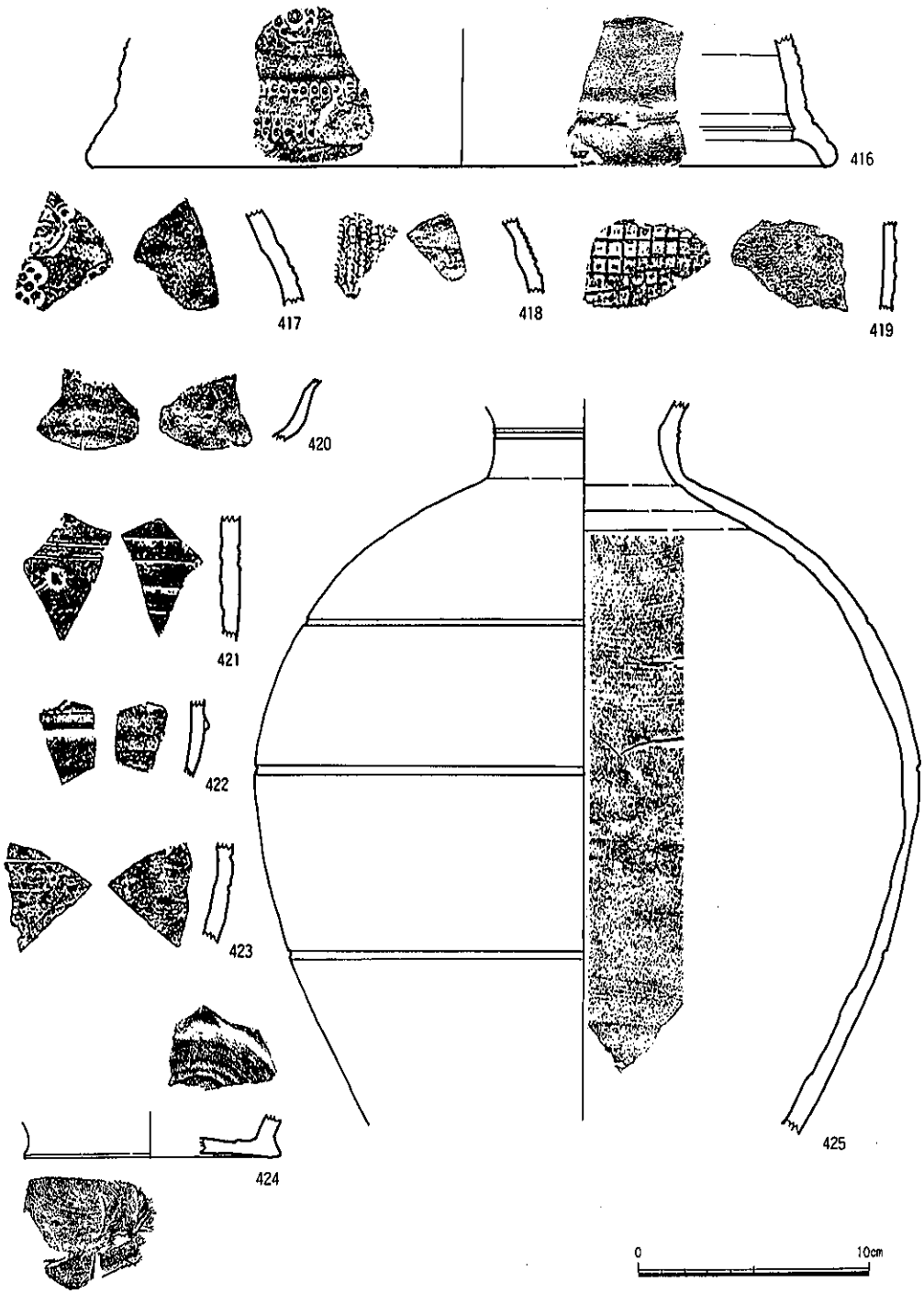


Fig.36　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅰ

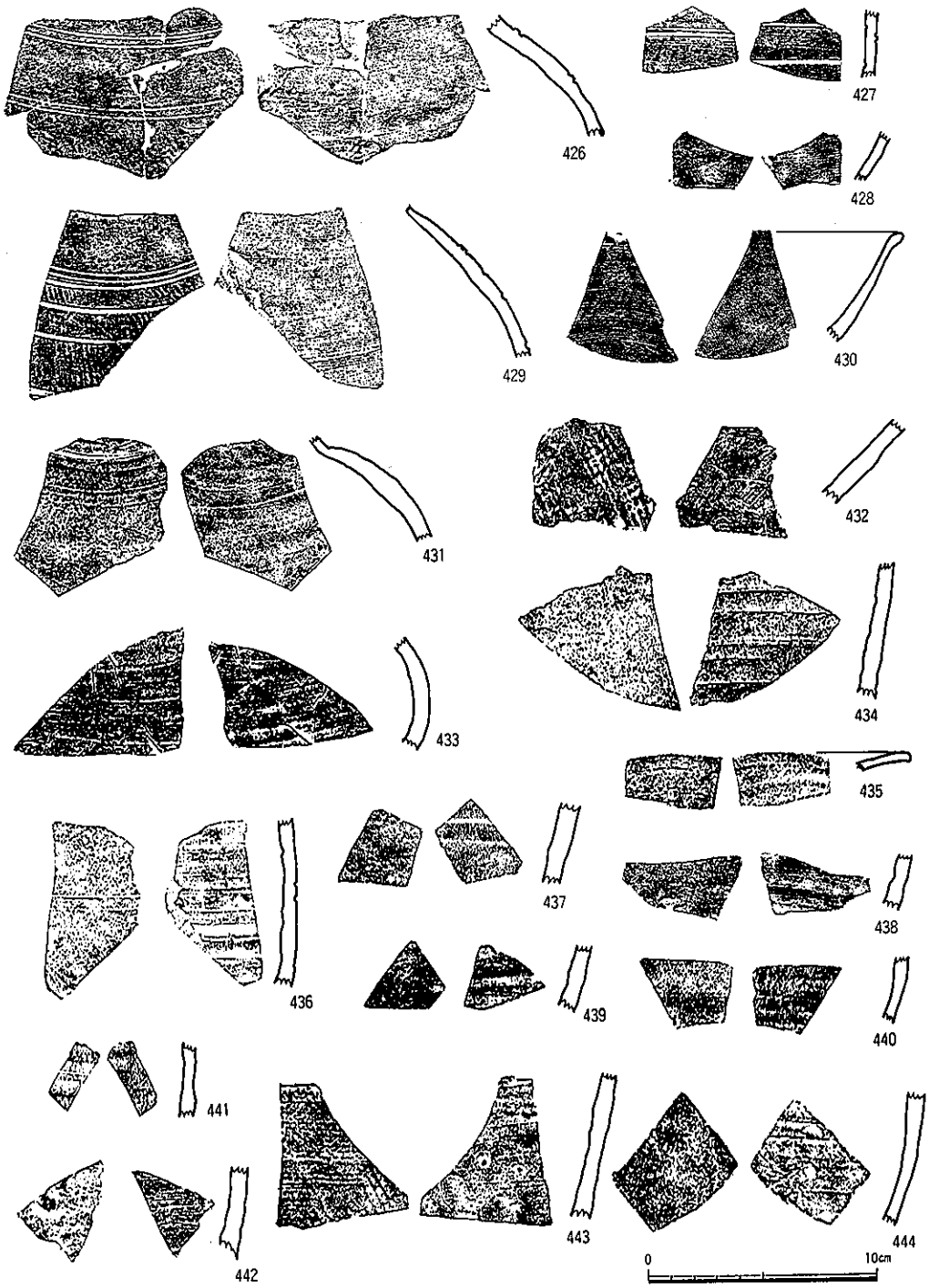


Fig.37　整地層出土新羅・高麗陶器実測図II

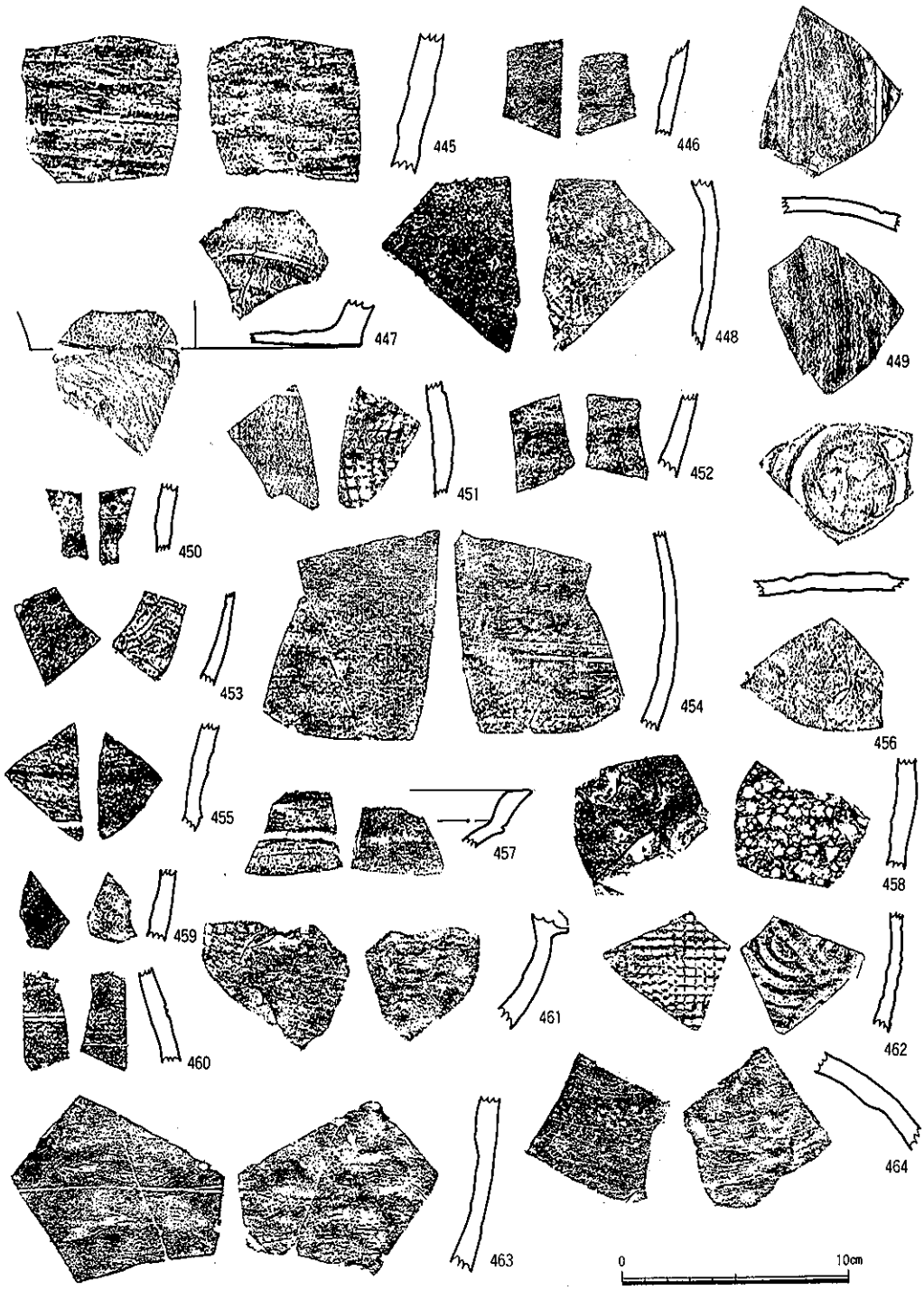


Fig.38　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅲ

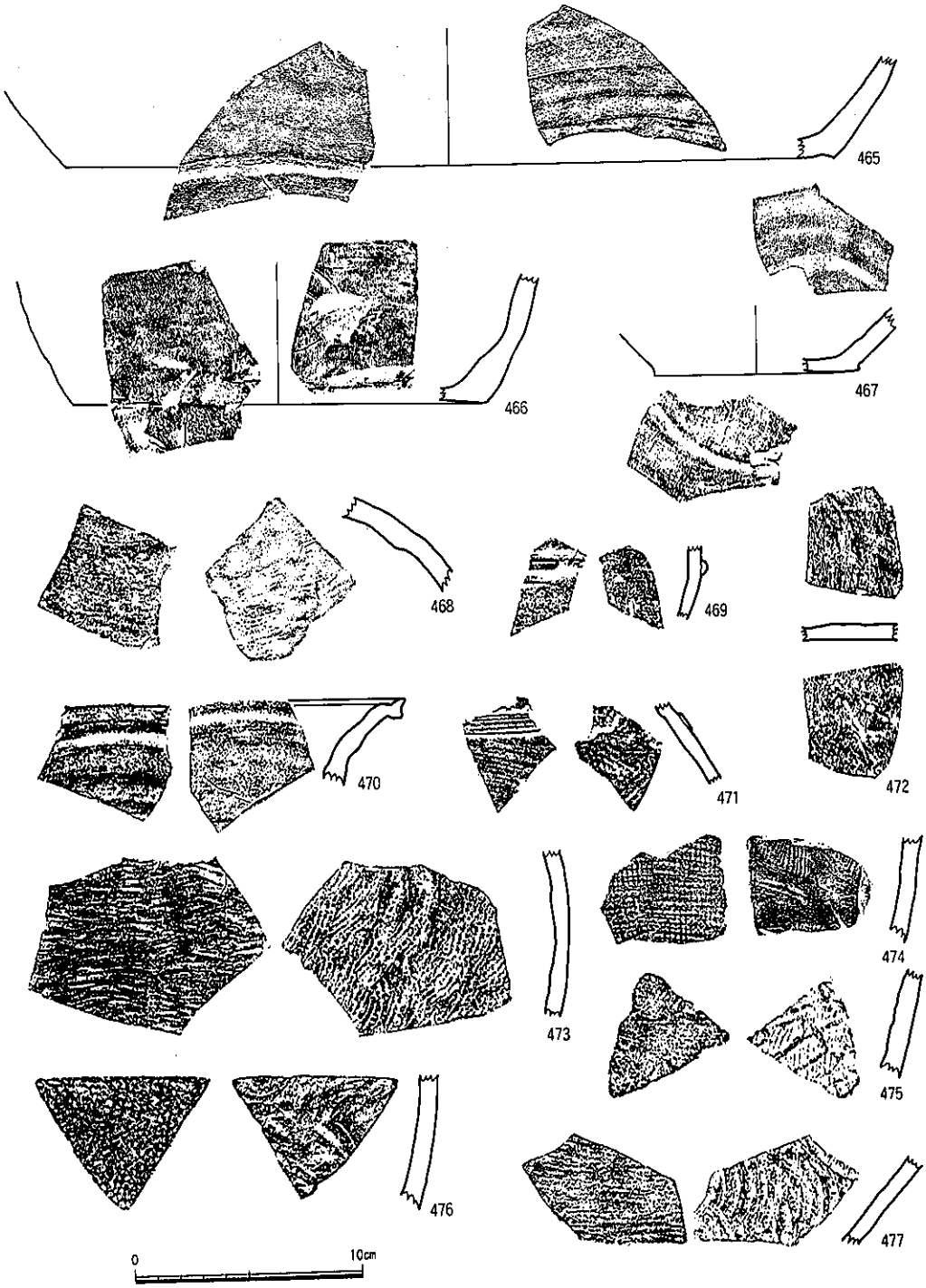


Fig.39　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅳ

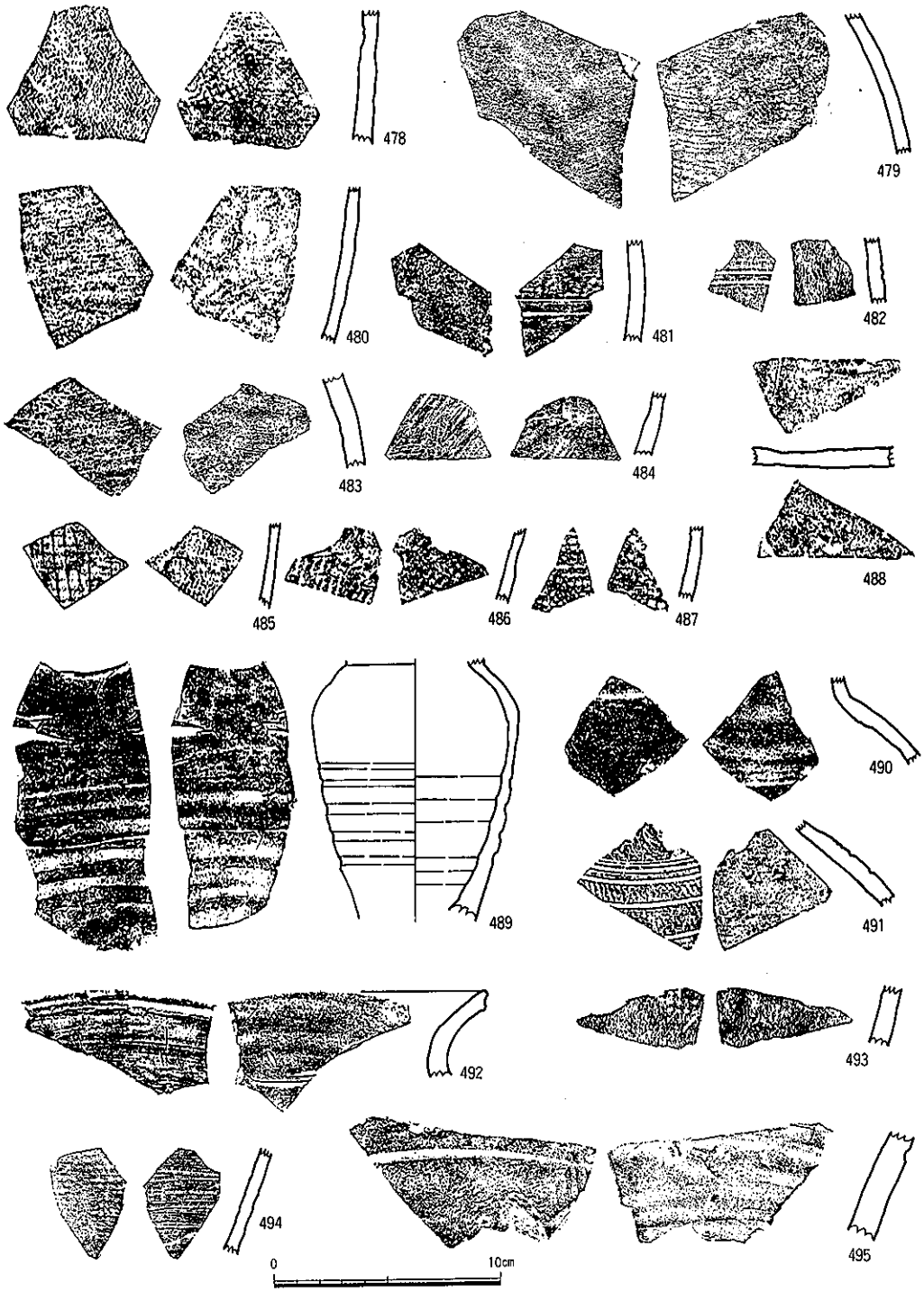


Fig.40　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅴ

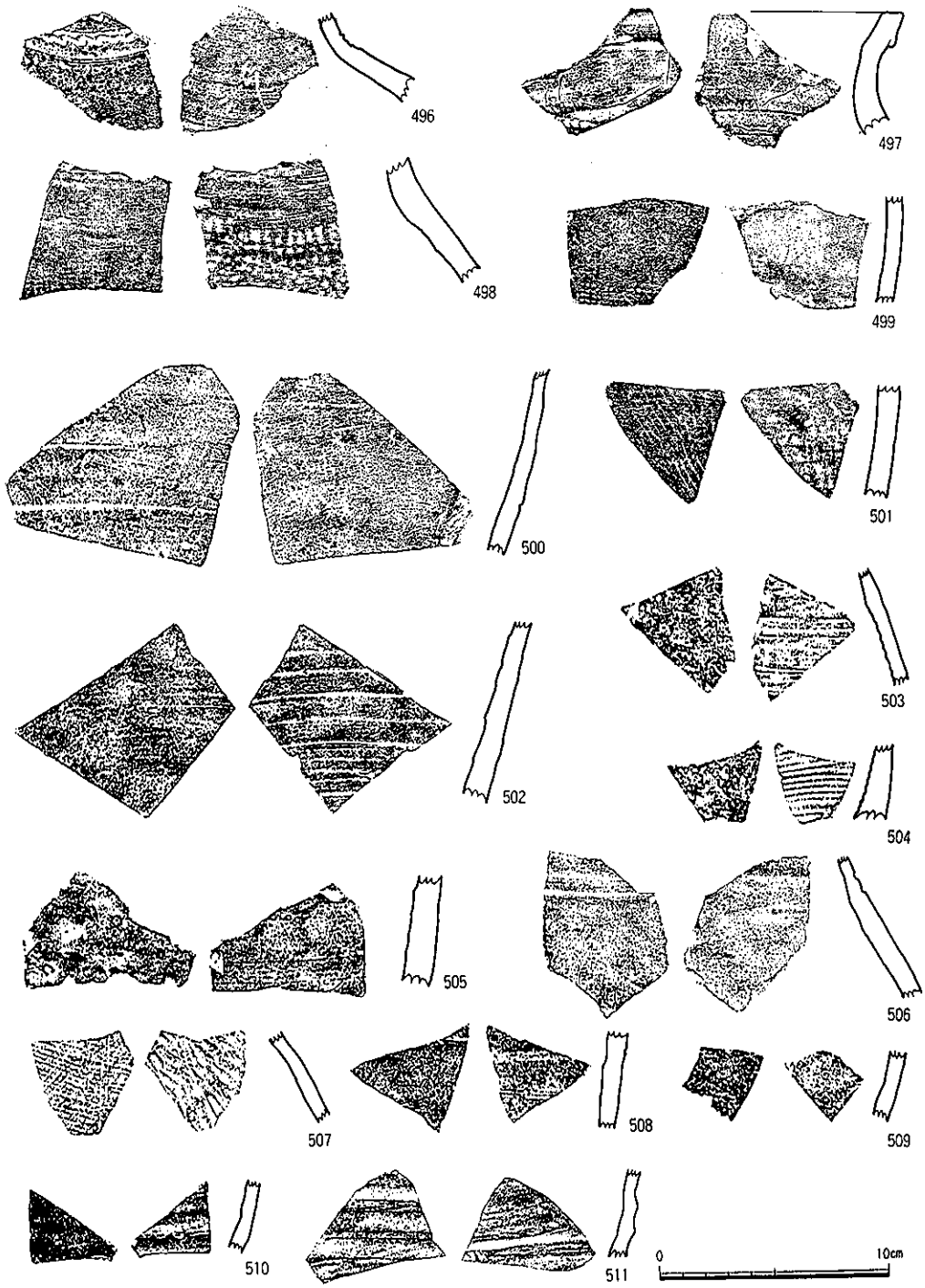


Fig.41　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅵ

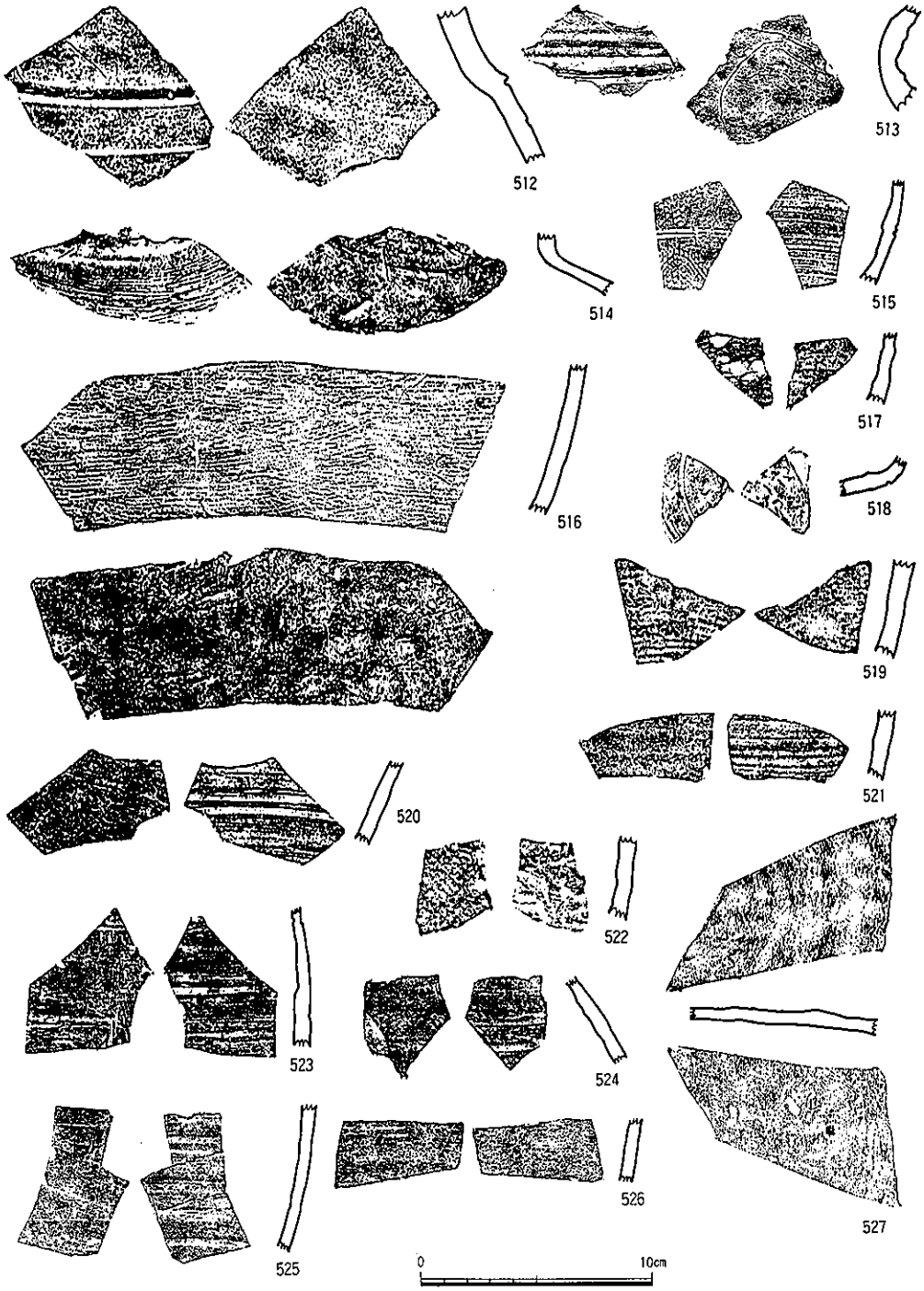


Fig.42　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅶ

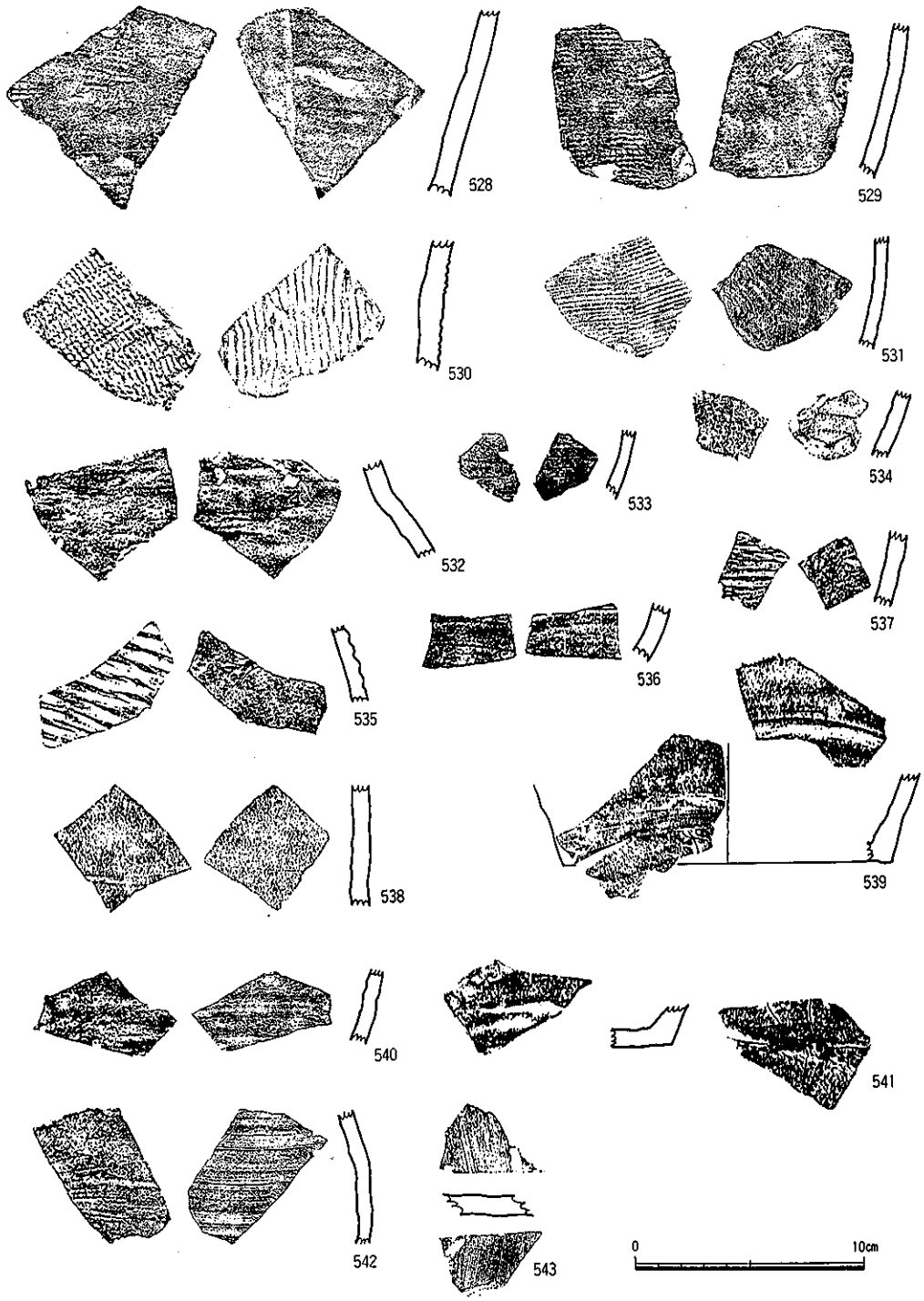


Fig.43　整地層出土新羅・高麗陶器実測図Ⅷ

3本の沈線がめぐる。上半部に自然釉が付着する。内面は横ナデ調整で上半部はカキ目状の調整。胎土には白色砂粒を多量に混入、アズキ色をなす。426、429は軟質、外面はタタキを加えた後、丁寧な横ナデ調整を加える。426は2本単位の沈線を肩部に上下二段にめぐらす。429は上位に3本単位、その下に一定の間隔をもって3本の沈線をめぐらす。内面は横ナデ調整。431は頸部から肩部の破片で、段をもって移行する。内外面共に横ナデ調整。外面には灰釉を施す。461は壺胴部、外面は格子目文タタキの上に横ナデ調整、内面横ナデ調整。外面に角状の把手がつく。軟質、470は口縁部、大きく外反し、口縁端部が上方に引きのばされ、口縁内部に段ができる。内外面共横ナデ調整で、外面と内面の一部に黒色顔料が塗られる。475は胴部破片、外面は格子目文タタキ後、横ナデ調整、内面には粗い格子目タタキで木目の跡が明瞭に残る。軟質。491は軟質、429と同一固体か。515は小型壺の胴部破片とみられる。内外面共横ナデ調整、中央に細い沈線2条をめぐらし、その上下に櫛歯状の工具を刺突し波状の文様を描く。胎土は精良で、焼成堅緻、青灰色をなす。519、522、528、529、541はいずれも軟質の陶器、外面は格子目タタキの上に横ナデ調整を加え、内面は横ナデ調整でタタキ痕を消している。541は平底の底部。破片中で量が最も多いのは広口壺の個体かと思われるもので、いずれも内外面は横ナデ調整。外面と内面の一部には黒色顔料が塗られている。器壁は成形時の凹凸が著しい。底部はいずれもあげ底状の平底である。

3．鴻臚館出土の新羅・高麗陶器の編年的予察

前章で鴻臚館出土の新羅・高麗陶器出土の遺構と出土陶器について概略を紹介してきたが、ここでは、それらの陶器の編年を予測的に検討することにする。本来は出土陶器の分類、出土遺構における共伴資料の検討、韓国出土の新羅・高麗陶器との比較検討などを行う予定であったが、頁数、時間の関係で果すことができなかった。また、鴻臚館の本格調査は丸5年を経過したとはいえ、その発掘面積はほんのわずかであり、出土遺物にも時期によって大きな隔差がある。特に9世紀以前の遺物は皆無といってよい程である。今後、資料の増加と検討を加えた後、改めて別稿を用意したいと考えている。

さて、鴻臚館出土の朝鮮産陶器は7世紀後半から11世紀の長期間のものが含まれ、それぞれの遺構の共伴陶器類（中国産陶磁器、国産の須恵器、土師器、黒色土器等）から大きくFig.44に示すような五区分ができそうである。

Ⅰ期　SD－08出土の蓋1点のみで資料は極めて少ない。SD－08では最下層出土で明らかに須恵器Ⅵ期の蓋・坏と共伴している。現在は発掘地点が異なるので、今後の資料の増加に期待される。なお、韓国との比較検討でそのセット関係を把握することができよう。

Ⅱ期　SK－57、69、70の便所遺構出土資料のみである。器形は樽形土器に限られているが、これは同器種の使用用途との関連で注目される。年代は共伴する木簡が里制と郷里制の両者で書

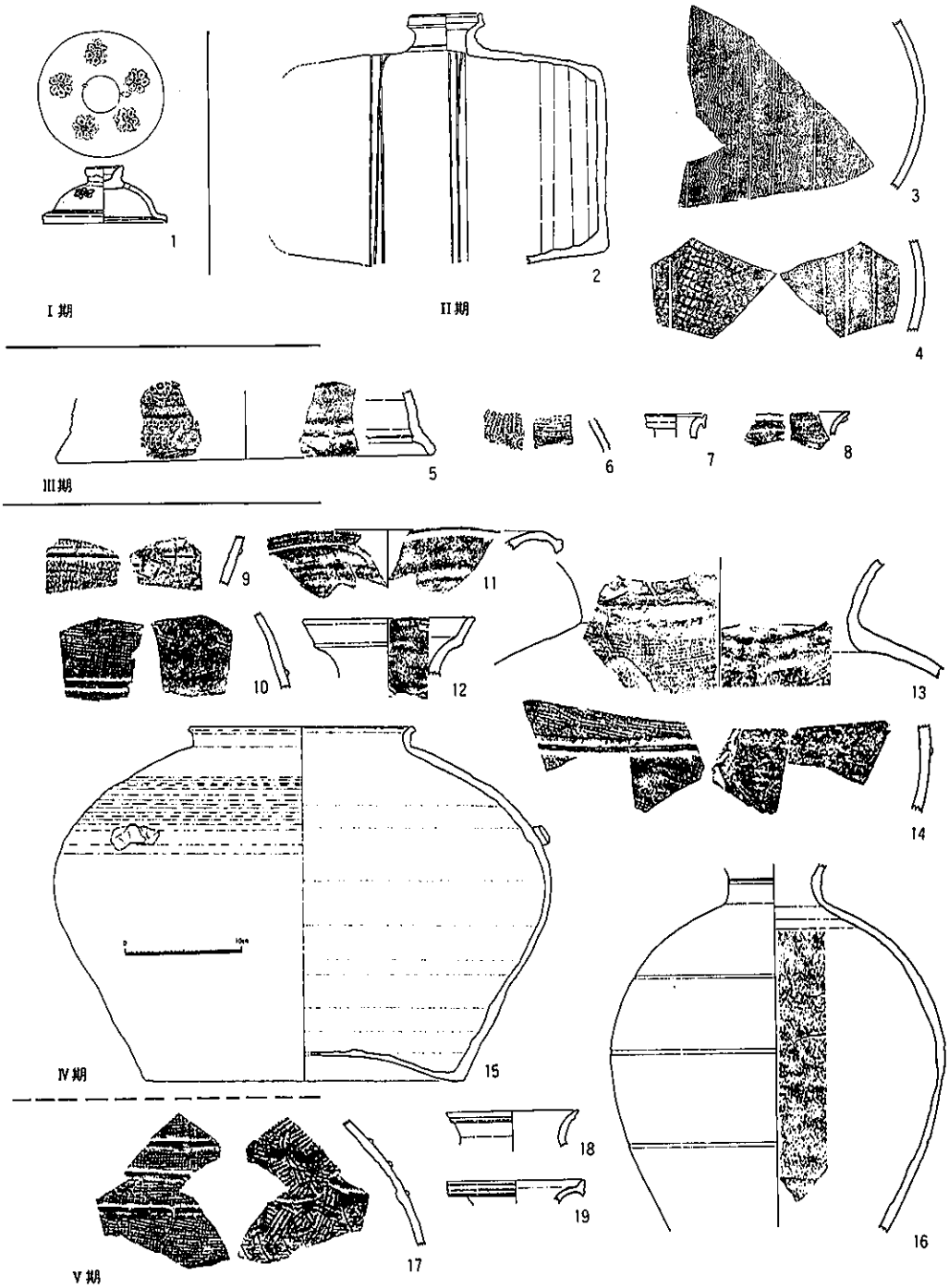


Fig.44　鴻臚館出土新羅・高麗陶器の諸段階

かれたものを含むことから、木簡の年代が715年を前後するものであることがわかる。また、共伴の須恵器、土師器はそれよりやや年代が下がる。木簡が再利用品であることを考慮すれば当然のことであるが、絶対年代がおさえられることは重要である。なお、出土陶器は硬質、軟質の両者を含む。

Ⅲ期　鴻臚館Ⅲ期の基壇をもつ礎石建物の段階とした。良好な資料を欠くがSB－31、32の雨落ち溝出土品があてられる。５、７は整地層や他遺構の混入品であるが、出土位置からみてこの時期にあてられる。印花文の陶器が目立つ。年代的にはⅡ期建物からⅢ期建物への移行時期は不明であるが、Ⅲ期建物は焼失した可能性が強く、その時期は雨落ち溝や排水溝の最も新しい瓦は９世紀中頃であり、この時期は９世紀前半代においてよいであろう。

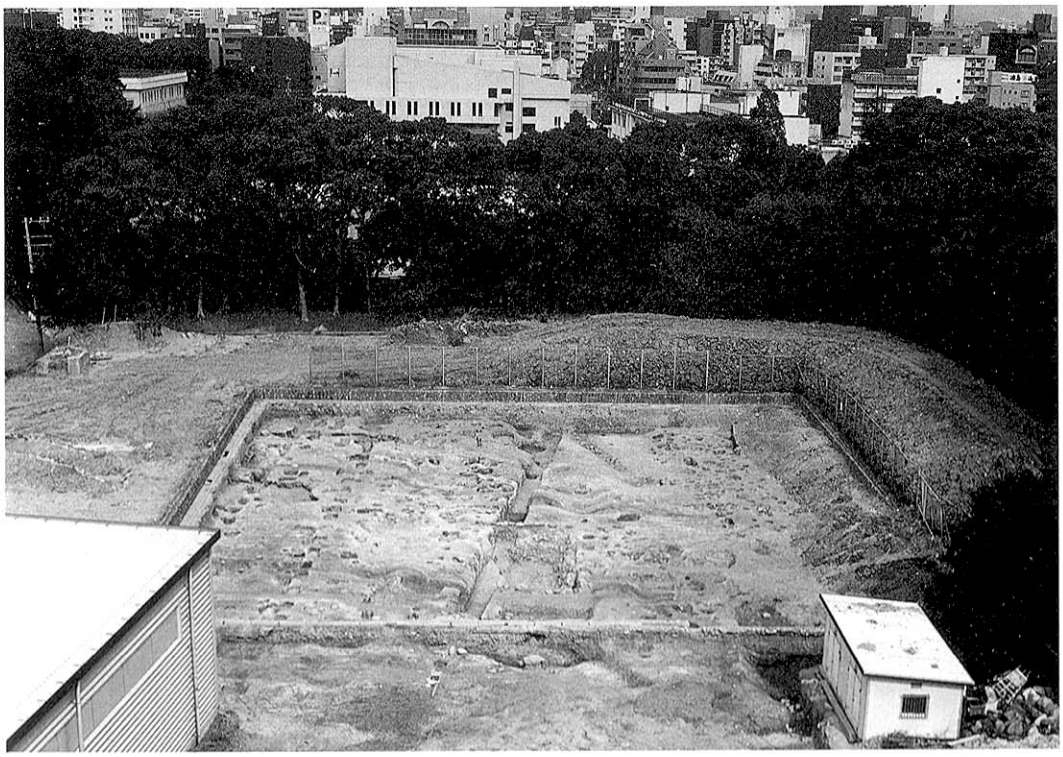
Ⅳ期　Ⅳ・Ⅴ期は調査地区に建物が再建されず、多数のゴミ捨ての土坑が掘られているために、良好な一括資料が残る。ただし、Ⅳ期とⅤ期では共伴する中国陶磁器に明瞭な差がある。朝鮮半島産陶器も小さくみれば若干の差が認められるようである。ヘラ描きの波状文はこの時期には明らかに存在するし、甕の突線は断面が方形ないしはそれに近く、条数も少ない。灰釉も出現している。なお、15の広口壺の中心はこの時期と考えてよいが、前後の段階にも若干存在する。共伴する中国陶磁器は越州窯系青磁器のⅡ類が圧倒的に多い。年代は９世紀後半から10世紀前半が考えられる。

Ⅴ期　SK－01、SK－208の一括資料がこの段階に比定できる。陶器類は前述したように、貼り付けの突線が断面三角形になるなど若干の差はあるが大きな違いはない。共伴の中国陶磁器は目跡が高台内側につく五代の時期のものや玉縁をもつ白磁器が目立つ。時期は国産の土師器や黒色土器からみて10世紀後半から11世紀頭に比定できよう。

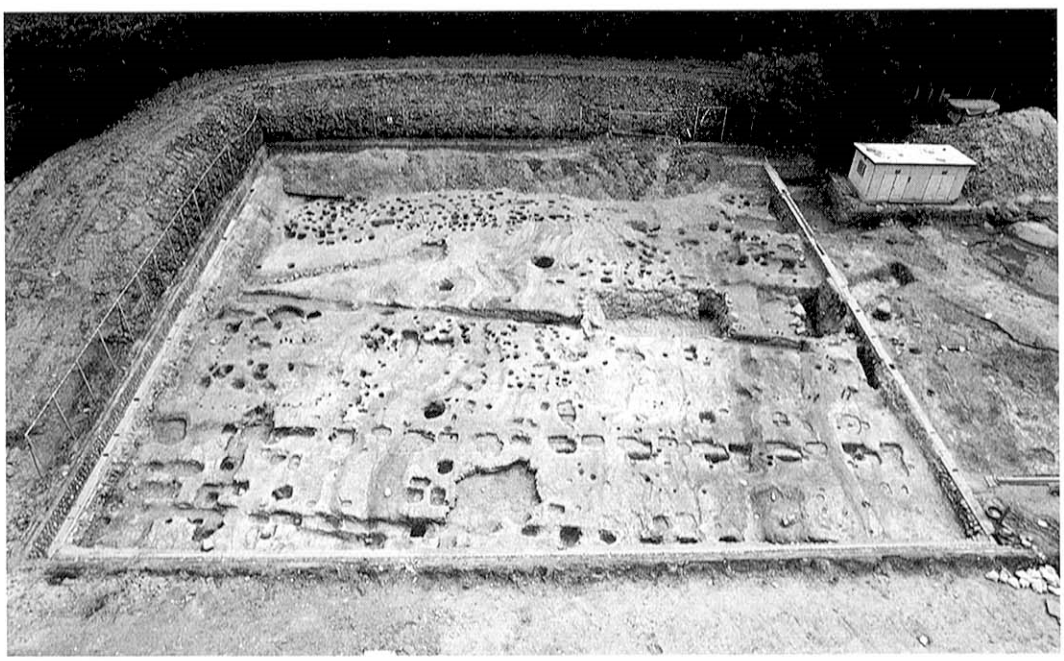
以上が、鴻臚館出土の新羅・高麗陶器の諸段階を共伴資料から整理したが、これはあくまで予報であり、今後は器種ごとの変化等検討することばかりであることを指摘しておわりとする。

図　版

PLATES

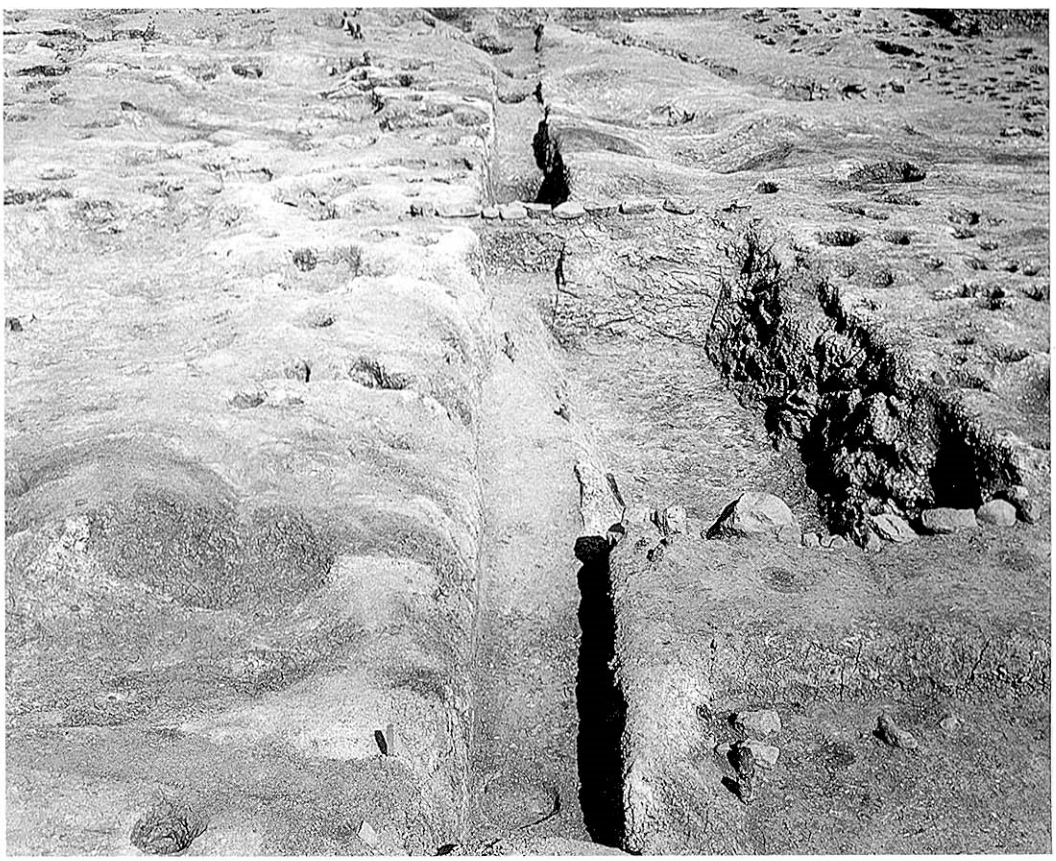


(1)　第６次調査区全景（西より）



(2)　第６次調査区全景（北より）

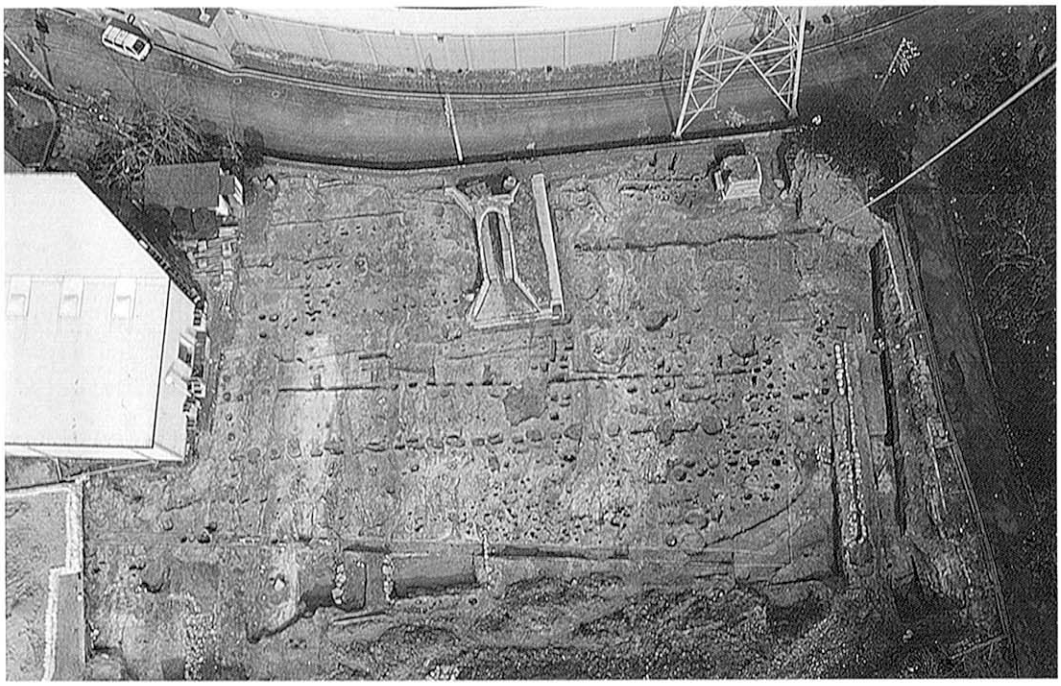
(1)　第 6 次調査区布掘り柵列（東より）



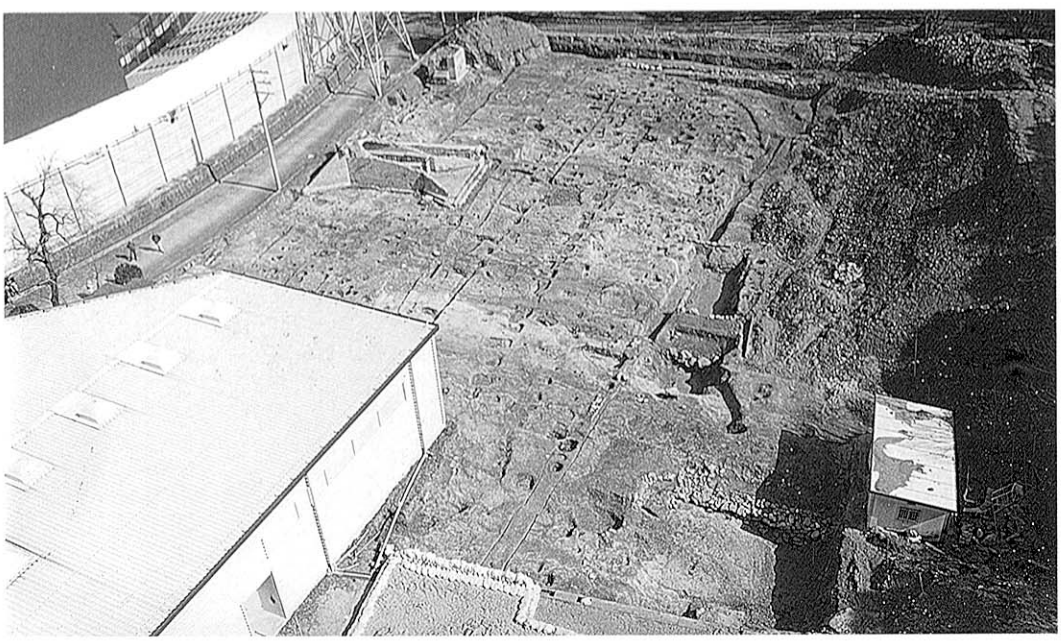
(2)　第 6 次調査区布掘り柵列（西より）

(1)　第 6 次調査区掘立柱柵列（SA325）

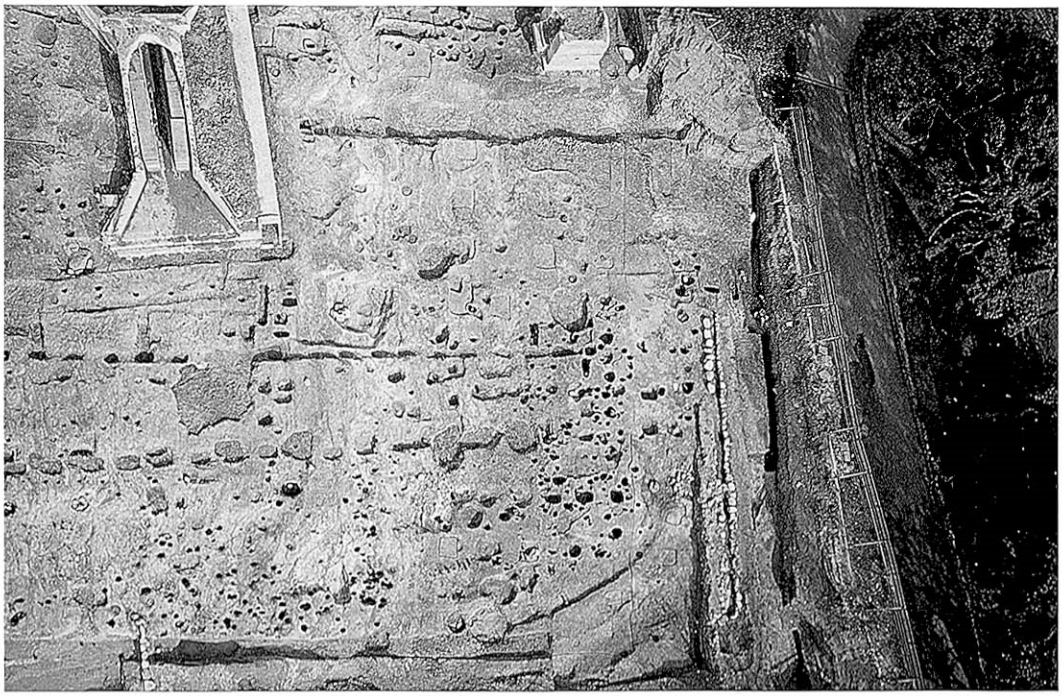
(2)　第 6 次調査区掘立柱柵列（SA325）近景



(1)　第６・７次調査区全景

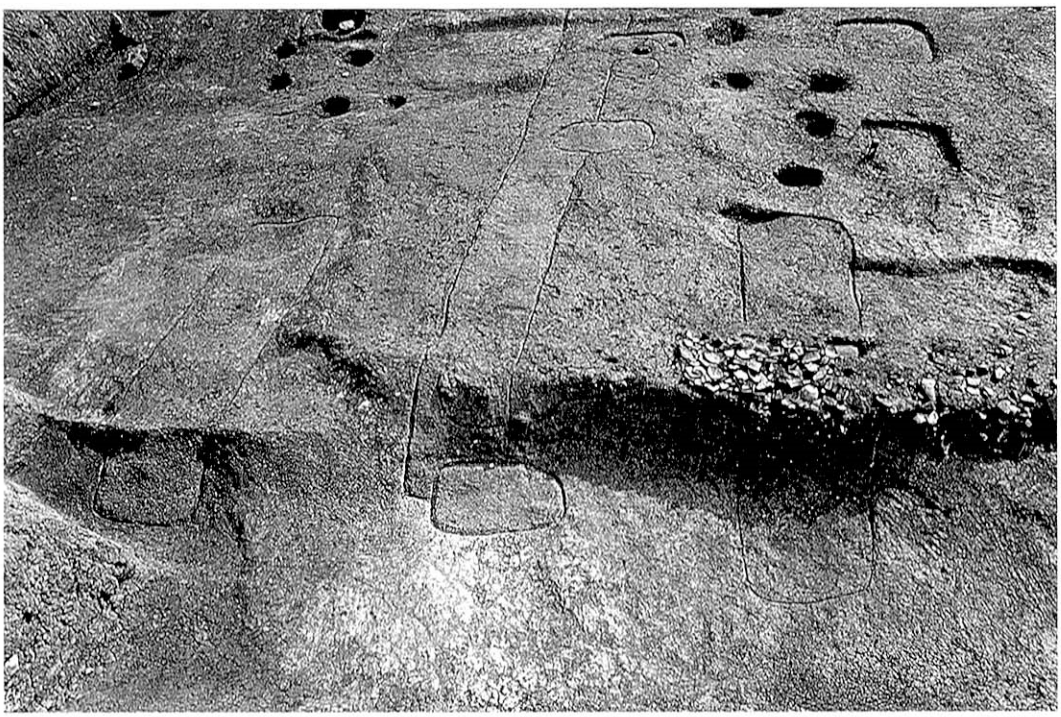


(2)　第６・７次調査区全景（西から）



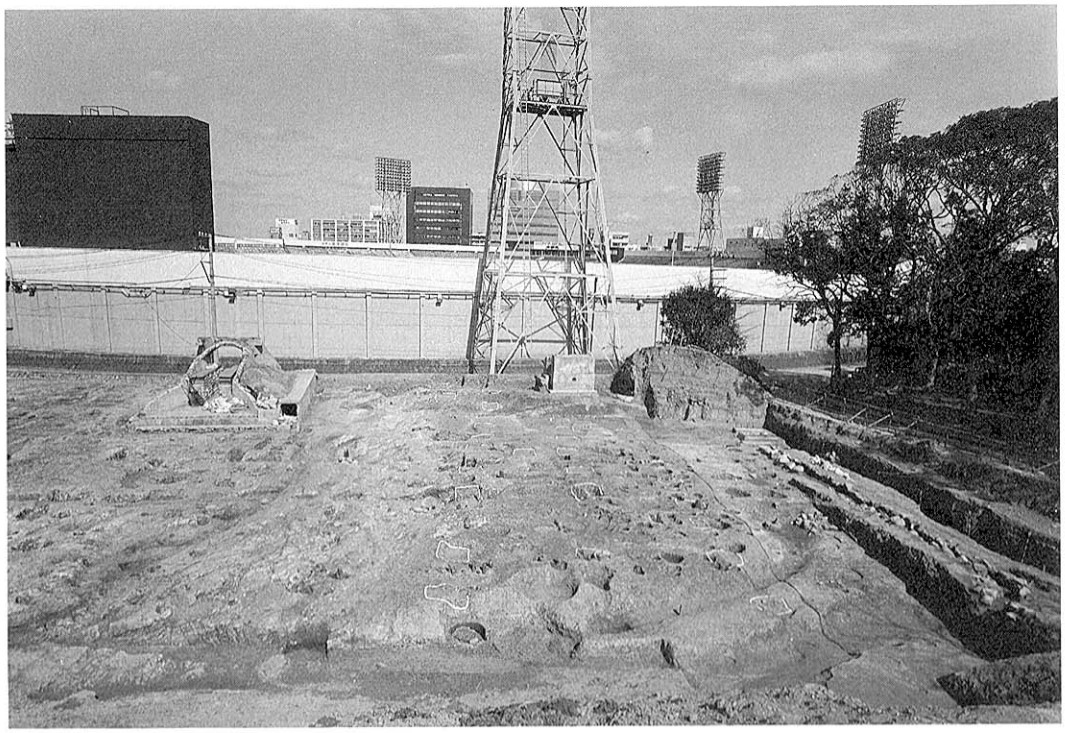
(1)　第７次調査、東門・布掘り柵列・掘立柱柵列・掘立柱建物

(2)　第７次調査区東門付近近景



(1)　東門近景（北より）

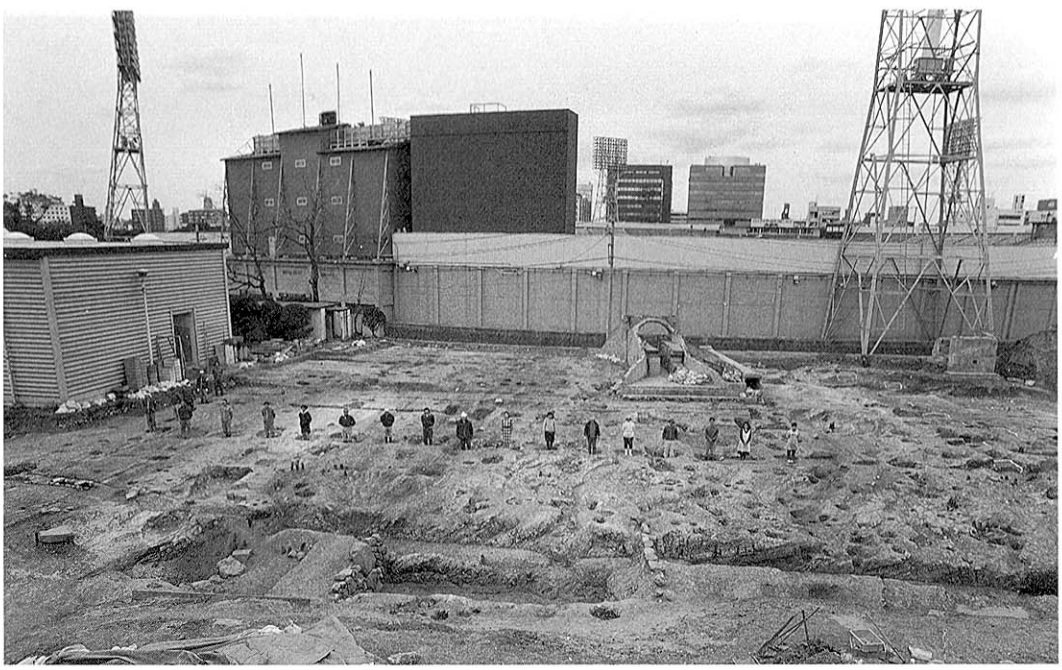
(2)　東門近景（南より）



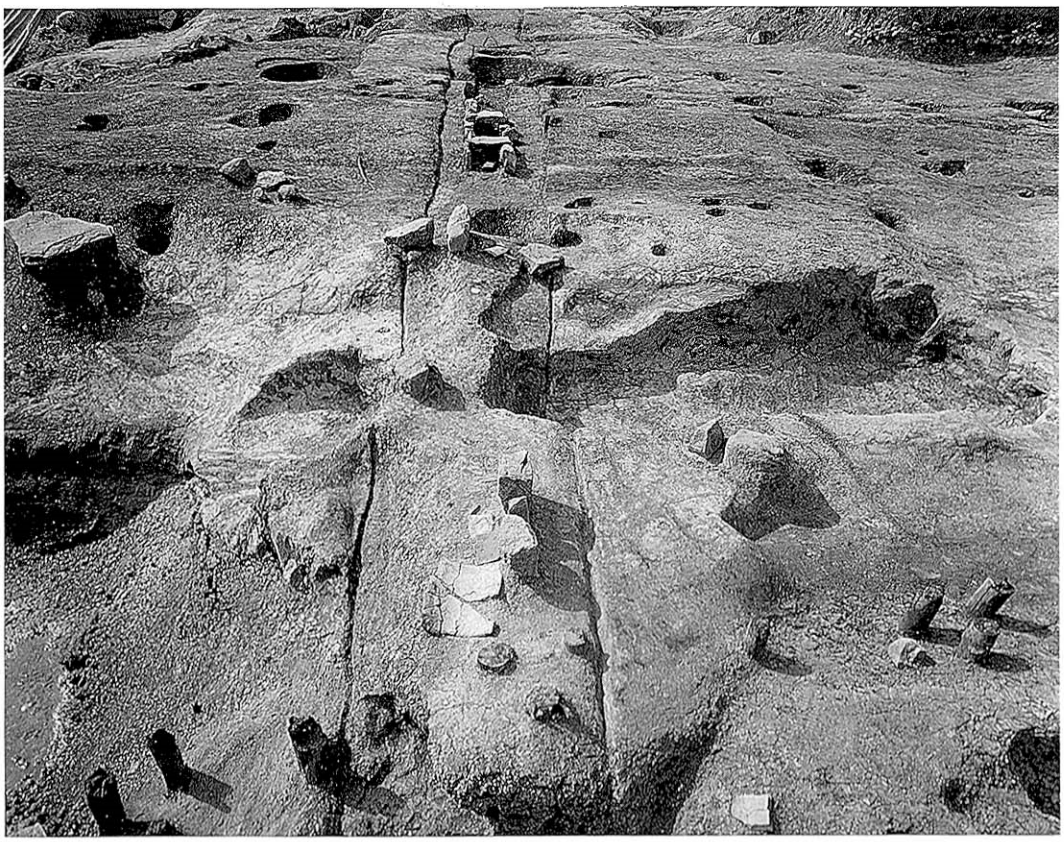
(1)　掘立柱柵列・建物遠景（南より）

(2)　掘立柱柵列・建物近景（南より）

(1)掘立柱柵列と建物（人物の立っているのが掘立柱建物柱穴）

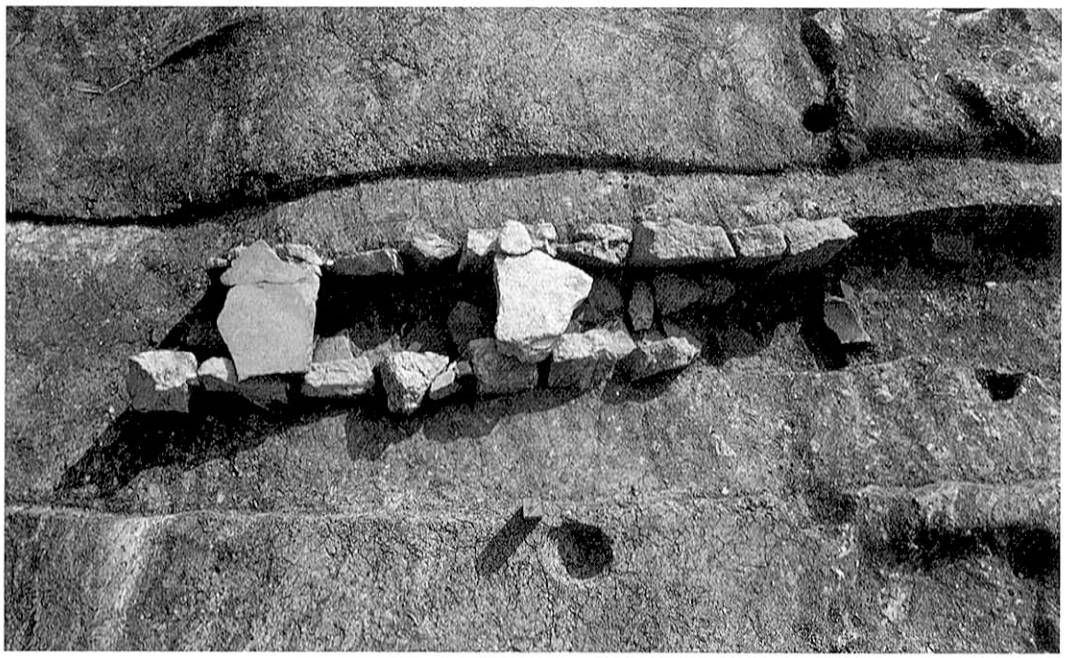


(2)　江戸時代柵列（人物の立っている所が柱穴）



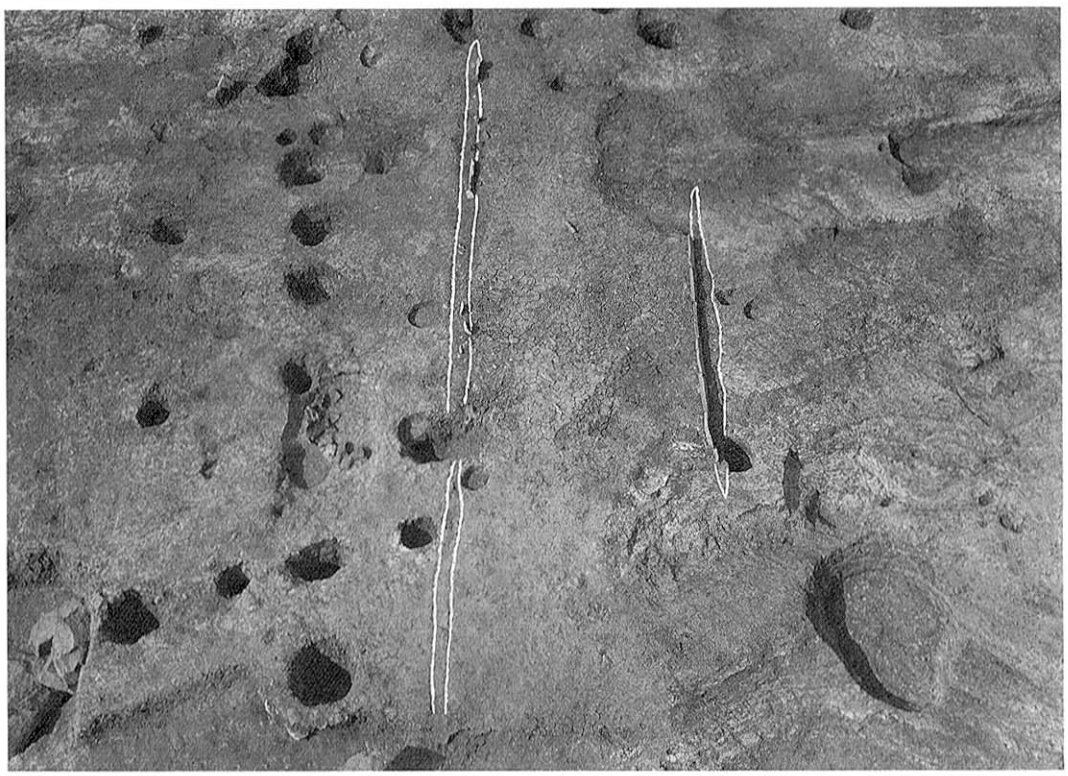
(1)　布掘り柵列と石組み排水溝（南より）

(2)　掘立柱建物（SB－321）と道路状遺構

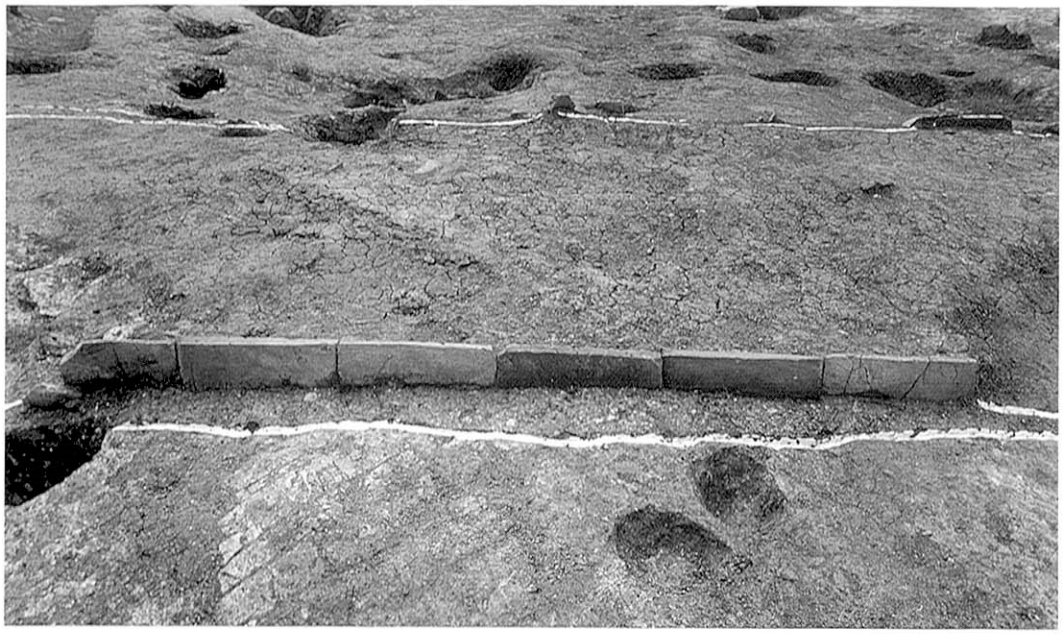


(1)　平安時代石組み排水溝（南より）

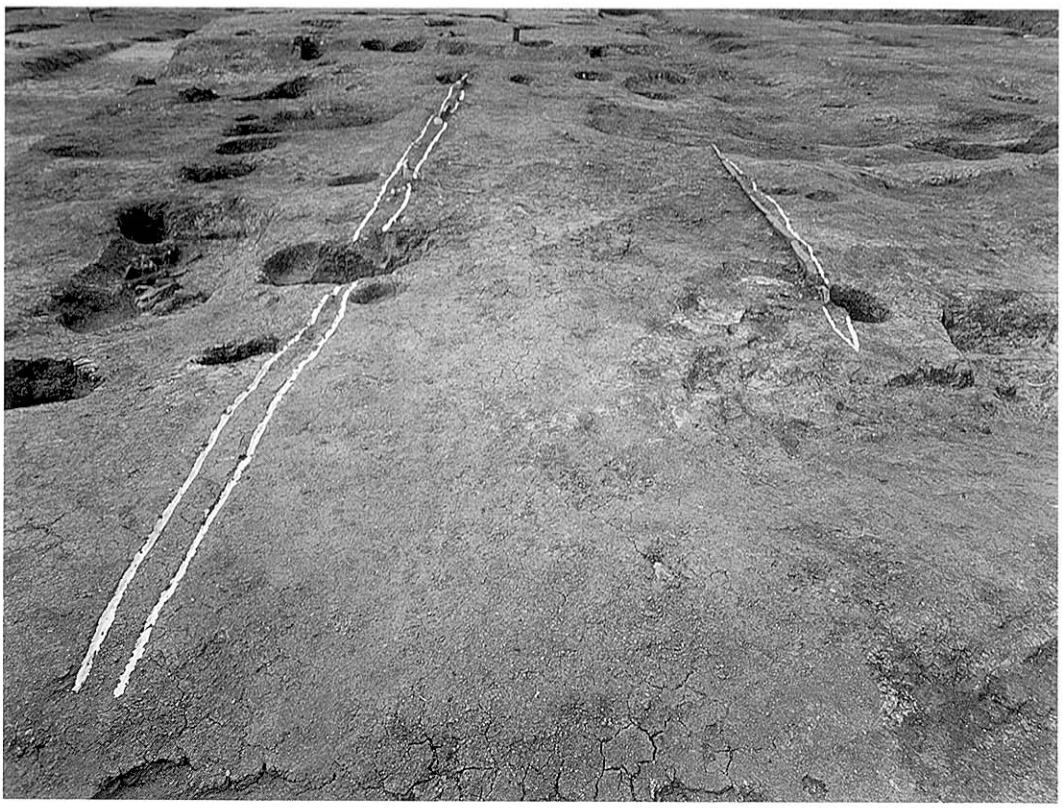
(2)　平安時代石組み排水溝（西より）



上　道路状遺構遠景（東より）・下　近景（東より）



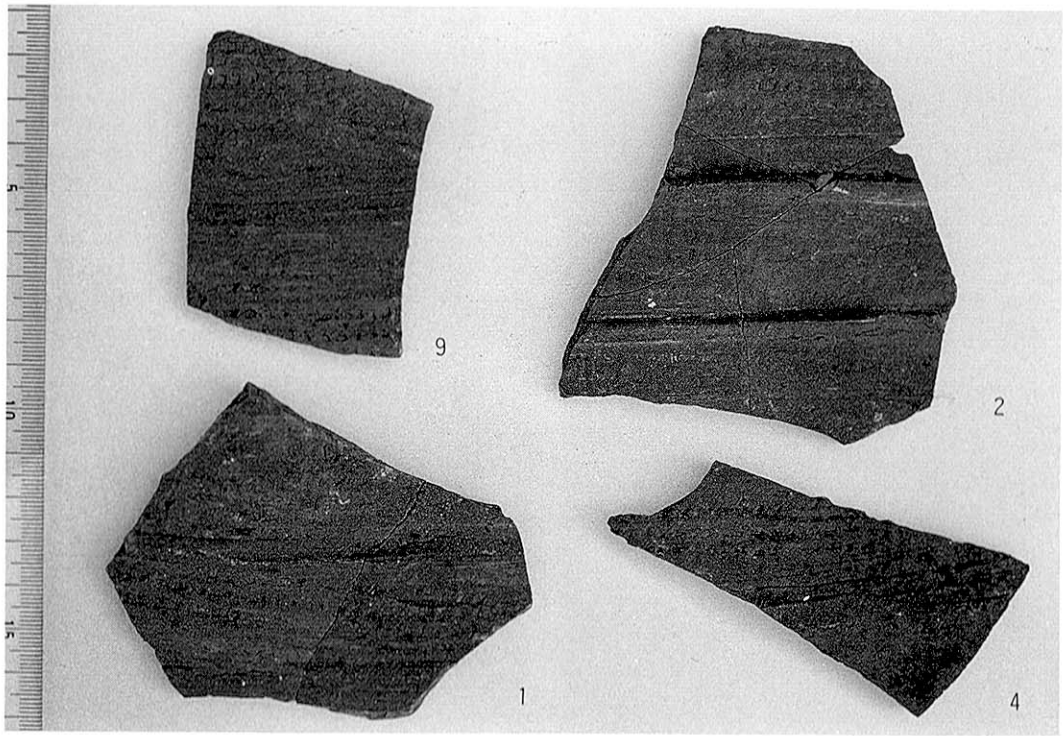
(1)　道路状遺構近景（南より）



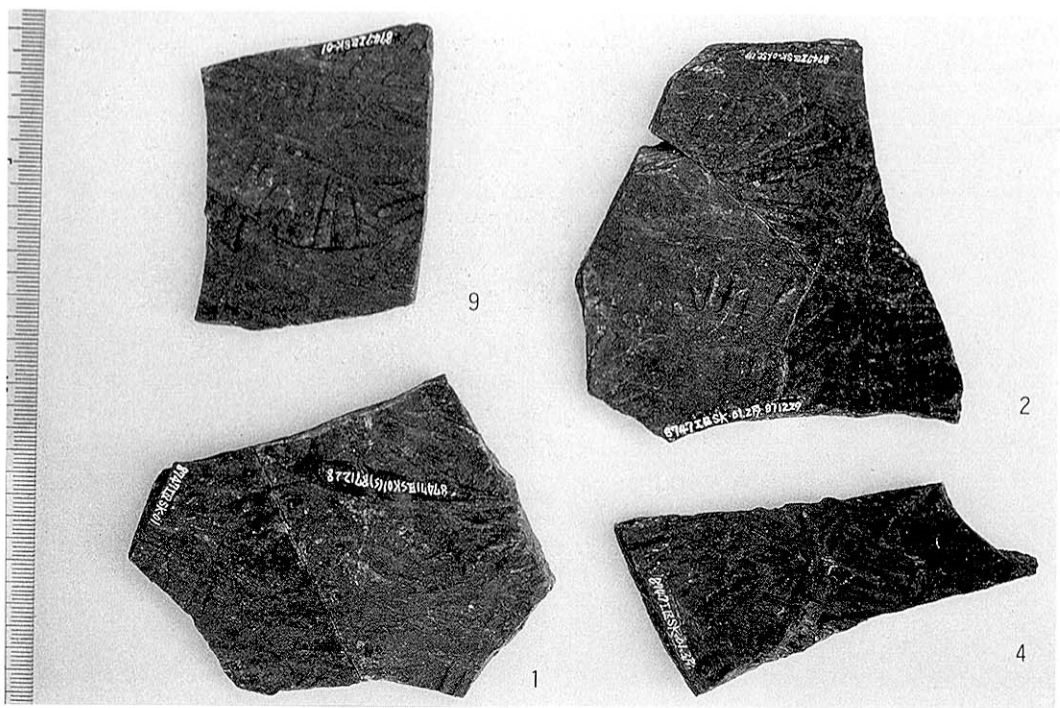
(2)　道路状遺構近景（東より）

(1)　SK－255遺物出土状況

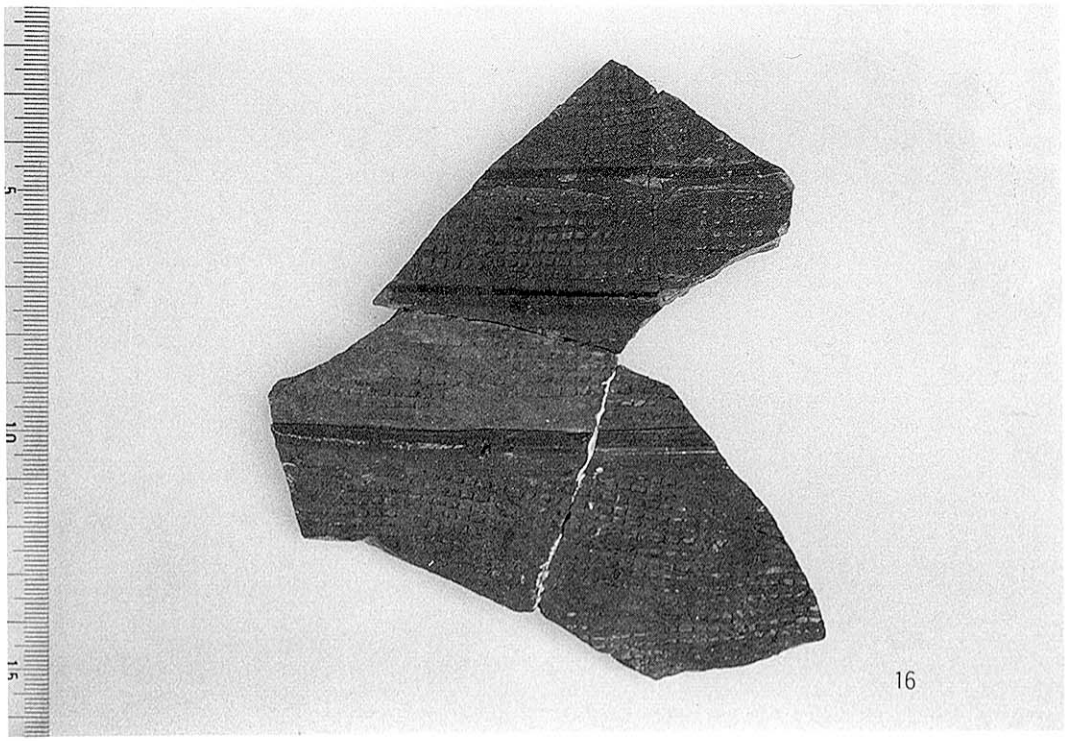
(2)　SK－246遺物出土状況

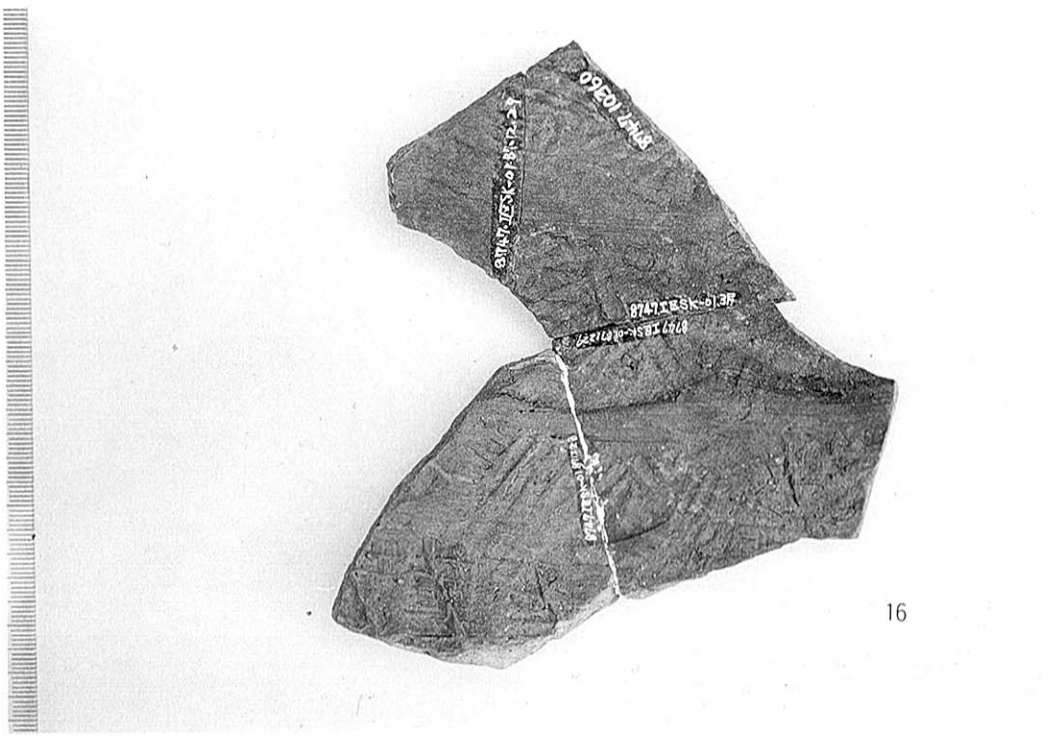


(1)　新羅・高麗陶器Ⅰ（表）

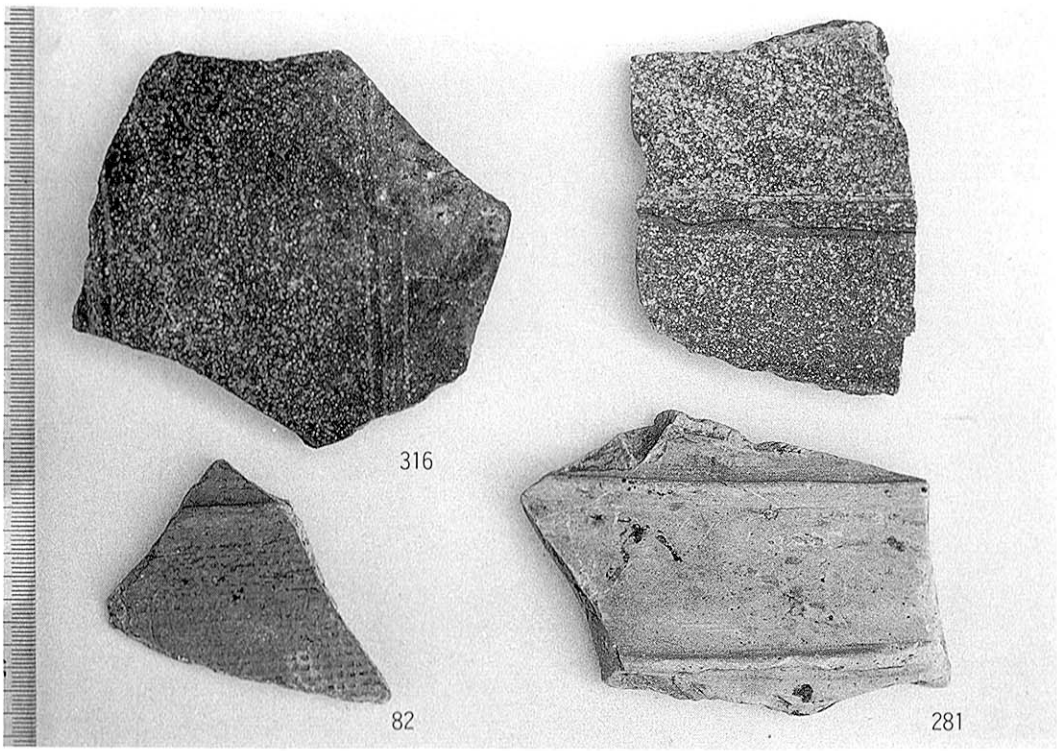


(2)　新羅・高麗陶器Ⅰ（裏）

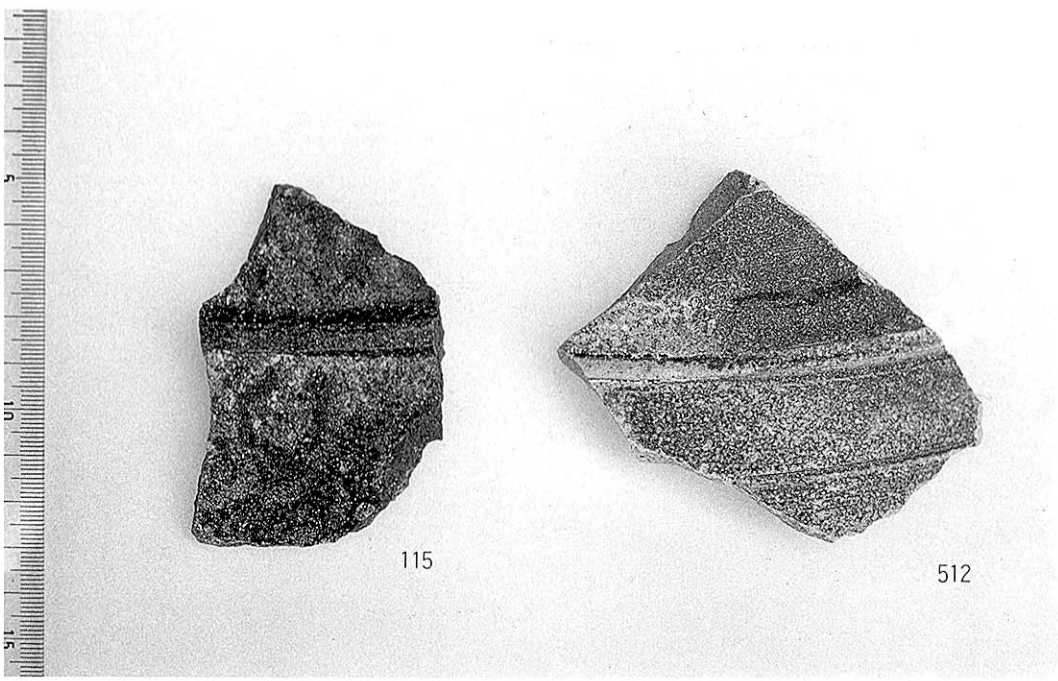




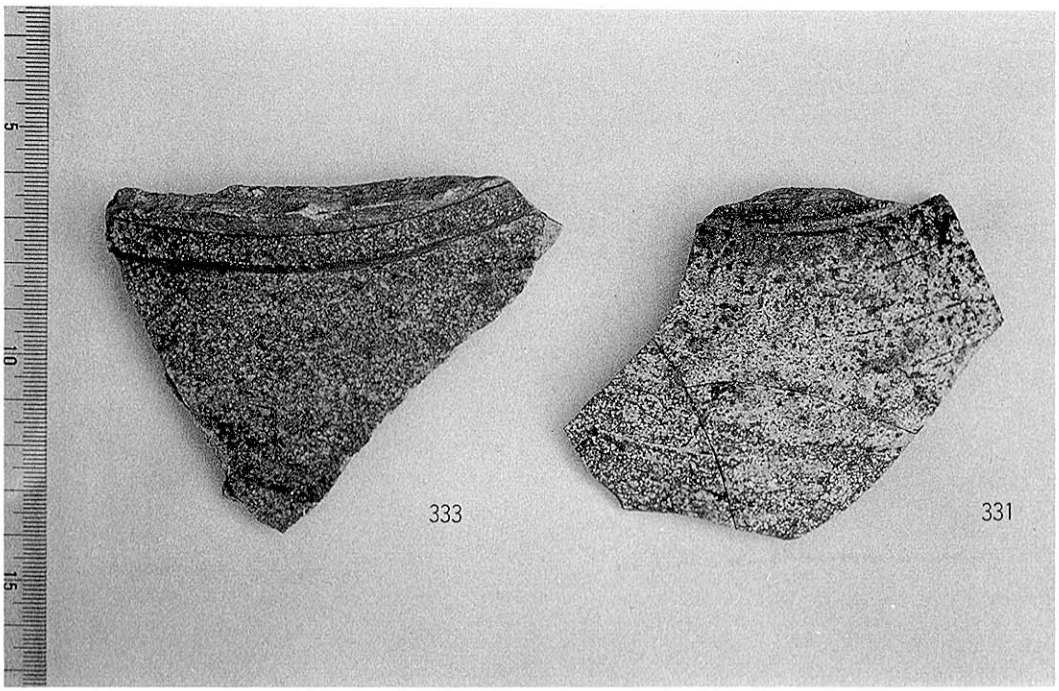
新羅・高麗陶器II（上 表・下 裏）



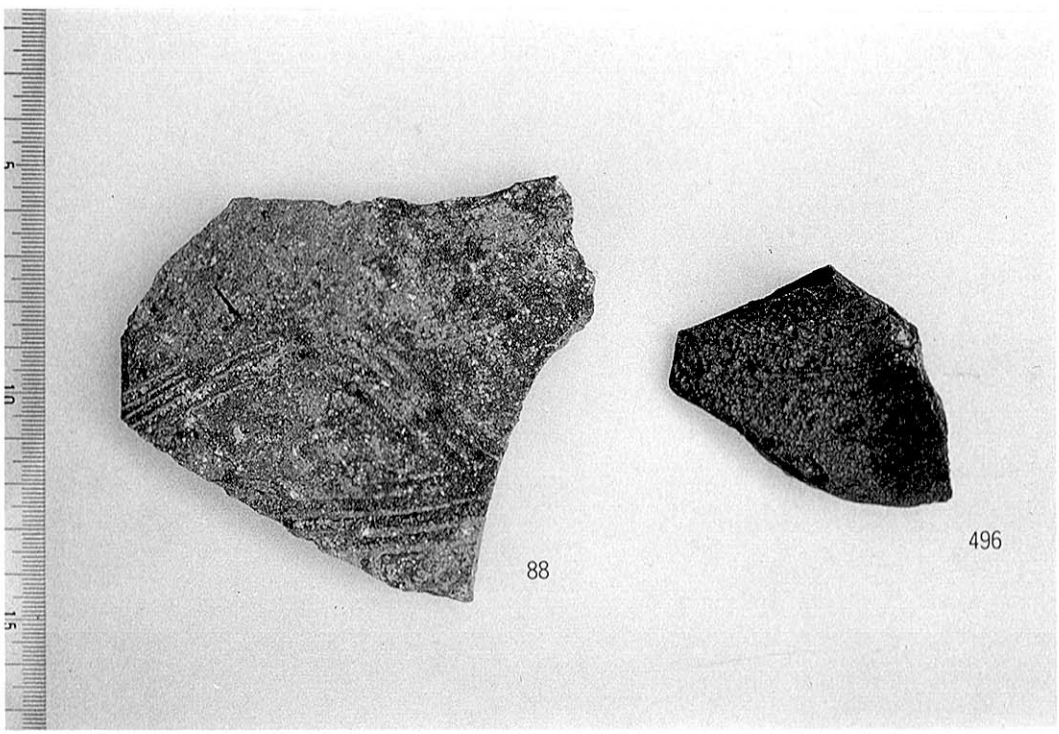
(1)　新羅・高麗陶器Ⅲ



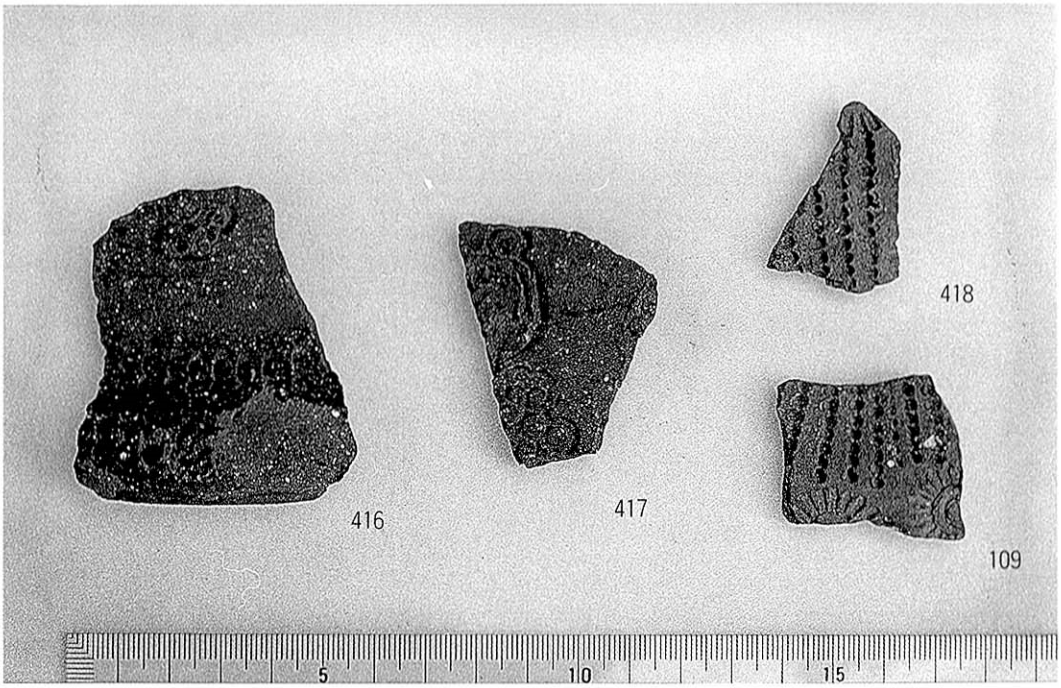
(2)　新羅・高麗陶器Ⅳ

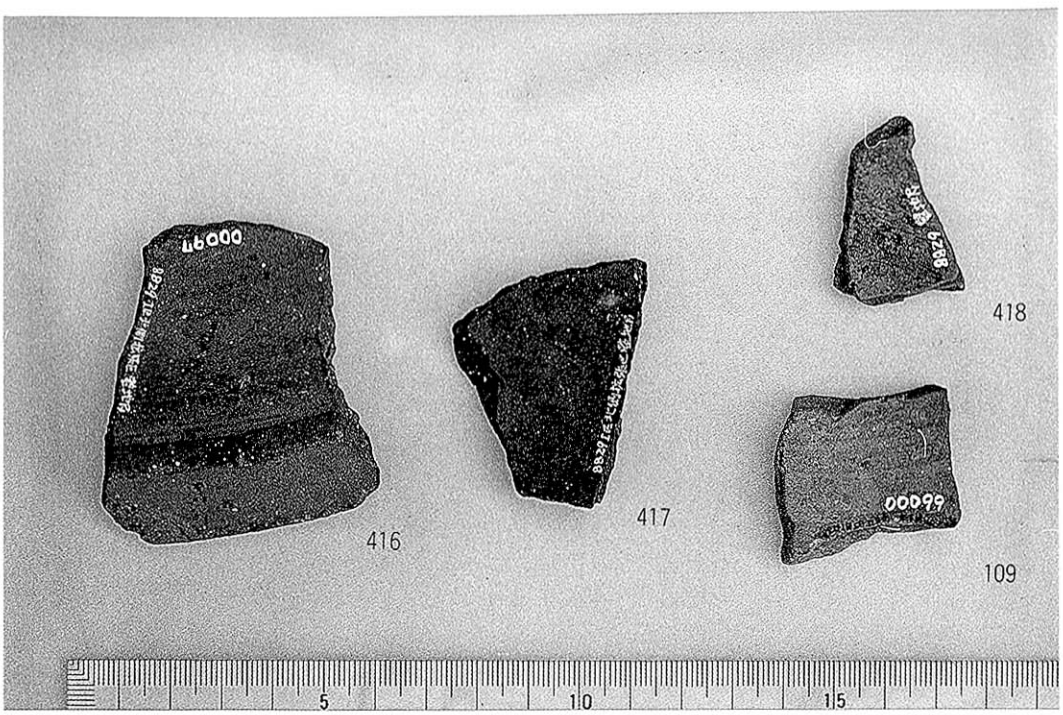


(1)　新羅・高麗陶器 V

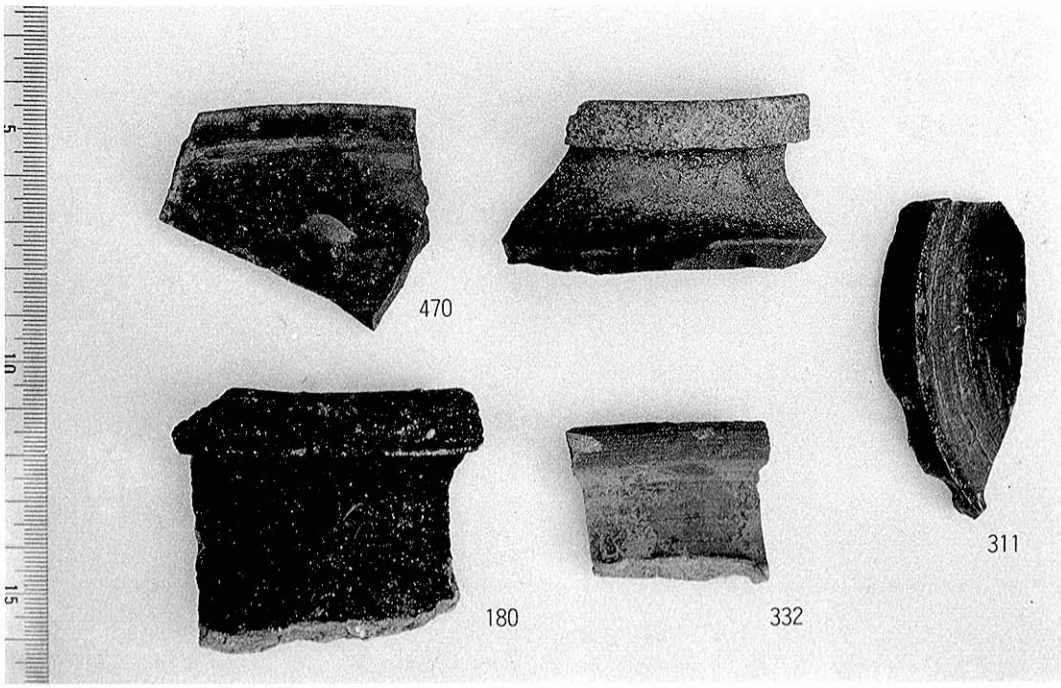


(2)　新羅・高麗陶器 VI

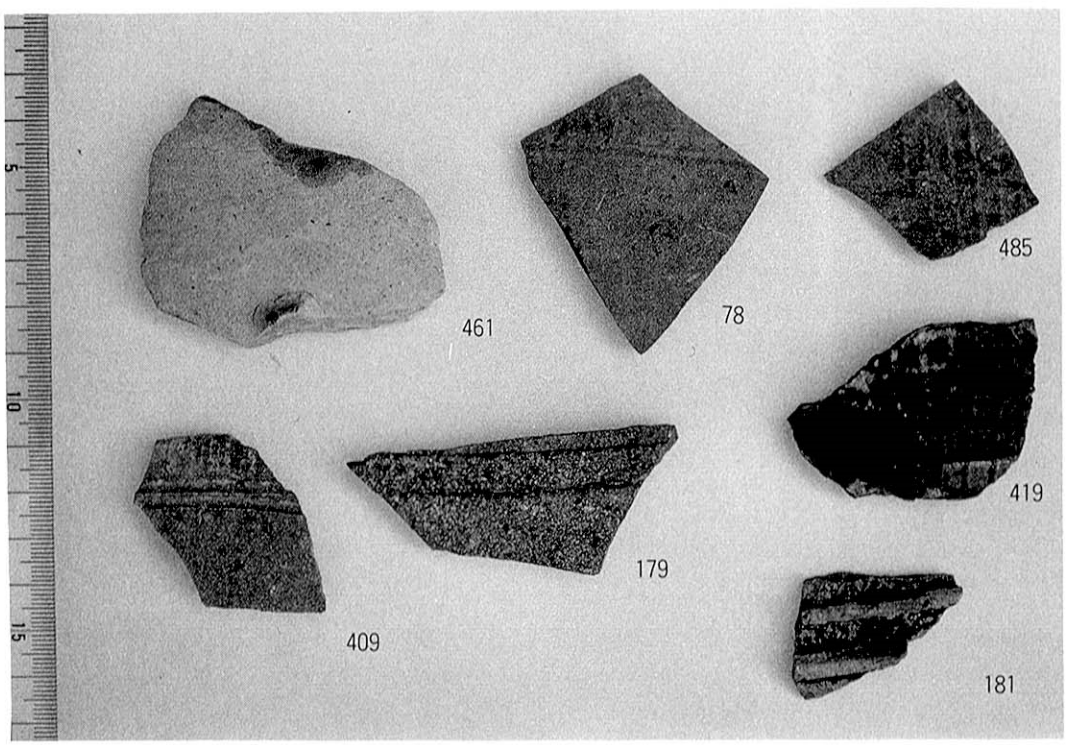




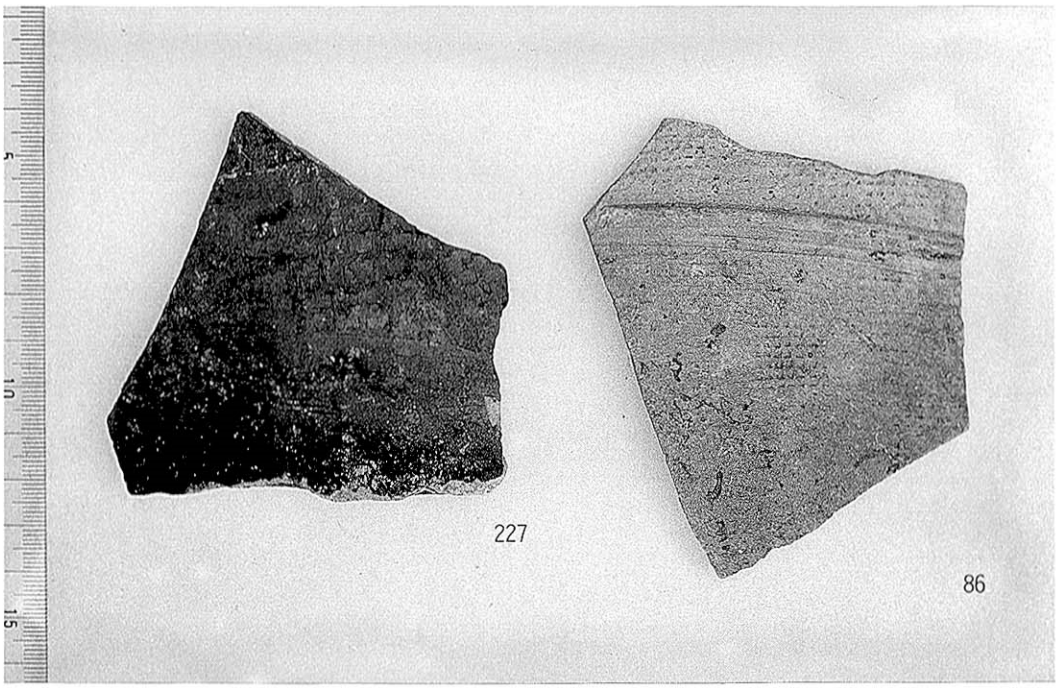
新羅・高麗陶器Ⅶ（上 表・下 裏）



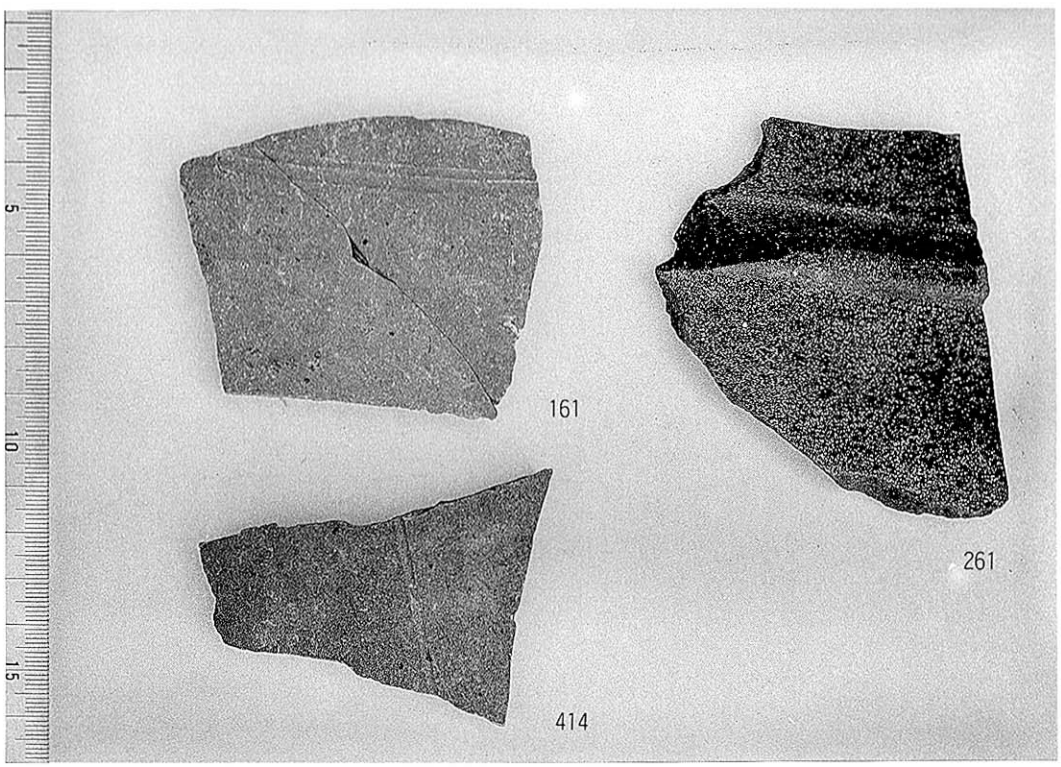
(1)　新羅・高麗陶器Ⅷ



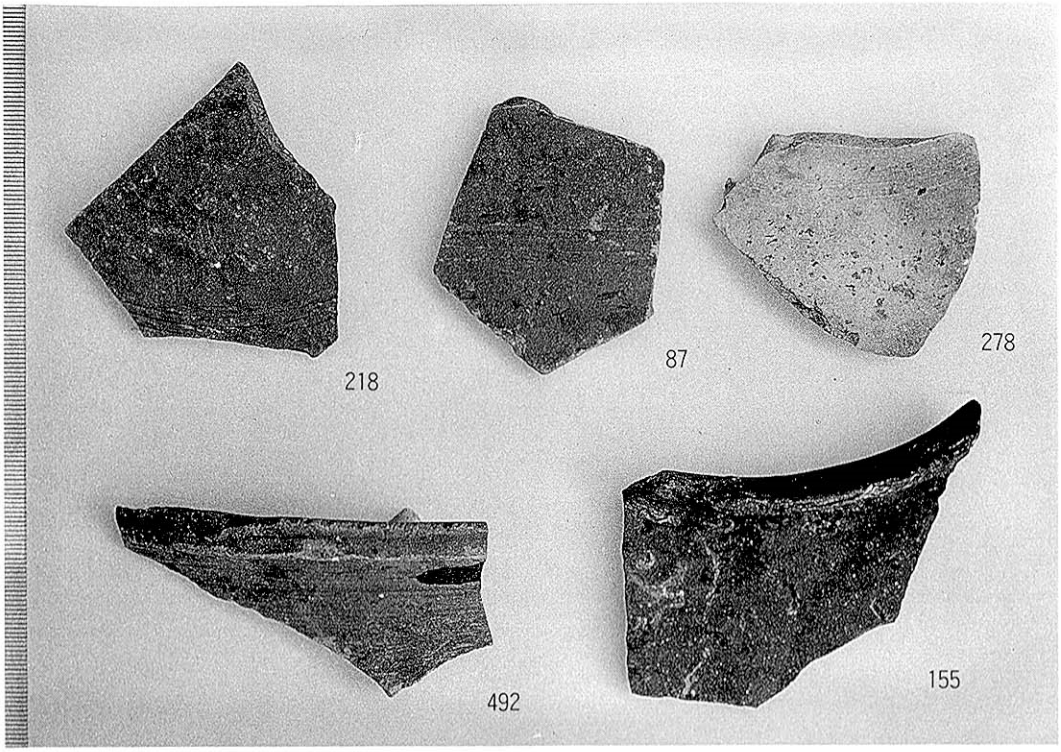
(2)　新羅・高麗陶器Ⅸ



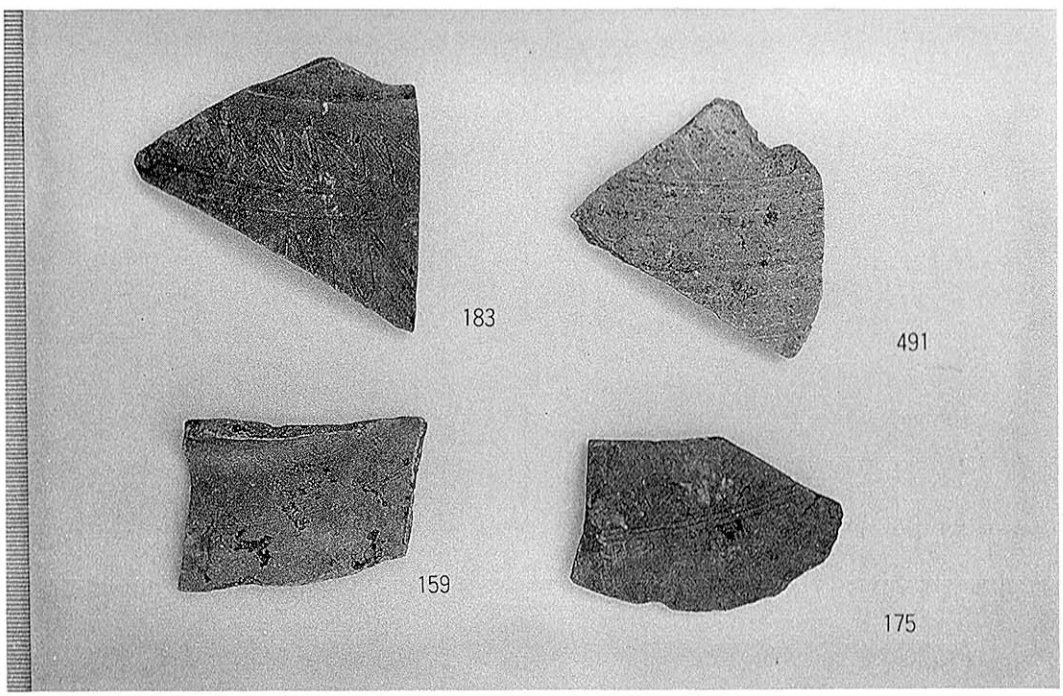
(1)　新羅・高麗陶器 X



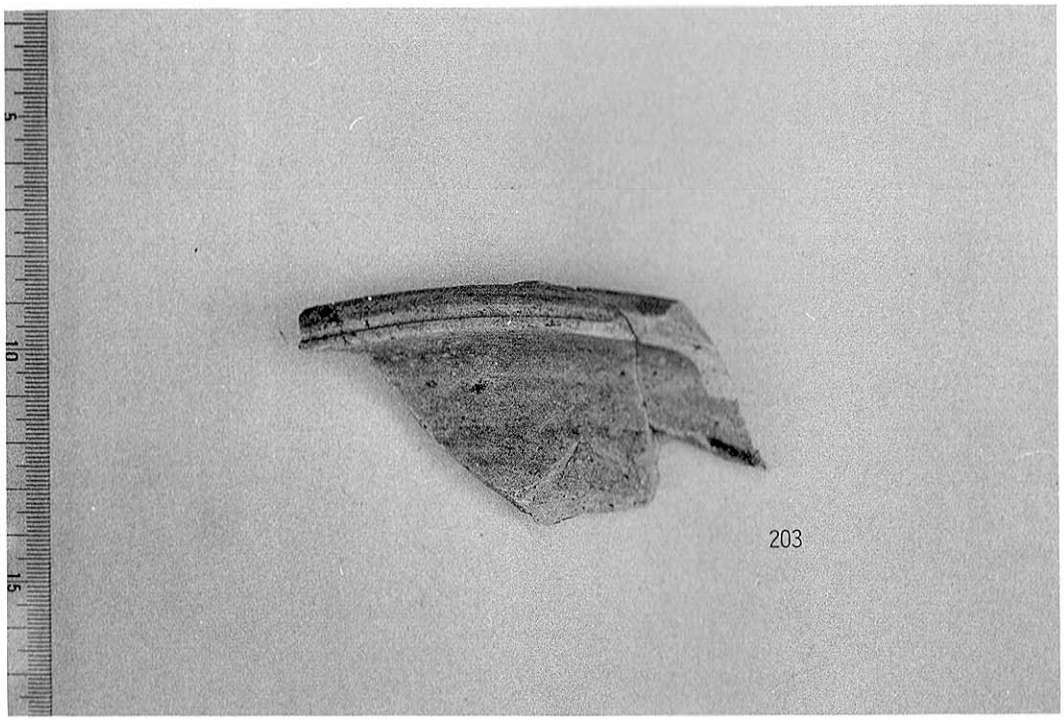
(2)　新羅・高麗陶器 XI



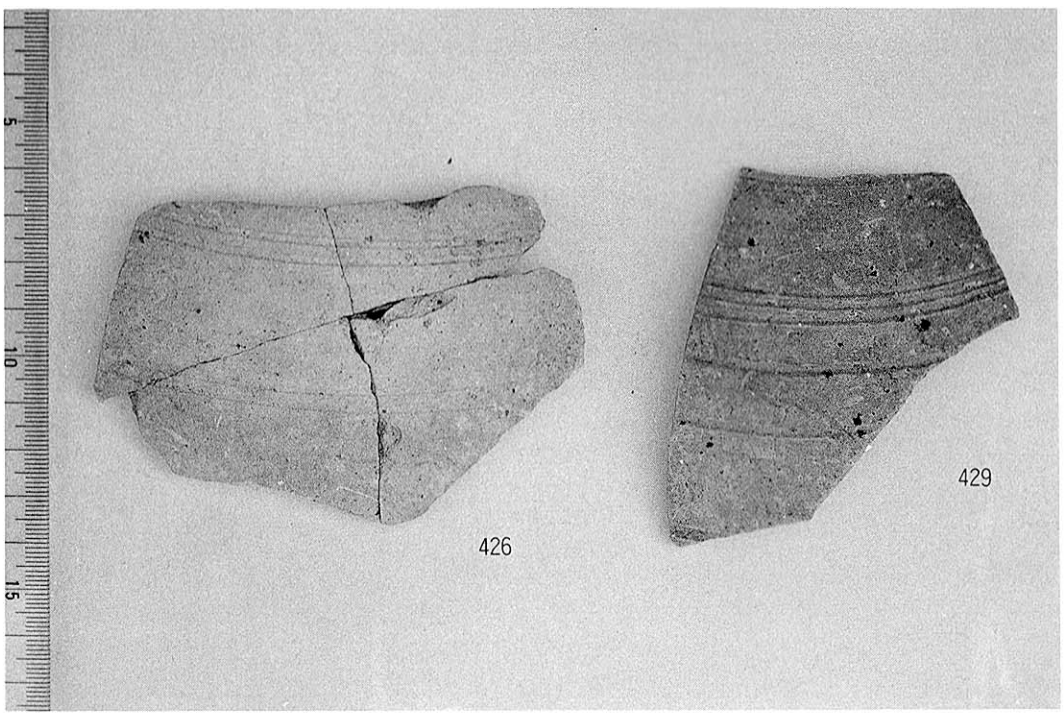
(1)　新羅・高麗陶器 XII



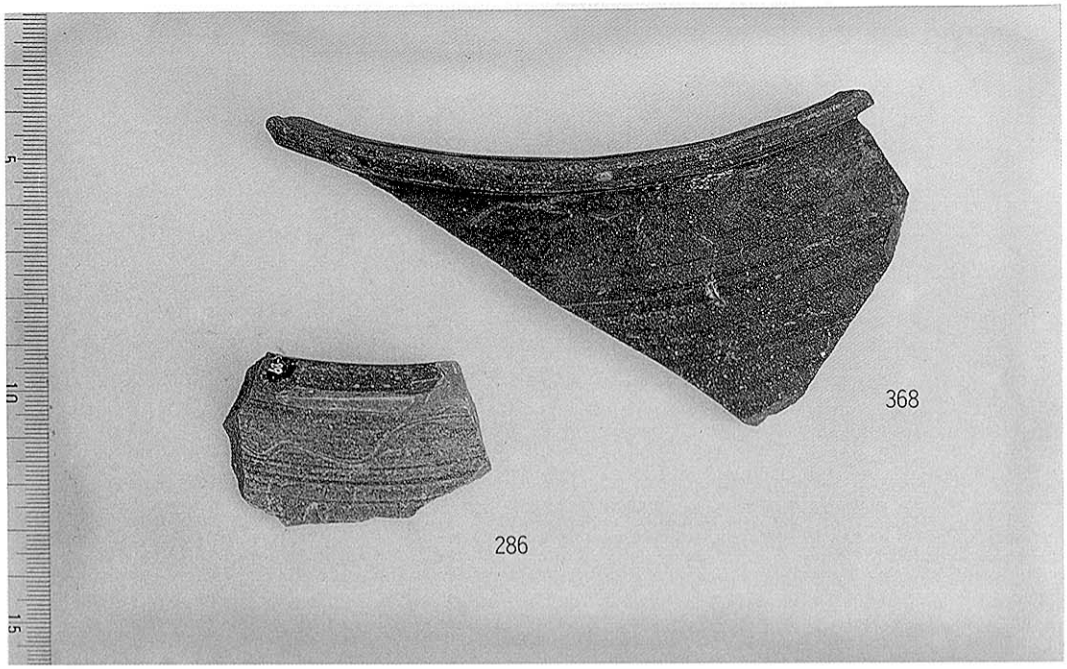
(2)　新羅・高麗陶器 XIII



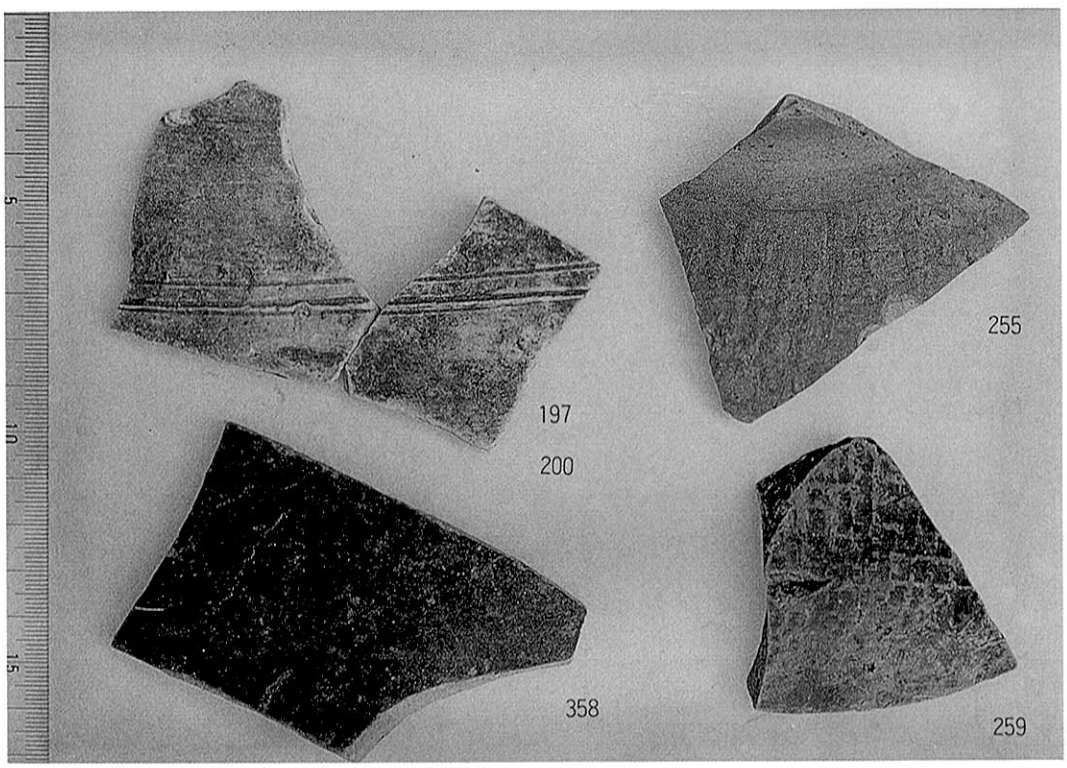
(1)　新羅・高麗陶器 XⅣ



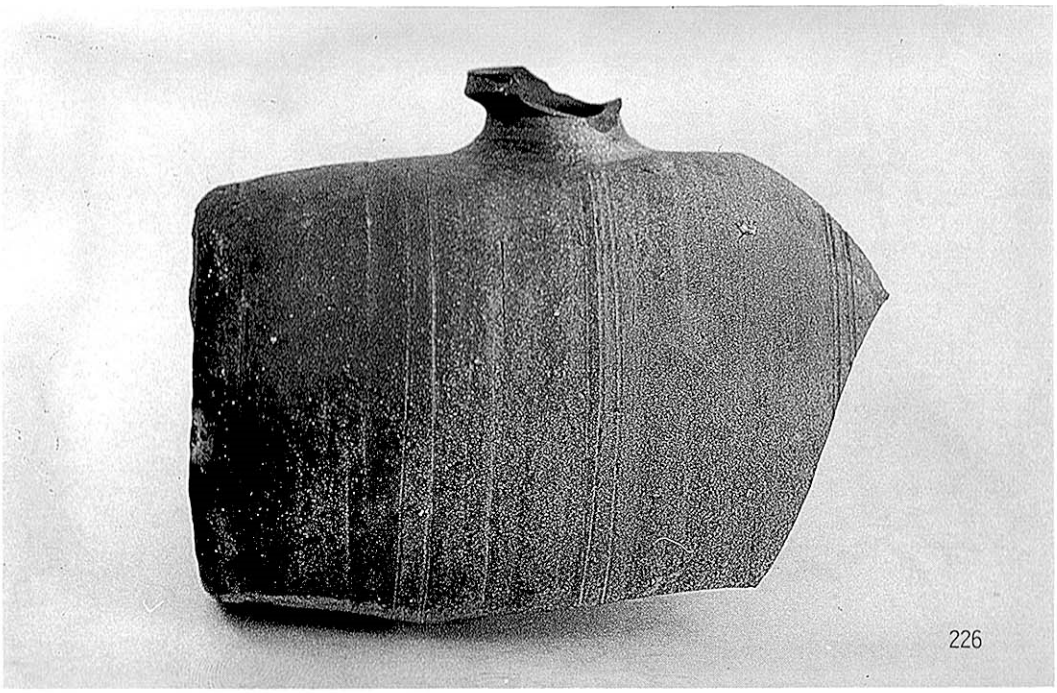
(2)　新羅・高麗陶器 XⅤ



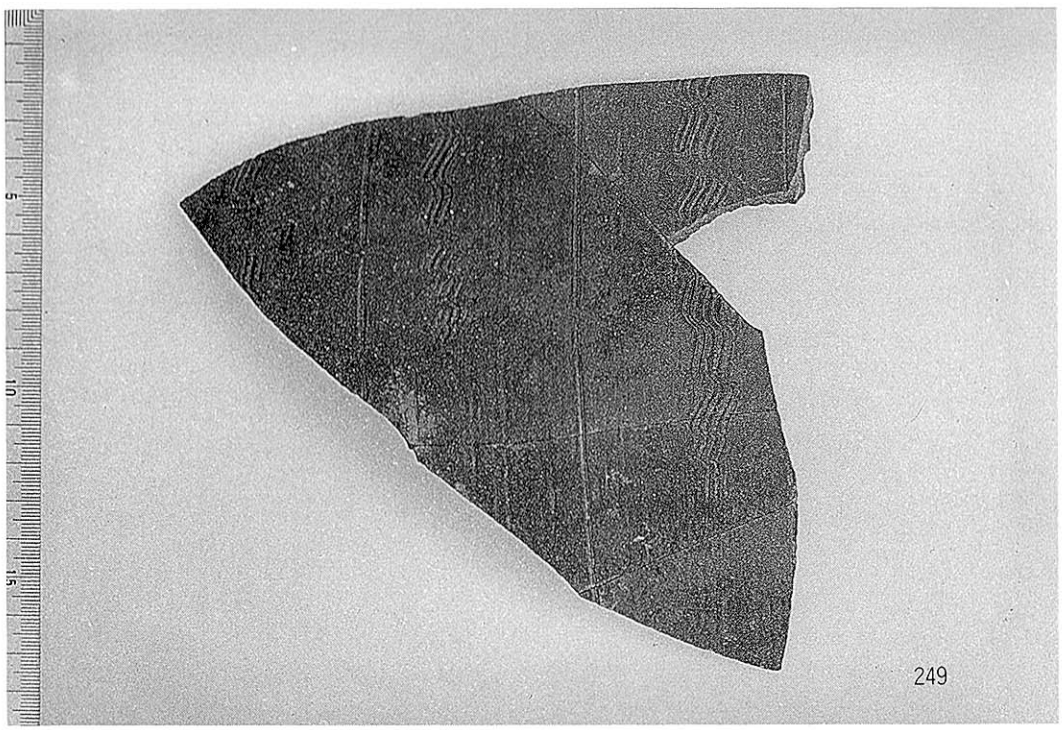
(1) 新羅・高麗陶器 XVI



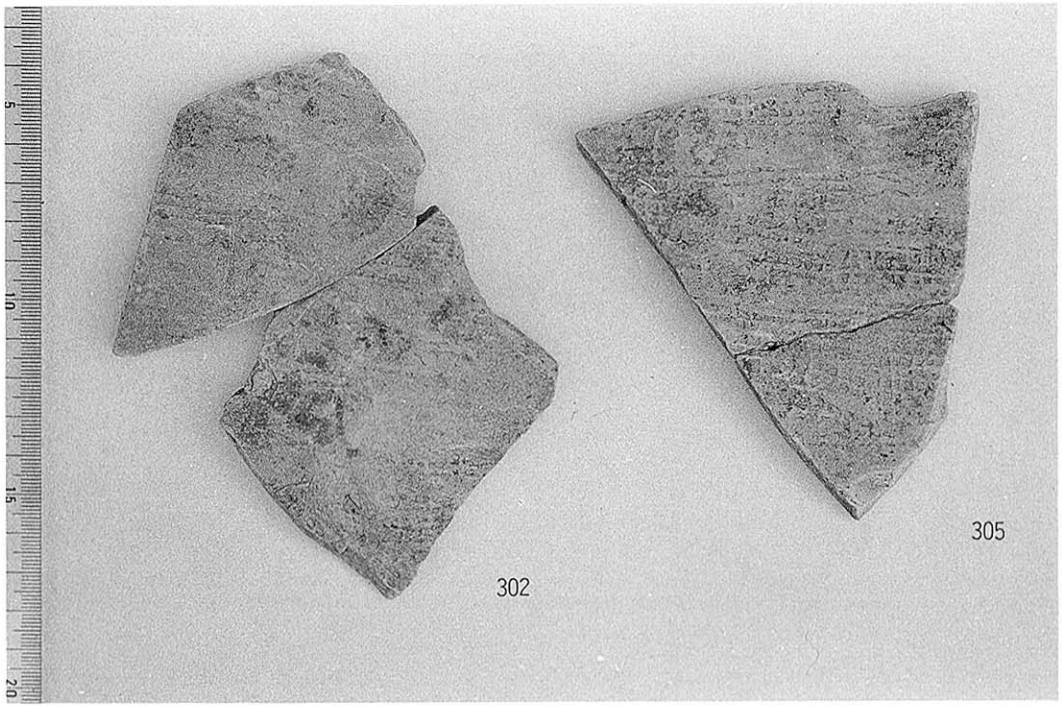
(2) 新羅・高麗陶器 XVII



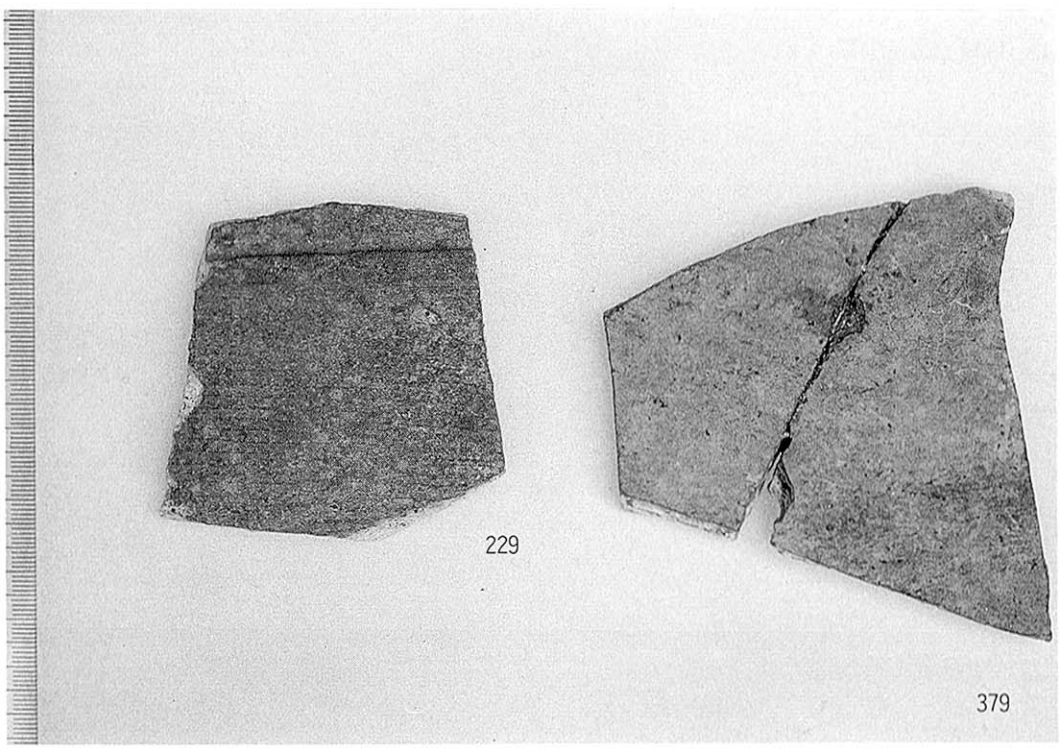
(1)　新羅・高麗陶器　XVIII



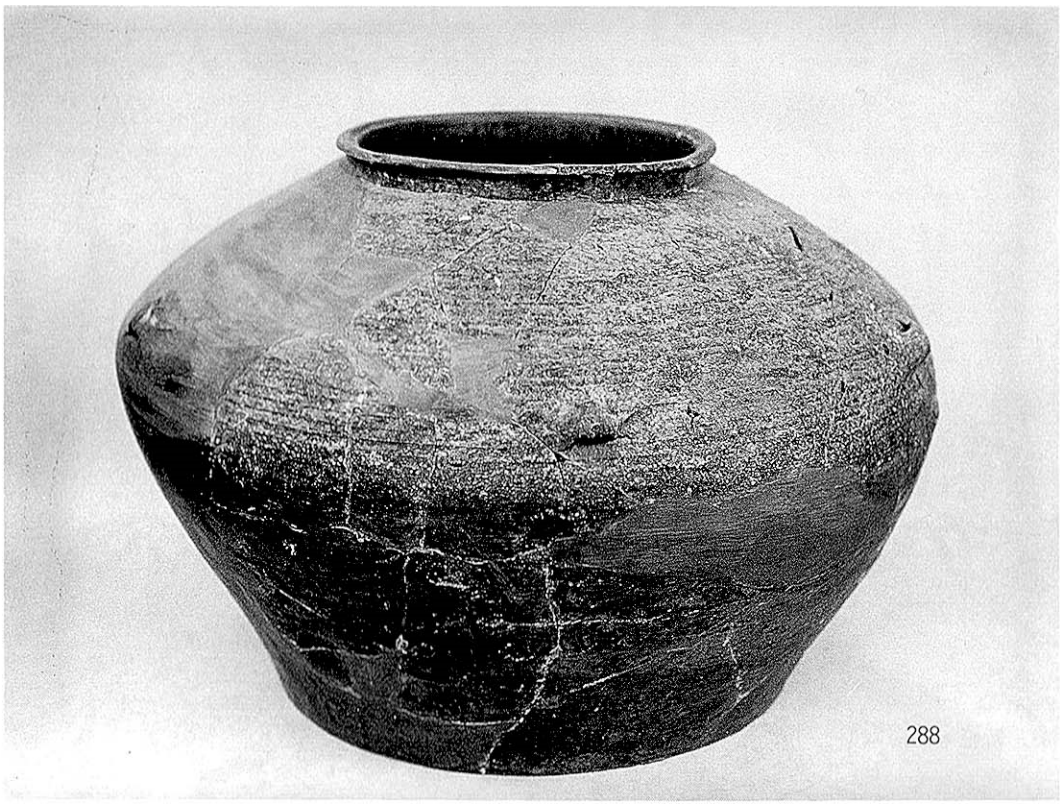
(2)　新羅・高麗陶器　XIX



(1)　新羅・高麗陶器　XX

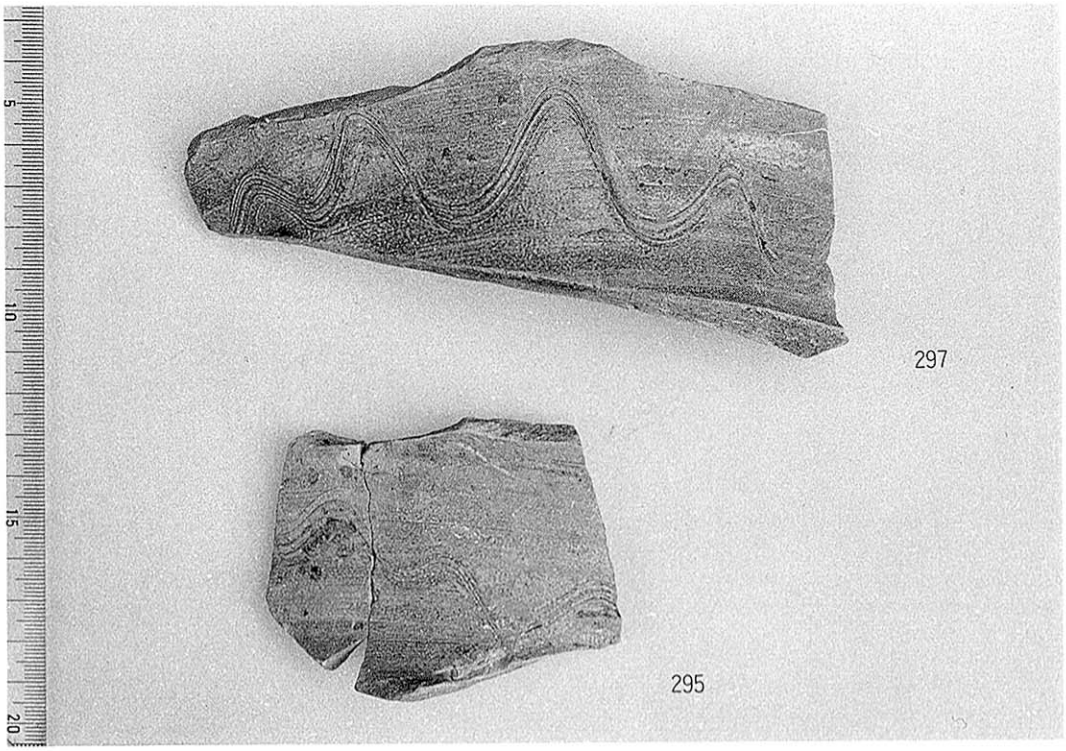


(2)　新羅・高麗陶器　XXI

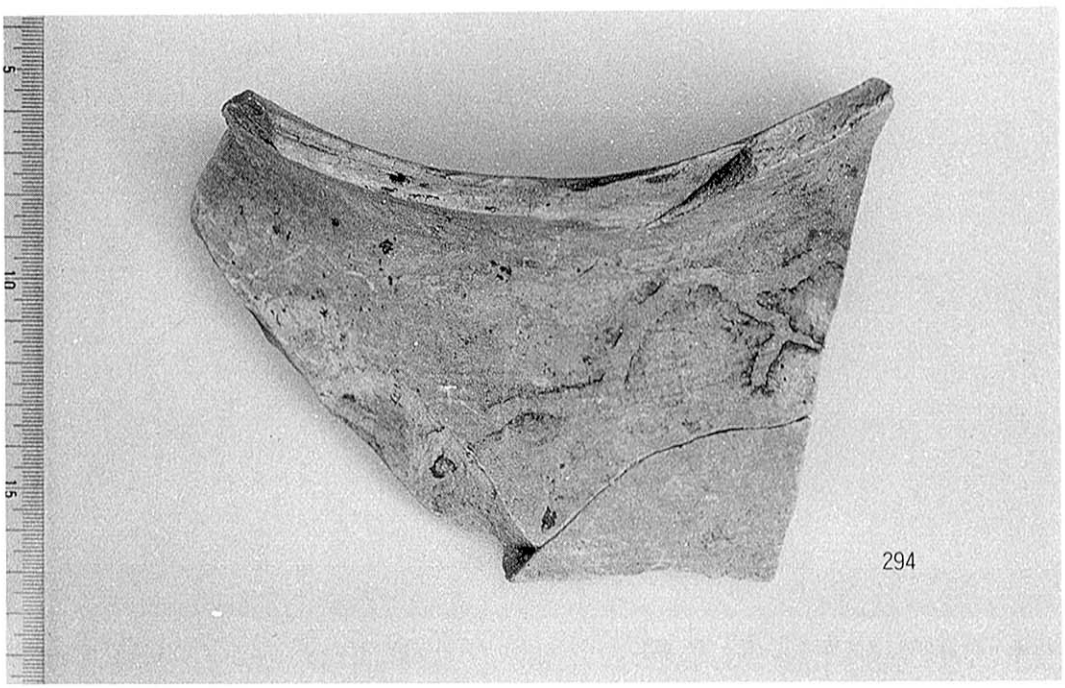


(1)　新羅・高麗陶器　XXII

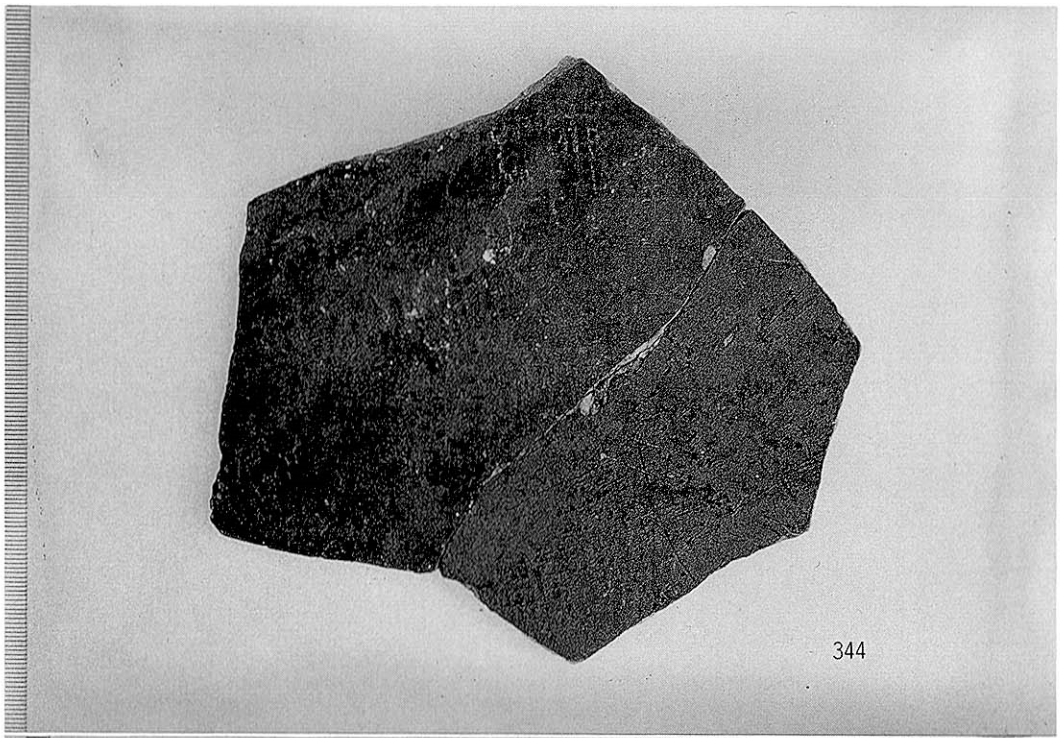
(2)　新羅・高麗陶器　XXIII

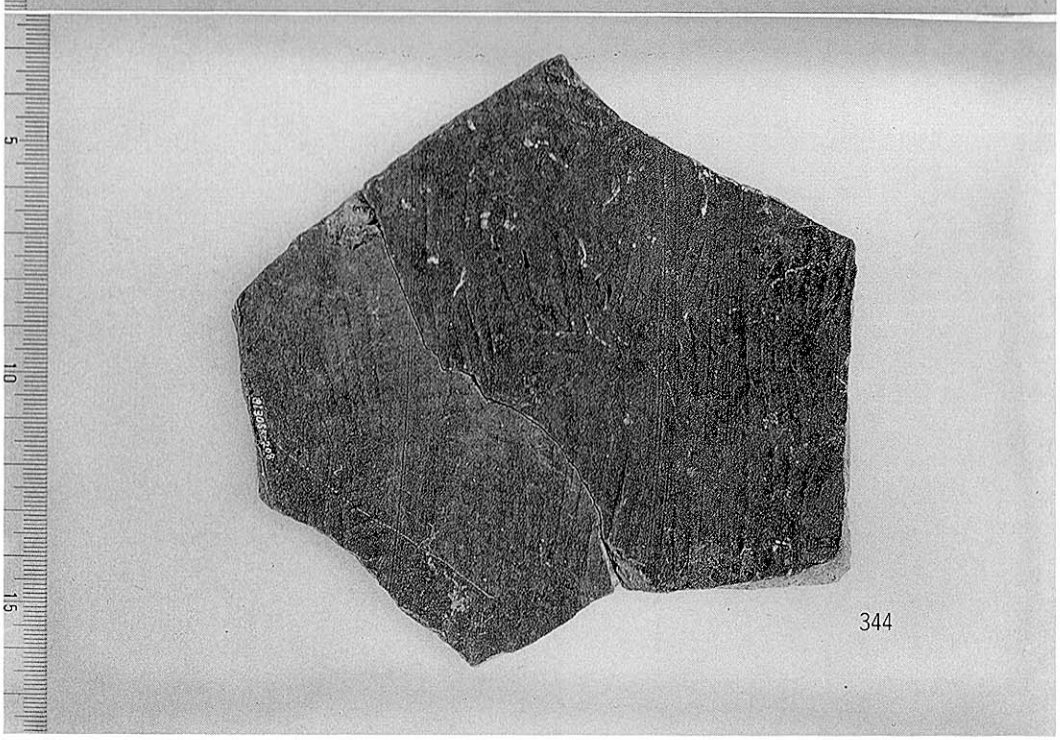


(1)　新羅・高麗陶器　XXⅣ



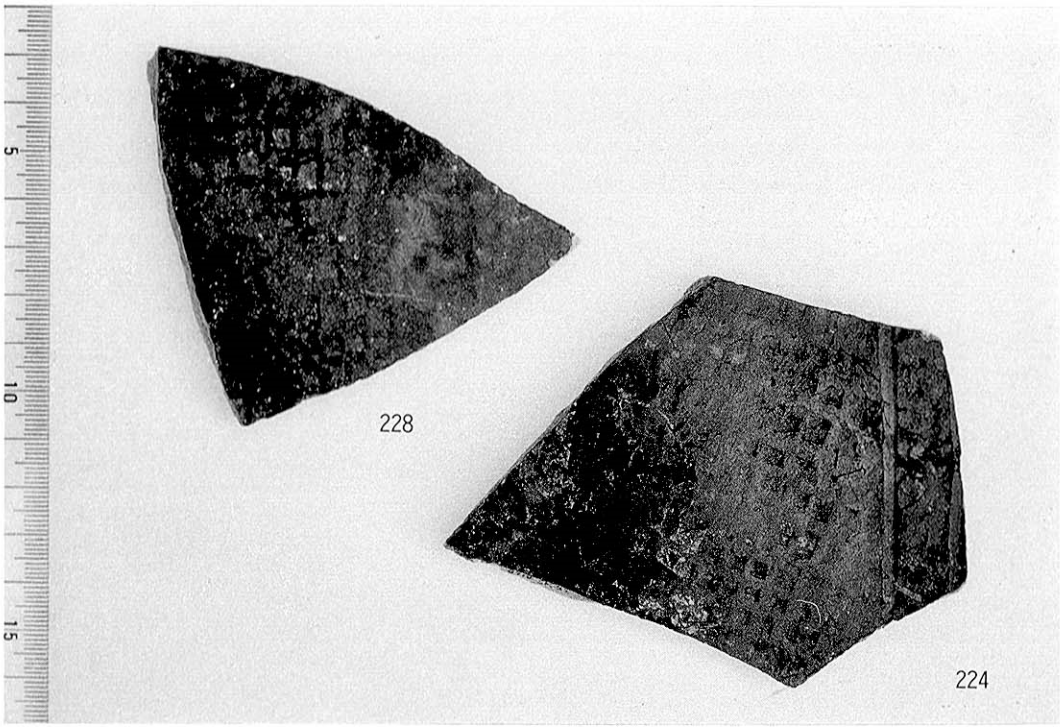
(2)　新羅・高麗陶器　XXⅤ



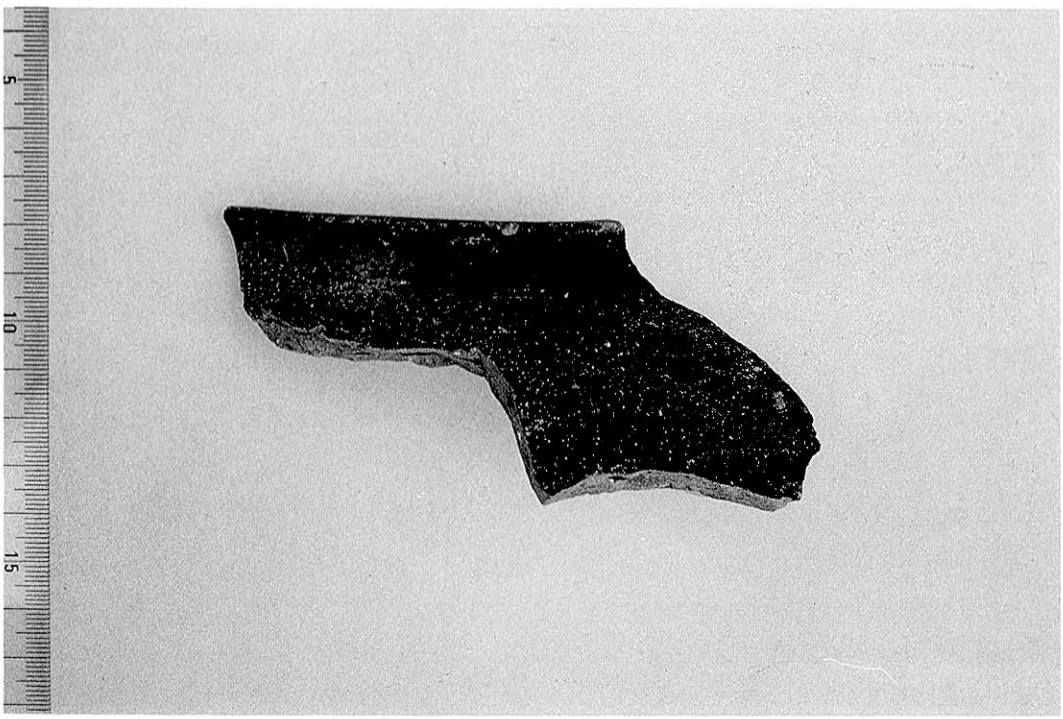


新羅・高麗陶器ＸＸⅥ（上 表・下 裏）

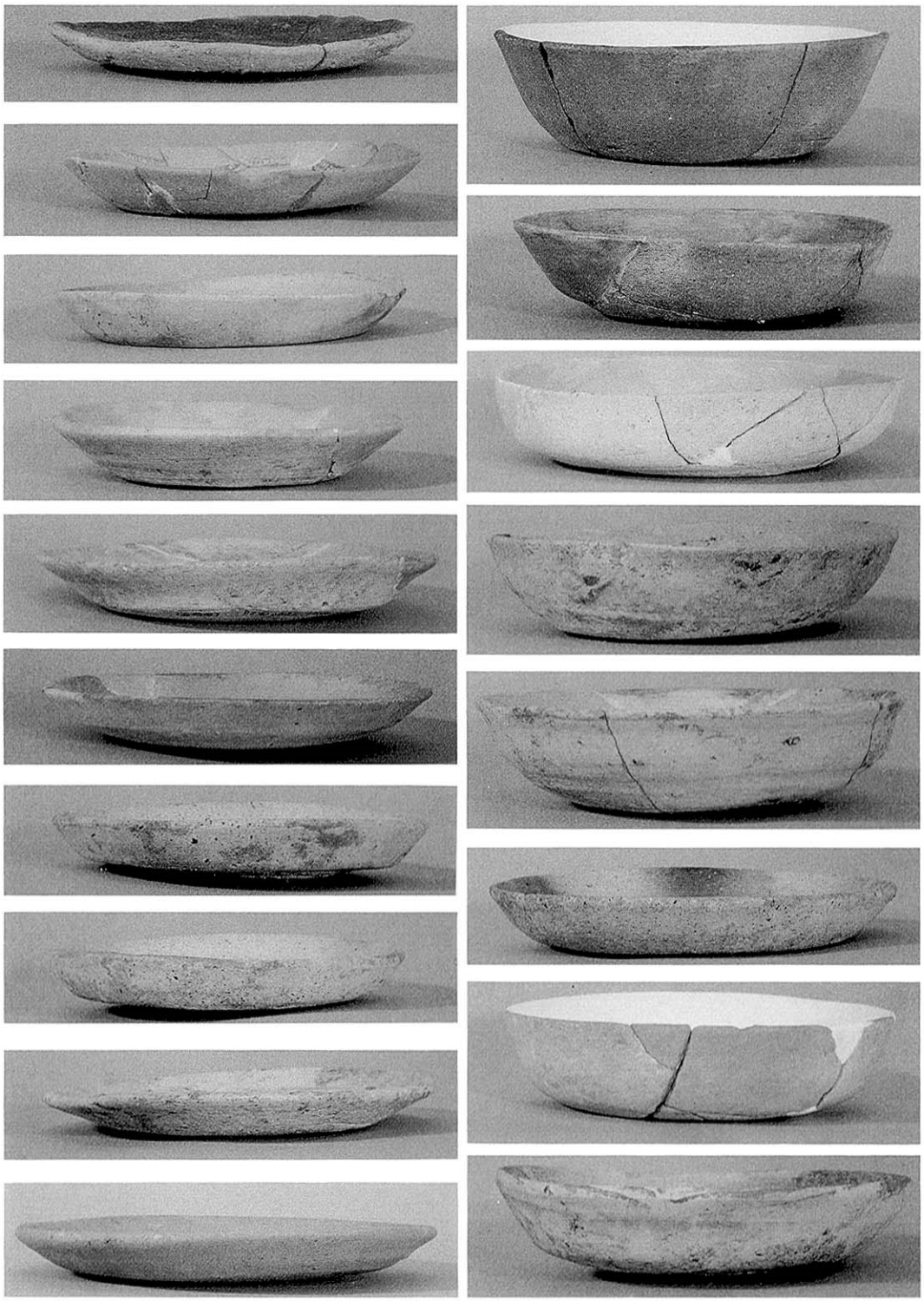
新羅・高麗陶器ＸＸⅦ（上 表・下 裏）



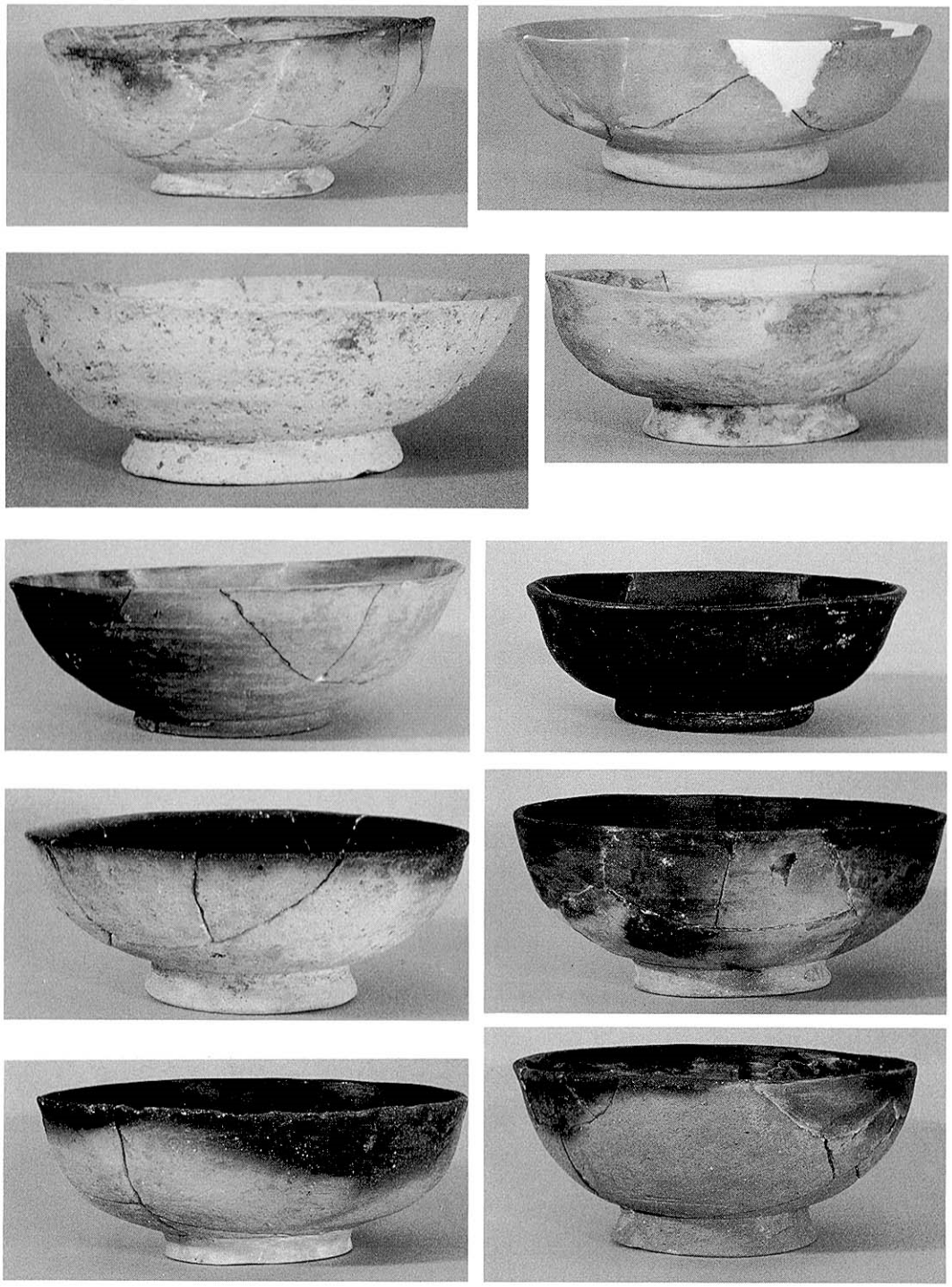
(1)　新羅・高麗陶器 XXⅧ



(2)　新羅・高麗陶器 XXⅨ



新羅・高麗陶器共伴土師器（SK－01）



新羅・高麗陶器共伴土師器・黒色土器（ＳＫ-01）

福 岡 市

鴻 臚 館 跡 III

福岡市埋蔵文化財調査報告書
＜第355集＞

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
電話（福岡）711－4666
平成5年3月31日

印　　刷　株式会社玉川印刷所
福岡市中央区渋川3丁目18番11号
電話（092）531－1038